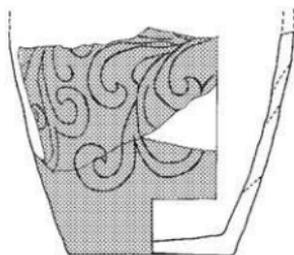


千葉市高品城跡Ⅱ



2021

大和ハウス工業株式会社
千葉市教育委員会
株式会社日本窯業史研究所

千葉市高品城跡Ⅱ



2021

大和ハウス工業株式会社
千葉市教育委員会
株式会社日本窯業史研究所

例 言

- 1 本書は、千葉市若葉区高品町 461-2 外で土地所有者から開発の委託を受けた、大和ハウス工業株式会社により計画された宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（高品城跡第 2 次発掘調査報告書）である。
- 2 発掘調査及び整理作業は、千葉市教育委員会が主体者となり、事業者の委託を受けた株式会社日本竊業史研究所がこれを支援した。
- 3 発掘調査の期間・面積・担当者は下記のとおりである。

発掘調査期間：平成 7 年 12 月 1 日～平成 8 年 3 月 29 日
調査対象面積：8,400㎡
担当者：寺門義範 倉田義広（千葉市教育委員会文化課）
調査機関：株式会社日本竊業史研究所 河野一也（主任）、吉岡秀範、宮重俊一、中山哲也、栗田欣行
- 4 調査記録及び出土遺物の整理・報告書作成作業は、平成 8 年 4 月 1 日から平成 9 年 3 月 31 日まで行った。
- 5 本書の執筆・基礎編集は吉岡、宮重、栗田が主にあたり、河野がこれを総括し、補足編集を水野順敏が行った。
- 6 出土遺物の写真撮影及び焼付けは、大門直樹氏（国士館大学文学部技術職員）が行った。
- 7 本調査で得られた調査記録及び出土遺物等の資料は、千葉市埋蔵文化財調査センターに保管している。
- 8 現地調査から報告書刊行に至るまで、下記の関係機関・各位より御指導と御助力を賜った。御芳名を記して深く謝意を表する。（順不同、敬称略）

千葉県教育委員会、千葉市教育委員会文化財課、(財)千葉市文化財調査協会、大和ハウス工業(株)、国士館大学考古学研究室、藤代榮一、大門直樹、山下守昭

凡 例

- 1 本書挿図中の第 1・60 図は、『千葉市高品城跡 I』の第 6・150 図を複製・縮小して使用した。第 2 図は、昭和 43 年国土地理院発行の 1/25,000 地形図『千葉東部』を部分複製し加筆した。
- 2 遺構挿図の縮尺は 1/60 を基本とし、中世柱穴列・道路状遺構及び 1～3 号礎石建物跡は 1/120、1・2 号溝跡 1/80、3 号礎石建物跡副跡 1/30、1 号塚石塔・石祠 1/8。

遺物挿図の縮尺は 1/3 を基本とし、石臼・石塔類 1/4、銭貨・土人形・泥めんこ 2/3 で掲載し、各図中にスケールを明示した。
- 3 遺構挿図中のスクリーントーンは各図中に示してある。遺物挿図中の断面スミベタは須恵器、砥石断面の矢印は研ぎ面の範囲、は陶器施軸範囲を示す。

目 次

ごあいさつ

例言 凡例 目次 引用・参考文献

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の位置と環境	2
第3節 調査の経過	2
第4節 調査の方法	2
第Ⅱ章 遺構と遺物	5
第1節 古墳時代の遺構と遺物	5
竪穴住居跡	5
3号溝跡	5
第2節 中世の遺構	7
地下式坑	7
中世柱穴列、道路状遺構	12
大型竪穴跡	12
竪穴跡	12
土坑	14
井戸跡	18
埋設桶	20
土塁	20
堀跡	20

溝跡	20
第3節 近世以降の遺構	45
礎石建物跡	45
近世1号掘立柱建物跡	45
1号塚	45
土塁状遺構	46
炭窯跡	46
近世土坑	46
1号池跡	47
第4節 中・近世の遺物	59
土器	59
陶磁器	59
石製品	59
金属製品	60
土製品	60
第Ⅲ章 まとめ	95
第1節 土地利用の変遷	95
第2節 地下式坑について	96

写真図版
報告書抄録・奥付

表 目 次

第1表 出土遺物観察表（土師器）
第2表 地下式坑一覧表
第3表 竪穴跡一覧表
第4表 土坑一覧表
第5表 井戸跡一覧表

第6表 出土遺物観察表（土器・陶磁器）
第7表 出土遺物観察表（石製品）
第8表 砥石計測表
第9表 銭貨一覧表
第10表 出土遺物観察表（土製品）

挿 図 目 次

- 第1図 調査区位置図 (1:3,000)
第2図 高品城跡と周辺遺跡 (1:25,000)
第3図 調査区全体図 (1:800)
第4図 1・2号竪穴住居跡・3号溝跡、
1・2号竪穴住居跡出土遺物
第5図 1～3号地下式坑
第6図 4号地下式坑
第7図 5・8号地下式坑
第8図 6号地下式坑
第9図 7・9号地下式坑
第10図 10・11号地下式坑
第11図 12・13号地下式坑
第12図 14・15号地下式坑
第13図 16・17号地下式坑
第14図 18・21号地下式坑
第15図 19・20号地下式坑
第16図 中世柱穴列、道路状遺構
第17図 大型竪穴跡
第18図 1・2・4～6号竪穴跡
第19図 3・7・10号竪穴跡
第20図 8・9号竪穴跡
第21図 中世土坑 (1)
第22図 中世土坑 (2)
第23図 中世土坑 (3)
第24図 1～3・5・6・8～13号井戸跡
第25図 1・2号埋設桶
第26図 4・7号井戸跡
第27図 1・2号溝跡
第28図 1～3号礎石建物跡、1・2号礎石
建物跡断面図
第29図 3号礎石建物跡カマド跡・厠跡・
断面図
第30図 近世1号掘立柱建物跡
第31図 1号塚・石塔・石祠 (1)
第32図 1号塚石祠 (2)
第33図 1号塚石祠 (3)
第34図 3・4号土塁状遺構
第35図 1号炭窯跡
第36図 近世1・3・4号土坑
第37図 近世2・5号土坑
第38図 1号池跡
第39図 4・6 (1)号地下式坑出土遺物
第40図 6 (2)・7・10号地下式坑出土
遺物
第41図 16・18号地下式坑出土遺物
第42図 19号地下式坑・大型竪穴跡 (1)
出土遺物
第43図 大型竪穴跡出土遺物 (2)
第44図 大型竪穴跡出土遺物 (3)
第45図 1・3・5号竪穴跡出土遺物
第46図 8・9号竪穴跡・19・20号土坑・
4・11号井戸跡出土遺物
第47図 1号溝跡・1～3号礎石建物跡・
1号塚 (1) 出土遺物
第48図 1号塚 (2)・1号池跡・近世
2・3号土坑出土遺物
第49図 3号土塁状遺構出土遺物
第50図 4号土塁状遺構出土遺物
第51図 グリット出土遺物 (1)
第52図 グリット出土遺物 (2)
第53図 グリット出土遺物 (3)、硯
第54図 砥石
第55図 石臼、石塔類 (1)
第56図 石塔類 (2)
第57図 銭貨 (1)
第58図 銭貨 (2)
第59図 土人形、泥めんこ
第60図 高品城跡概念図 (1:3,000)
第61図 地下式坑集成図
第62図 高品城跡遺構配置図 (1:600)

写真図版目次

- 図版 1 A.調査区遠景（東から） B.調査区遠景（東から）
- 図版 2 A.調査区遠景（西から） B.調査区遠景（東側、東から）
- 図版 3 A.1号竪穴住居跡、3号溝跡、1号土塁（北から） B.1号地下式坑（東から）
C.3号地下式坑（南から） D.4号地下式坑（南西から） E.4号地下式坑北壁工具痕（南から） F.4号地下式坑遺物出土状態（南西から） G.6号地下式坑（南から） H.6号地下式坑室部（南西から）
- 図版 4 A.6号地下式坑北壁工具痕（南から） B.8号地下式坑（南西から） C.8号地下式坑室部（西から） D.9号地下式坑（北から） E.10・12号地下式坑（南東から） F.10号地下式坑（南から） G.12号地下式坑（南から） H.11号地下式坑遠景（北東から）
- 図版 5 A.11号地下式坑（東から） B.13号地下式坑（南西から） C.14号地下式坑室部（南から） D.16号地下式坑（南から） E.16号地下式坑室部（西から） F.17号地下式坑（南から） G.18号地下式坑（南東から） H.18号地下式坑竪坑部足掛け穴（北から）
- 図版 6 A.19号地下式坑竪坑部（南東から） B.19号地下式坑室部（南東から） C.20号地下式坑（南東から） D.21号地下式坑（北東から） E.大型竪穴跡（北西から） F.大型竪穴跡土層（北西から） G.中世柱穴列、道路状遺構（北から） H.8号竪穴跡（南から）
- 図版 7 A.3号竪穴跡（東から） B.4号竪穴跡（南東から） C.5号竪穴跡（南東から） D.7号竪穴跡（南から） E.9号竪穴跡（南から） F.10号竪穴跡（南東から） G.1号土坑（南から） H.11号土坑（南から）
- 図版 8 A.9号土坑（北西から） B.15～18号土坑（北西から） C.25号土坑（南東から） D.62号土坑（西から） E.5号井戸跡（南東から） F.1号井戸跡（東から） G.2号井戸跡（南から） H.3号井戸跡（南から）
- 図版 9 A.6号井戸跡（西から） B.9号井戸跡（南から） C.1号埋設桶（南東から） D.2号埋設桶（南東から） E.1～3号礎石建物跡全景（南から） F.1～3号礎石建物跡全景（北から） G.1～3号礎石建物跡全景（西から） H.1～3号礎石建物跡貝殻・礎石確認状態（南西から）
- 図版 10 A.1・2号礎石建物跡・礎石掘方－へ4（南から） B.1・2号礎石建物跡・礎石掘方－ヌ1（南から） C.1・2号礎石建物跡・礎石掘方－ト3（南から） D.1・2号礎石建物跡・礎石掘方－リ1、3号礎石建物跡・礎石掘方－へ1（東から） E.1・2号礎石建物跡・礎石掘方－リ1（南東から） F.3号礎石建物跡・礎石掘方－イ4（南から） G.3号礎石建物跡・礎石掘方－イ7（南から） H.3号礎石建物跡・礎石掘方－ロ4（南から）

- 図版11 A.3号礎石建物跡・礎石掘方ーリ6（東から） B.3号礎石建物跡・礎石掘方ーリ7（南から） C.3号礎石建物跡カマド跡（南東から） D.3号礎石建物跡厩跡全景（南東から） E.3号礎石建物跡厩跡小便器出土状態（東から） F.3号礎石建物跡厩跡甕埋設状態（東から） G.3号礎石建物跡厩跡土瓶出土状態（東から） H.近世2号土坑（北から）
- 図版12 A.近世5号土坑（北から） B.1号塚（南西から） C.3号土塁状遺構（北東から） D.3号土塁状遺構南側貝殻分布状態（北西から） E.3号土塁状遺構土層断面（南から） F.3号土塁状遺構土層断面（南東から） G.整地層トレンチ（南から） H.整地層トレンチ断面（東から）
- 図版13 1・2号堅穴住居跡・4・6（1）号地下式坑出土遺物
- 図版14 6号地下式坑出土遺物（2）
- 図版15 18号地下式坑・大型堅穴跡（1）出土遺物
- 図版16 大型堅穴跡出土遺物（2）
- 図版17 1・3・5・8・9号堅穴跡・19・20号土坑・11号井戸跡出土遺物
- 図版18 1～3号礎石建物跡・1号塚・1号池跡・近世2・3号土坑・3号土塁状遺構出土遺物
- 図版19 4号土塁状遺構・グリット（1）出土遺物
- 図版20 グリット出土遺物（2）
- 図版21 硯、砥石、土人形、泥めんこ
- 図版22 銭貨

【引用・参考文献】

- 梁瀬祐一 1997 『千葉市高品城跡1』 大和ハウス工業(株)・(財)千葉市文化財調査会
- 井上哲朗 1995 『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告1～旧下総地域～』 千葉県教育委員会
千葉市教育委員会 1991 『埋蔵文化財調査報告書(高品城跡)他』 千葉市教育委員会
- 千葉市史編纂委員会 1974 『千葉市史』第1巻
- 千葉市史編纂委員会 1976 『千葉市史 資料編1原始古代中世』
- 千葉市史編纂委員会 1993 『千葉市図誌』下巻
- 中野晴久 1994 『赤羽・中野「生産地における福年について」』『全国シンポジウム「中世常滑焼をめぐって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所
- 下中邦彦編 1984 『やきもの事典』(株)平凡社
- 矢部良明編 2002 『角川 日本陶磁大事典』(株)角川書店
- (財)瀬戸市埋蔵文化財センター編 2002 『江戸時代の瀬戸窯』
- (財)瀬戸市埋蔵文化財センター編 2003 『江戸時代の美濃窯』
- 東国中世考古学研究会編 2009 『中世の地下室』高志書院

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

本調査は、事業計画地15,100㎡のうち、平成7年度に（財）千葉市文化財調査協会による第1次調査に引き続き実施した調査である。確認調査は、対象範囲8,400㎡について、（財）千葉市文化財調査協会が平成7年8月3日から8月28日の日程で実施し、その結果、調査面積全域を本調査対象範囲として継続協議が必要の旨、事業者あてに通知した。

協議の結果、対象範囲全域について、記録保存のための本調査を実施することになり、事業者からの依頼を受けた株式会社日本産業史研究所の支援のもと、千葉市教育委員会が主体となり、同年12月1日から発掘調査を開始した。

調査の結果、今次調査区からは古墳時代の竪穴住居跡、溝跡、城跡・墓域に伴う遺構として地下式坑、中世柱穴列、道路状遺構、大型竪穴跡、竪穴跡、土坑、井戸跡、埋設桶、土塁、堀跡、溝跡などが確認された。さらに、近世以降と考えられる礎石建物跡、掘立柱建物跡、塚、土塁状遺構、炭窯跡、近世土坑、池跡なども検出された。遺物は古墳時代～中・近世、近代にわたるものが出土した。



第1図 調査区位置図(1:3,000)

第2節 遺跡の位置と環境（第2図）

高品城跡はJR総武本線東千葉駅より都賀駅方面へ約1.4km向かった、千葉県千葉市若葉区高品町461-2外に所在する。同市若葉区高品町付近は市内の北東部にあたり、下総台地の一部に位置する。遺跡は東京湾へ注ぐ都川の河口付近で合流する霞川の上流域に開析された通称「廿五里支谷^{つうごへいとしごく}」開口部左岸の小支谷が複雑に入り込んだ舌状の台地に位置し、標高18～24mの南側斜面にある。

なお、未調査であるが、同じ丘陵の東側に西向遺跡、南東側に舌田遺跡、沢を挟んだ南側には南台遺跡などがある。中世以降には霞川流域は生実から佐倉へ抜ける交通の要所となり、本遺跡を含め廿五里城跡、南屋敷遺跡などの城館跡が所在する。また、遺跡の北に隣接して春日神社、南側には元亀2年（1571）造立の路の入る薬師如来像を本尊とする等覚寺（真言宗豊山派）がある。遺跡の周辺環境については第1次調査の報告書「千葉市高品城跡I」に詳しいので参照されたい。

第3節 調査の経過

表土除去は、土塁・塚部分については人力で、その他の部分に関しては重機で行うこととし、重機による表土除去は、南側平坦部、北東丘陵部、北側方形区画部分、1号土塁周辺部、北側斜面部分の順に行った。

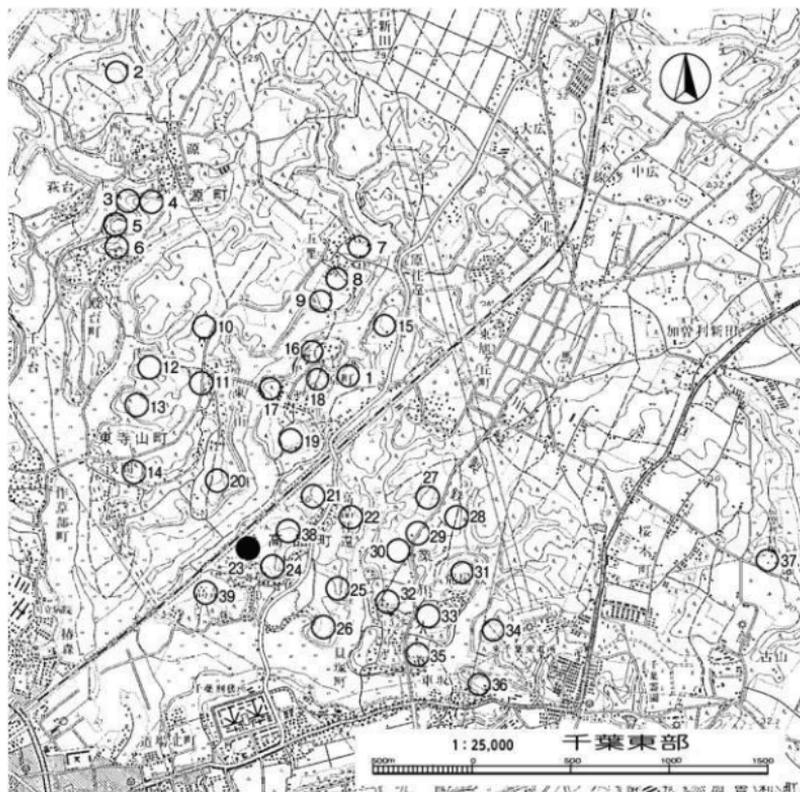
調査は表土除去にあわせて、南側平坦部、北東丘陵部、北側方形区画部分、1号土塁周辺部、北側斜面部分の順に行い、南側平坦部で礎石建物跡、地下式坑、井戸跡、堅穴跡、土坑、埋設桶などを確認した。また、北東丘陵部では地下式坑、堅穴跡、土坑、北側方形区画内では井戸跡、1号土塁周辺平坦部では地下式坑、北側斜面部付近では地下式坑、堅穴跡、土坑、井戸跡などが確認された。また、1号土塁上からは古墳時代の堅穴住居跡、溝跡が確認された。

なお、南側平坦部で確認された礎石建物跡は整地層上に建てられていたことから、同跡調査終了後整地土を除去し、下部の調査を実施した。

第4節 調査の方法

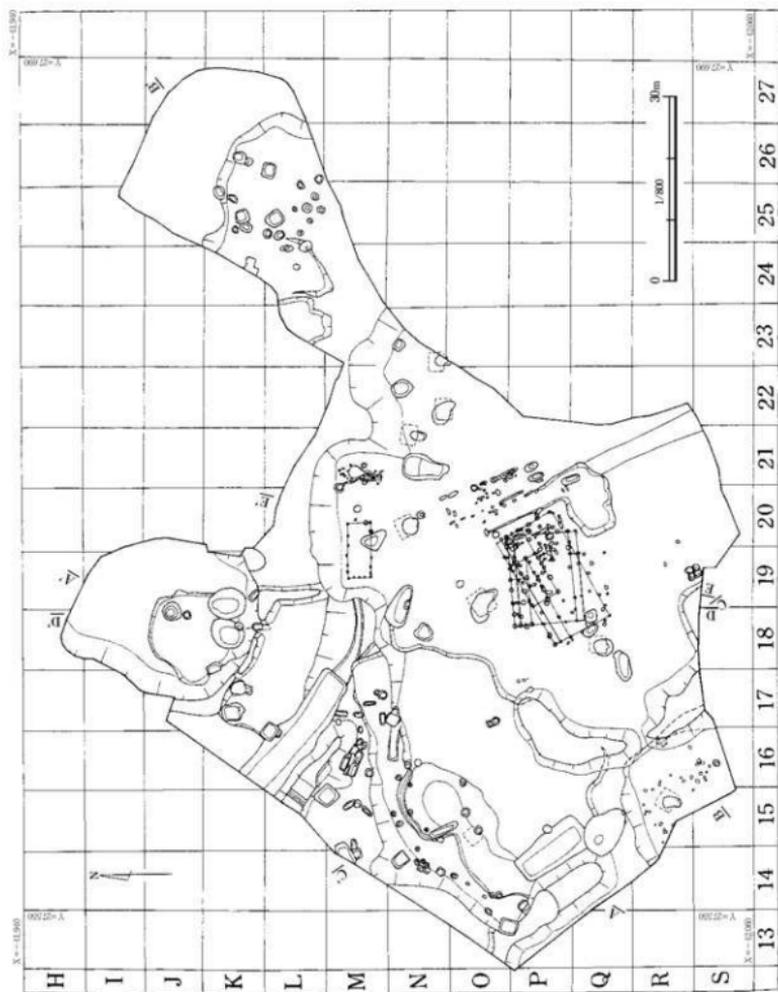
調査区は、平成6年度に設定した国家座標（日本測地系）に基づく10×10mグリッドで分割し、南北軸はアルファベット、東西軸はアラビア数字で表記した。また、遺物を細かく採取する際には一辺10mのグリッドをさらに2mグリッドに25分割した。

調査の記録はこのグリッドを利用した遺方実測を基本とし、縮尺1/20で作図した。全体図は空中写真測量による。写真記録は、35mm判の白黒、カラーリバーサルフィルムを使用した。撮影に際しては三脚及び大型脚立を利用した。



- | | | | | |
|------------|------------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 山王遺跡 | 2. 餅ヶ崎遺跡 | 3. 南屋敷遺跡 | 4. 殿台堀込遺跡 | 5. 高津辺田遺跡 |
| 6. 殿台城跡 | 7. 廿五里北貝塚 | 8. 廿五里貝塚 | 9. 廿五里城跡 | 10. 東寺山貝塚 |
| 11. 桶毛台東遺跡 | 12. 桶毛台遺跡 | 13. 海老遺跡 | 14. 戸張作遺跡 | 15. 根崎遺跡 |
| 16. 原遺跡 | 17. 台畑遺跡 | 18. 谷津頭遺跡 | 19. 殿山遺跡 | 20. 石神遺跡 |
| 21. 宮腰遺跡 | 22. 高品第2遺跡 | 23. 高品城跡 | 24. 舌田遺跡 | 25. 東田遺跡 |
| 26. 貝堤遺跡 | 27. 草刈場北遺跡 | 28. 貝塚後遺跡 | 29. 草刈場貝塚 | 30. 向ノ内遺跡 |
| 31. 東辺田遺跡 | 32. 荒屋敷西遺跡 | 33. 荒屋敷貝塚 | 34. 姥ヶ作遺跡 | 35. 台門貝塚 |
| 36. 車坂遺跡 | 37. 加曾利貝塚 | 38. 西向遺跡 | 39. 南台遺跡 | |

第2図 高品城跡と周辺遺跡 (1:25,000)



第3図 調査区全体図 (1:800)

第Ⅱ章 遺構と遺物

確認された遺構・遺物は、古墳時代の集落、中世の墓域、城跡、近世以降の集落である。

第1節 古墳時代の遺構と遺物

L15・16区で、1号掘跡（中世）を掘削した際の削残しの1号土塁の上面に、竪穴住居跡2軒と溝跡1条の一部を確認した。

竪穴住居跡

削り出しの1号土塁の上面に2軒確認したが、1号竪穴住居跡は北と南側、2号竪穴住居跡は南側が壊され、1号竪穴住居跡は床面のみを確認した。

1号竪穴住居跡（第4図、第1表、図版3・13）

竪穴住居跡は溝と重複し、本跡が古い。床面の一部約350×500cmを確認し、炉跡と思われる径50cmの焼土が見られた。柱穴などの付属施設は認められなかった。出土遺物より、古墳時代前期の竪穴住居跡と考えられる。

遺物は、床面・覆土面より土師器甕・高坏などが出土した。

2号竪穴住居跡（第4図、第1表、図版13）

竪穴住居跡は壁と床面の一部を確認した。現存で平面の規模は約182×365cm、壁高は約36cmである。南東部に炉跡の痕跡が認められた。床面は軟弱で凹凸が見られ、柱穴などの付属施設は見られなかった。出土遺物より、古墳時代前期の竪穴住居跡と考えられる。

遺物は、覆土中より土師器甕・高坏などが出土した。

3号溝跡（第4図、図版3）

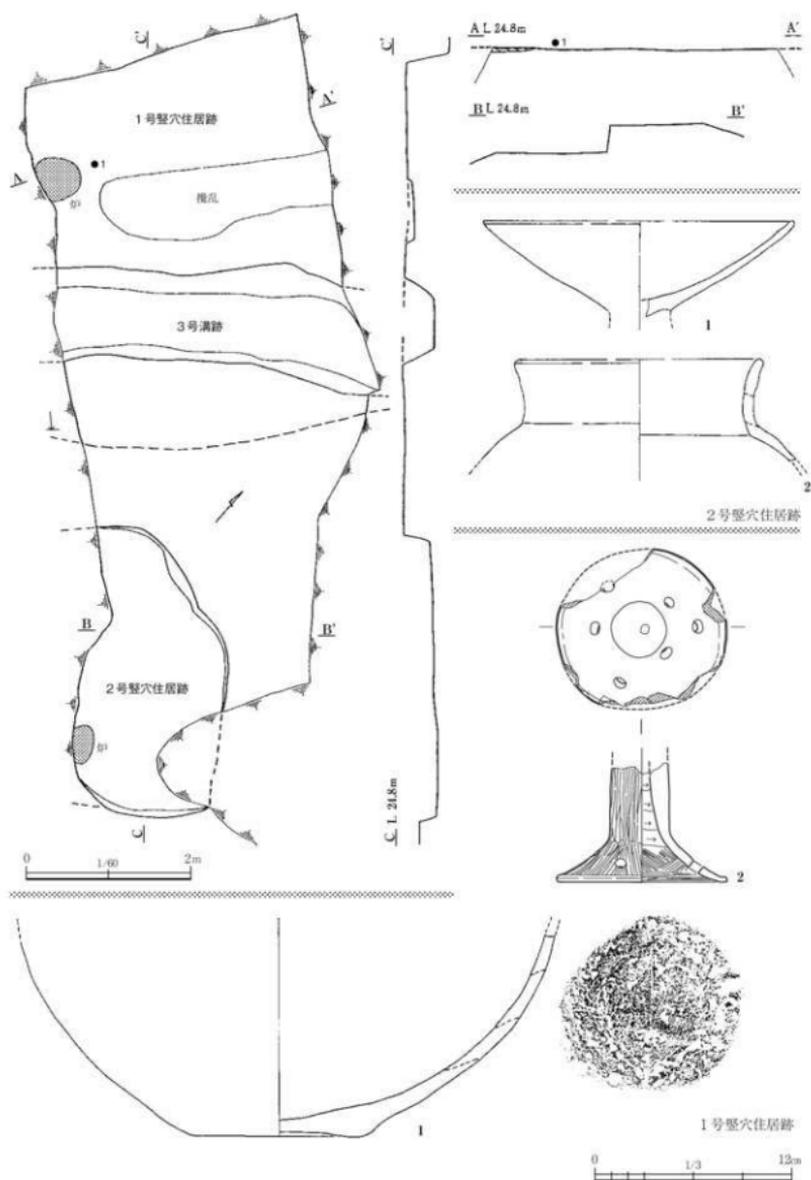
溝跡は1号竪穴住居跡と重複し、本跡が新しい。幅109～129cm、深さ31～35cmで南西から北東方向に約390cm延びている。

出土遺物はなかったが、覆土の状態などから該期の遺構と考えられる。

第1表 出土遺物観察表（土師器）

[] 現存値、() 推定値、単位 cm

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1号竪穴住居跡											
1	土師器	甕	—	[125]	108	粗砂粒	内・外：明褐色	普通	体部内面ヘラナゲ、同外面ハケ目後ヘラ削り、底部外面木葉痕	床直	
2	土師器	高坏	—	[73]	104	長石・石英	内：黄褐色 外：橙色	普通	頸部外面縦ミガキ、同内面横にヘラナゲ、底部外面斜めミガキ、内面横ハケ目、透かし孔キヤ	覆土	
2号竪穴住居跡											
1	土師器	高坏	(188)	[59]	—	長石・石英	内：黒色 外：明赤褐色	良好	内面横ナゲ後黒色処理、外面横ナゲ仕上げ	覆土	
2	土師器	甕	(146)	[63]	—	長石少量・石英	内・外：淡赤褐色	良好	内・外面横ナゲ仕上げ	覆土	



第4図 1・2号壑穴住居跡・3号溝跡、1・2号壑穴住居跡出土遺物

第2節 中世の遺構

地下式坑、中世柱穴列、道路状遺構、大型堅穴跡、堅穴跡、土坑、井戸跡、埋設桶、土壘、堀跡、溝跡などを確認した。

地下式坑

調査区のほぼ全域で21基を確認した。地下式坑には大型堅穴跡、墓跡と思われる土坑、井戸跡など同時期の遺構が近接している。

1号地下式坑（第5図、第2表、図版3）

K 24区に位置し、東に堅坑部、西に室部がある。堅坑部底面は南北約90cm、東西約90cmの方形でほぼ平ら、確認面までの高さは約120cm。壁は北壁が約10°、南壁が約20°外傾する。入口部底面は、南北約55cm、東西約50cmの不整形でほぼ平ら。室部底面との高低差は約50cmである。室部は、約2分の1が調査区外のため調査出来なかったが、現状より南北約180cm、現存東西長約105cmの長方形と推定し得る。底面はほぼ平らで、北壁は垂直、南壁は内湾気味で、底面から確認面までの高さは約220cmであった。遺物の出土はなかった。

2号地下式坑（第5図、第2表）

1号地下式坑の東側、K 25区に位置し、西に堅坑部、東に室部がある。堅坑部底面は南北約95cm、東西約130cmの長方形で、室部に向かって約10°の傾斜で下降し、さらに約70°の傾斜と約50cmの高低差をもって室部に至る。底面から確認面までの高さは約80cm。室部底面は南北約170cm、東西は南壁側が約110cm、北壁側が約150cmの南北方向に広がる台形でほぼ平ら。壁は、南壁と奥壁がともに約10°外傾し、北壁は垂直に立ち上がっている。天井部は落下していたが、壁際の遺存状態より高さは約100cmと推定し得る。また、確認面までの高さは約125cmであった。遺物の出土はなかった。

3号地下式坑（第5図、第2表、図版3）

2号地下式坑の東側、K 26区に位置し、南に堅坑部、北に室部がある。堅坑部底面は南北約85cm、東西87cmの楕円形。側壁はともに約30°外傾し、底面は入口部に向かって僅かに傾斜し、底面から確認面までの高さは約20cmであった。入口部底面は、南北約35cm、東西約50cmの長方形で、高低差約85cmで室部に向かって約45°傾斜している。室部は南北約170cm、東西約150cmの長方形で、西壁は垂直、東壁は約5°、奥壁は約10°外傾し、底面はほぼ平ら。また、室部底面には平面が20×16～38×34cm、深さ12～15cmの小穴が5基認められた。天井部は落下していたが、壁際の遺存状態より高さは約100cmと推定し得る。また、確認面までの高さは約180cmであった。遺物の出土はなかった。

4号地下式坑（第6・39図、第2・6表、図版3・13）

5号地下式坑の東側、N 22・23、O 23区に位置し、南に堅坑部、北に室部があるが、

堅坑部と室部の一部が調査区外のため室部のみ調査した。堅坑部の規模は不明であるが、室部は東西約300cm、南北約240cmの不整長方形と推定し得る。底面は、東西両壁より緩やかに中心部に向かい下降し、奥壁側を除く三方の壁下には幅約10～20cmの溝が認められた。壁は東壁が垂直、西壁が約5°外傾、奥壁が内湾気味で、天井部の高さは室部底面から約170cm、確認面までは約360cmであった。

遺物は、室部底面付近より五輪塔空風輪、覆土中より中世～近代にわたる遺物が出土し、その一部を掲載した。

5号地下式坑（第7図、第2表）

4号地下式坑の西側、N・O22区に位置し、南に堅坑部、北に室部がある。堅坑部南壁は約70°傾斜して室部に向かい、その傾斜面には底面から70～130cmの間に3個の足掛け穴が階段状に掘り込まれている。室部は南北約240cm、東西約290cmの長方形で、側壁は垂直、底面はほぼ平ら。室部の周囲には幅約10～30cm、深さ約10～15cmの溝が掘られている。天井部は落下していたが、遺存状態から高さは約170cmと推定し得る。底面から確認面までの高さは約310cmであった。遺物の出土はなかった。

6号地下式坑（第8・39・40・54図、第2・6・8表、図版3・4・13・14）

5号地下式坑の北側、N21・22区に位置し、南に堅坑部、北に室部がある。堅坑部南壁は約10°傾斜し、5個の足掛け穴を確認した。足掛け穴はすべて垂直方向に対して水平に掘られ、径20～20×80cm、深さ5～20cmで階段状であった。室部は南北約210cm、東西約280cmの長方形で側壁、奥壁は5°内傾している。底面から天井部までの高さは約245cm、確認面までは約375cmであった。

遺物は、覆土中より土器、砥石、宝篋印塔の破片などが出土し、その一部を掲載した。

7号地下式坑（第9・40図、第2・6・8・10表、図版21）

Q18区に位置し、南に堅坑部、北に室部がある。堅坑部は天井部と共に崩れているが、遺存状態から直径140cmの円形と推定し得る。入口部は南北約70cm、東西約140cmの半円形で、底面はほぼ平ら。確認面までの高さは約200cm。入口部から室部にかけては、高低差約130cmで約75°傾斜し、傾斜直下の室部底面には南北約20cm、東西約140cm、深さ約35cmの溝が認められた。室部は南北約240cm、東西約280cmの不整方形で、側壁・奥壁は垂直、底面は奥壁から入口部に向かって緩やかに傾斜している。天井部の高さは、壁の遺存状態から約250cmと推定し得る。確認面までの高さは約325cmであった。

遺物は、覆土中より中世～近代の土器、陶磁器、砥石、土製品（泥めんこ）などが出土し、その一部を掲載した。

8号地下式坑（第7・57図、第2・8～10表、図版4・21・22）

R15区に位置し、南に堅坑部、北に室部がある。堅坑部から室部の3分の2が崩落していた。入口部は、南北約140cm、東西約110cmの長方形で、傾斜して室部になる。傾斜は室部より約55°、中位より約80°で入口になる。室部は南北約265cm、東西約315cmの

隅丸長方形。奥壁・両側ともほぼ垂直に立ち上がる。底面奥壁側には東西別々に、不整長方形の掘り込みがある。東は南北約110cm、東西約140cmで、深さは底面より約26cm。西は南北約110cm、東西約130cmで、深さは底面より約18cm。底面から天井までの高さは推定120cm。確認面までの高さは約280cmであった。

遺物は、覆土中より中世～近代にわたる土器、陶磁器、砥石、銭貨（北宋銭）、土製品などが出土し、その一部を掲載した。

9号地下式坑（第9図、第2表、図版4）

10号地下式坑の東側、K・L18区に位置する。北に竪坑部、南に室部があるが、竪坑部は削平されていた。室部は南北約260cm、東西約110cmの不整長方形。壁は東壁が約10°、西壁が約5°外傾し、奥壁は垂直であった。底面は奥壁際から入口部に向かって50cm程までのところが約10°傾斜し、あとはほぼ平ら。天井部は残存しないが、奥壁の遺存状態から天井部までの高さは約150cmと推定し得る。確認面までの高さは約235cmであった。

遺物は、覆土中より近世の陶磁器が出土した。

10号地下式坑（第10・40図、第2・6表、図版4）

12号地下式坑の東側、K17区に位置し、南に竪坑部、北に室部がある。竪坑部は南北約45cm、東西約80cmの不整楕円形で、底面はほぼ平ら。側壁は約10°外傾し、底面から確認面までの高さは約142cmであった。入口部底面は、一部崩れているが遺存状態から南北約50cm、東西約70cmの長方形と推定され、室部に向かって約35°傾斜している。室部は南北約215cm、東西約260cmの長方形で、東壁が約10°内傾、西壁が内湾気味、奥壁は約5°外傾し、底面はほぼ平ら。確認面までの高さは約235cmである。天井部は大部分が落下していたが、遺存状態より約150cmと推定し得る。また、室部底面には約45×25cm、深さ約15cmの掘り込みが1基確認された。

遺物は、覆土中より中世～近代の陶磁器が少量出土し、うち1点を掲載した。

11号地下式坑（第10図、第2表、図版4・5）

M16・17区に位置し、東に竪坑部、西に室部がある。竪坑部は直径約80cmの円形で、側壁は約5°外傾し、底面はほぼ平ら。底面から確認面までの高さは現状で約150cm、土塁部分を含めると約425cmとなる。室部底面は竪坑部底面と高低差がなく、南北約70cm、東西約250cmの長方形で、側壁は約5°、奥壁は約15°外傾している。天井部はアーチ状に残存し、高さは入口側で約120cm、奥壁側で約60cmであった。

遺物は、覆土中より近世の磁器碗が出土した。

12号地下式坑（第11図、第2表、図版4）

10号地下式坑の西側、K17区に位置し、南に竪坑部、西に室部がある。竪坑部はほとんど原形をとどめていないが、現状では室部との高低差が約110cmで約70°傾斜している。室部は東西約220cm、南北は東壁側で約170cm、西壁側で約220cmの台形で、壁は東壁と奥壁が約15°、西壁が約10°外傾し、底面はほぼ平ら。天井部は落下しているが、壁の遺

存状態から約140cmと推定し得る。底面から確認面までは約220cmであった。

遺物は、覆土中より五輪塔の地輪が出土した。

13号地下式坑（第11図、第2表、図版5）

12号地下式坑の南側、K16・17、L16・17区に位置し、南に堅坑部、北に室部がある。堅坑部は南北約50cm、東西約70cmの長方形で西壁は約10°、東壁は約5°外傾し、底面は緩やかに室部に向かい、確認面までの高さは約130cmであった。入口部から室部にかけては高低差約40cmで約65°傾斜している。室部は南北約200cm、東西約240cmの長方形で、底面は入口部から中央にかけてはほぼ平らで、中央から奥壁にかけては約5°傾斜している。東壁は約20°、西壁と奥壁は約5°外傾し、底面から確認面までは約170cmであった。

遺物は、覆土中より近世～近代の陶器が出土した。

14号地下式坑（第12図、第2表、図版5）

20号地下式坑の東側、L15・16、M15・16区に位置する。1号土塁と重複し本跡が古い。堅坑部と天井部は残存しないが、南側に堅坑部があったと推定される。室部は南北約260cm、東西約230cmの不整形で底面はほぼ平ら。室部の四隅には礎が据えられていたが、これらの石は土が柔らかく脆いことから、室内補強のための支柱用の礎石として使用されたと考えられる。あるいは、天井も木材で架けてあった可能性もある。底面から天井部までの高さは遺存状態から推定約140cm、確認面までは約280cmであった。

遺物は、南東隅より五輪塔地輪が出土した他は、何も出土しなかった。

15号地下式坑（第12図、第2表）

調査区の西端、O・P13区に位置する。堅坑部は削平されて残存しないが、東側にあったと推定される。室部は南北約230cm、東西約230cmの方形で、入口部の壁際に約50×40cm、深さ約35cmの掘り込みがあり、奥壁からこの小穴に向かって緩やかに傾斜している。天井部は残存しないが、遺存状態から高さ約150cmと推定され、確認面までは約280cmであった。遺物の出土はなかった。

16号地下式坑（第13・41図、第2・6表、図版5）

O18・19区に位置し、南に堅坑部、北に室部がある。堅坑部は南北約130cm、東西約120cmの楕円形。室部との高低差は約65cmで、約85°傾斜し、南側壁面には階段状の掘り込みが確認された。側壁は約5°外傾している。室部は南北約330cm、東西約370cmの長方形と推定され、壁は東壁が約5°内傾、奥壁は約10°外傾している。天井部までの高さは、壁際の遺存状況より底面から推定約250cm、確認面までは約370cmであった。

遺物は、中世～近代の陶磁器が出土し、その一部を掲載した。

17号地下式坑（第13図、第2表、図版5）

N17区に位置し、東に堅坑部、西に室部がある。堅坑部は南北約80cm、東西約70cmの不整形で、底面はほぼ平ら。壁は南壁が垂直、北壁が約5°外傾し、確認面までの高

さは約95cm。室部は南北約230cm、東西約180cmの長方形で側壁は内湾気味、奥壁は約5°内傾し、入口部から室部にかけては高低差約90cmで約60°傾斜している。天井部までの高さは大部分が落下していたが、遺存状態より推定約140cm、確認面までの高さは250cmであった。

遺物は、覆土中より近世の土器類が出土した。

18号地下式坑（第14・41・57図、第2・6・8・9表、図版5・15・22）

Q18地区に位置し、南に竪坑部、北に室部がある。竪坑部は壁際の遺存状況より、南北約40cm、東西約50cmの不整形と推定され、底面はほぼ平らで、確認面までの高さは約120cm。入口部から室部にかけては高低差約150cmで、約65°傾斜しており、足掛け穴が認められた。足掛け穴は3個で傾斜面の中央に掘り込んである。室部は南北約275cm、東西約285cmの方形で、東壁は内湾気味、西壁は垂直、奥壁は約5°内傾し、底面はほぼ平ら。天井部までの高さは約190cmと推定され、確認面までの高さは335cm。また、入口部中央に90×50cm、深さ約30cmの掘り込みが認められた。

遺物は、覆土中より中世～近代にわたる土器、陶磁器、砥石、銭貨（寛永通宝）などが多量に出土し、その一部を掲載した。

19号地下式坑（第15・42図、第2・6表、図版6）

O15区に位置し、南に竪坑部、北に室部がある。竪坑部は南北約50cm、東西約80cmの長方形で底面はほぼ平ら。壁は垂直で、確認面までの高さは約260cm、北壁に5基、南壁に3基で、深さ約10cmの足掛け穴が認められた。入口部は南北約50cm、東西約80cmの長方形で底面はほぼ平らで、室部底面との高低差は約130cmであった。室部は南北約260cm、東西約320cmの長方形。壁は垂直で底面はほぼ平らで、天井部までの高さは約220cmでアーチ状であった。また、底面から確認面までの高さは約390cmであった。

遺物は、覆土中より中・近世の土器、陶磁器が出土し、土器1点を掲載した。

20号地下式坑（第15図、第2表、図版6）

14号地下式坑の西側、M14・15区に位置し、南に竪坑部、北に室部がある。竪坑部は南北約150cm、東西約120cmの長方形、側壁は約10°外傾し、底面はほぼ平らで底面から確認面までの高さは約90cm。室部は南北約190cm、東西約250cmの長方形で側壁は東壁が約25°、西壁が約10°外傾し、入口部と室部底面の高低差は約40cmでほぼ平ら。底面から確認面までの高さは約190cmであった。遺物の出土はなかった。

21号地下式坑（第14図、第2表、図版6）

P14区に位置し、西側に15号地下式坑が近接している。東に入口、西に室部と思われるが、入口部は遺存していなかった。室部底面は東西約130cm、南北約170cmの長方形。入口側に55×30cm、深さ約20cmの掘り込みがある。東西壁はやや外傾し、奥壁は内湾している。底面から天井までの高さは推定80cm、確認面までの高さは約115cmであった。遺物の出土はなかった。

中世柱穴列、道路状遺構（第16図、図版6）

中世柱穴列

O 20・21、P 20・21区において、径30～70cm、深さ20～70cmの小穴50基程からなる小穴群を確認した。掘立柱建物跡を想定して追求したが、南北に並ぶ3～4間の柱穴列として捉えることは出来たが、建物跡として捉えることは出来なかった。それぞれの柱間は180～200cm程であった。出土遺物などから帰属時期を明確にすることは出来なかったが、覆土の状態などから該期の遺構と推定した。墓域に関連する施設とも、城跡に関連する施設とも判断し難く、性格は不明である。

道路状遺構

P 20・21区において、幅約260cm、長さ約600cmの範囲に所謂「波板状圧痕」が確認された。それぞれの圧痕は長さ約260cm、幅約30～70cmで、道路に直交する形で並んで認められた。前記の柱穴列と重複しこれを切っているが、遺物などから帰属時期を明確にすることは出来なかった。近年まで利用されていた、南東斜面を台地頂部に向かって延びる道路が至近を通っており、左脇に1～3号礎石建物跡、延長上には近世掘立柱建物跡が所在し、古くから利用されていたと考えられる。

大型竪穴跡（第17・42～44・54・56・57図、第6～9表、図版6・15・16・21・22）

P 14・15、Q 14・15区に位置する。当初4号土塁（状遺構）に伴う堀跡と思われたが、確認状況から大型の竪穴跡と考えられる。東壁を5号井戸跡、南壁の一部を1号池跡に切られ、西壁は4号土塁状遺構と接する。

平面形は約620×約1,200cmの隅丸長方形で、深さは114cmである。覆土は8層に分層され、人為的埋没と考えられる。

遺物は、覆土中より宝篋印塔の笠の部分や、瀬戸・美濃産の皿・播鉢、在地産の内耳鍋、砥石、銭貨（北宋銭）など多量の遺物が出土し、一部を掲載した。

竪穴跡

L 25・26区に2基、M 18～20区及びN 14・18・19・21～23区に7基、Q 16・17区に1基の合計10基を確認した。

1号竪穴跡（第18・45図、第3・6表、図版6・17）

N 18区に位置し、北側に9号竪穴跡が近接する。平面は252×284cmの不整形で、深さは50cmである。

遺物は、覆土中より近世の土器、陶磁器が少量出土し、一部を掲載した。

2号竪穴跡（第18図、第3表）

Q 17・18区に位置し、北東側に7号地下式坑と22・24号土坑が近接する。平面は225×451cmの不整形で、深さは55cmである。遺物の出土はなかった。

3号竪穴跡（第19・45図、第3・6表、図版7・17）

N 21区に位置し、東側に5・6号地下式坑が近接する。平面は418×702cmの不整形で、深さは21～43cmである。北壁側に208×345cmの不整な長方形の掘り込みが認められ、深さは50cmである。

遺物は、覆土中より中世～近世の土器、陶磁器が出土し、一部を掲載した。

4号竪穴跡（第18図、第3表、図版7）

N 22区に位置し、東側に5号竪穴跡・4号地下式坑、南側に5号地下式坑が近接する。平面は253×382cmのやや不整な隅丸長方形、深さは64～166cmである。

遺物は、覆土中より近世陶器が2点出土した。

5号竪穴跡（第18・45図、第3・6表、図版7・17）

N 23区に位置し、南側に4号地下式坑、西側に4号竪穴跡が近接する。平面は145×174cmの長方形で、深さは42～81cmである。

遺物は、覆土中より近世の土器、陶器が少量出土し、1点を掲載した。

6号竪穴跡（第18図、第3表）

L 25区に位置し、西側に2・3号土坑、北側に2号地下式坑が近接する。平面は208×214cmの方形で、深さは37cmである。遺物の出土はなかった。

7号竪穴跡（第19図、第3表、図版7）

K・L 26区に位置し、北側に3号地下式坑が近接する。平面は153×208cmの長方形で、深さは75～102cmである。覆土は5層に分層され、人為的埋没と考えられる。遺物の出土はなかった。

8号竪穴跡（第20・46図、第3・6表、図版17）

M 19・20区に位置し、近世1号掘立柱建物跡と重複し、本跡が古い。南側には18号地下式坑が近接する。平面は267×516cmの不整形で、深さは86cmである。覆土は3層に分層され、人為的埋没と考えられる。

遺物は、覆土中より古瀬戸の瓶子が出土し、掲載した。

9号竪穴跡（第20・46・54図、第3・6・8表、図版7・17）

M 18・19、N 18・19区に位置し、南側に1号竪穴跡が近接する。平面は347×709cmの不整な長楕円形で、深さは68cmである。南壁中央付近の底面に102×116cmの方形で、深さ85cmの掘り込みが認められた。

遺物は、覆土中より九州産と思われる陶器四耳壺や炆器、砥石が出土し、一部を掲載した。

10号竪穴跡（第19図、第3表、図版7）

N14区に位置し、南側に48・50・53号土坑が近接する。平面は191×241cm以上の長方形と推定され、深さは44cmである。遺物の出土はなかった。

土坑

調査区全域に分布するが、K24～26、M24～26区とM14～17、N14～17、O14～16区付近に集中し、総数64基を確認した。

平面形は円形、楕円形、方形、長方形、隅丸長方形と多様で、規模も径（一辺）43～299cm、深さ15～100cmと様々である。

1号土坑（第21図、第4表、図版7）

L24区に位置する。平面は92×102cmの方形で、深さ約34cm。遺物の出土はなかった。

2号土坑（第21図、第4表）

J・K25区に位置する。平面は118×141cmの楕円形で、深さ約50cm。遺物の出土はなかった。

3号土坑（第21図、第4表）

K25区に位置する。平面は120×167cmの楕円形で、深さ約100cm。

遺物は、覆土中より近世の陶磁器が出土した。

4号土坑（第21図、第4表）

K25区に位置する。平面は79×82cmの楕円形で、深さ46cm。遺物の出土はなかった。

5号土坑（第21図、第4表）

K25区に位置する。平面は径約110cmの円形で、深さ34cm。遺物の出土はなかった。

6号土坑（第21図、第4表）

L25区に位置する。平面は70×86cmの楕円形で、深さ40cm。遺物の出土はなかった。

7号土坑（第21図、第4表）

L25区に位置する。平面は102×125cmの楕円形で、深さ44cm。遺物の出土はなかった。

8号土坑（第21図、第4表）

L25区に位置する。平面は96×124cmの楕円形で、深さ41cm。遺物の出土はなかった。

9号土坑（第21図、第4表、図版8）

L25区に位置する。平面は120×140cmの円形で、深さ44cm。遺物の出土はなかった。

10号土坑（第21図、第4表、図版7）

L 26区に位置する。平面は径約167cmの円形で、深さ約30cm。遺物の出土はなかった。

11号土坑（第21図、第4表）

L 26区に位置する。平面は径約100cmの不整な円形で、深さ36cm。遺物の出土はなかった。

12号土坑（第21図、第4表）

L 25区に位置する。平面は103×132cmの楕円形で、深さ42cm。

遺物は、覆土中より近世～近代の土器、陶磁器が出土した。

13号土坑（第21図、第4表）

K 25・26区に位置する。平面は135×219cmの不整形で、深さ45cm。遺物の出土はなかった。

14号土坑（第21図、第4表）

K 25区に位置する。平面は90×168cmの不整な長方形で、深さ43cm。遺物の出土はなかった。

15号土坑（第21図、第4表、図版8）

R 18区に位置する。平面は120×134cmの楕円形で、深さ38cm。

遺物は、覆土中より近世の土器、陶器、炆器などが出土した。

16号土坑（第21図、第4表、図版8）

R・S 19区に位置する。平面は87×94cmの楕円形で、深さ24cm。遺物の出土はなかった。

17号土坑（第21図、第4表、図版8）

S 19区に位置する。平面は111×167cmの楕円形で、深さ約60cm。遺物の出土はなかった。

18号土坑（第21図、第4表、図版8）

R・S 19区に位置する。平面は径約110cmの円形で、深さ約50cm。遺物の出土はなかった。

19号土坑（第21・46図、第4・6表、図版17）

P 21区に位置する。平面は119×259cmの楕円形で、深さ26cm。

遺物は、覆土中より瀬戸・美濃産の陶器四耳壺、炆器が出土し、陶器を掲載した。

20号土坑（第22・46図、第4・6表、図版17）

P・Q 21区に位置する。平面は115×299cmの楕円形で、深さ約50cm。
遺物は、覆土中より常滑産の炆器壺、近世の陶器が出土し、炆器壺を掲載した。

21号土坑（第21図、第4表）

N 15区に位置する。平面は79×91cmの楕円形で、深さ約30cm。遺物の出土はなかった。

22号土坑（第22図、第4表）

Q 18区に位置する。平面は192×210cmの楕円形で、深さ53cm。遺物の出土はなかった。

23号土坑（第22図、第4表）

P 21区に位置する。平面は146×272cmの隅丸長方形で、深さ約65cm。遺物の出土はなかった。

24号土坑（第22図、第4表）

Q 18区に位置する。平面は145×256cmの不整な長方形で、深さ約70cm。遺物の出土はなかった。

25号土坑（第22図、第4表、図版8）

M 15区に位置する。平面は53×206cmの長方形で、深さ約40cm。遺物の出土はなかった。

26号土坑（第22図、第4表）

M 16区に位置する。平面は80×130cmの長方形で、深さ約100cm。遺物の出土はなかった。

27号土坑（第22図、第4表）

M 16区に位置する。平面は57×159cmの長方形で、深さ約50cm。遺物の出土はなかった。

28号土坑（第22図、第4表）

M 16区に位置する。平面は120×204cmの長方形で、深さ32cm。遺物の出土はなかった。

29号土坑（第22図、第4表）

M 16区に位置する。30号土坑と重複し本跡が新しい。平面は135×272cmの隅丸長方形で、深さ約90cm。遺物の出土はなかった。

30号土坑（第22図、第4表）

M 16区に位置する。29号土坑と重複し本跡が古い。平面形は約43×154cmの長方形と推定する。深さは確認面から6cm。遺物の出土はなかった。

31号土坑（第23図、第4表）

M16区に位置する。平面は105×148cmの長方形で、深さは55cm。遺物の出土はなかった。

32号土坑（第23図、第4表）

M16区に位置する。平面は71×284cmの範囲が確認出来た。深さは15cmである。遺物の出土はなかった。

33号土坑（第23図、第4表）

M16区に位置する。平面は133×166cmの長方形で、深さ51cm。遺物の出土はなかった。

35号土坑（第23図、第4表）

M16区に位置する。平面は73×126cmの長方形で、深さ56cm。遺物の出土はなかった。

36号土坑（第23図、第4表）

M16区に位置する。平面は48×107cmの長方形で、深さ53cm。遺物の出土はなかった。

37号土坑（第23図、第4表）

M17区に位置する。平面は推定約84×212cmの長方形で、深さ39cm。遺物の出土はなかった。

39号土坑（第23図、第4表）

M15区に位置する。平面は94×107cmの楕円形で、深さ22cm。遺物の出土はなかった。

40号土坑（第23図、第4表）

M15区に位置する。平面は49×126cmの長方形で、深さ52cm。遺物の出土はなかった。

42号土坑（第23図、第4表）

N15区に位置する。平面は71×93cmの楕円形で、深さ27cm。遺物の出土はなかった。

43号土坑（第23図、第4表）

N16区に位置する。平面は84×108cmの楕円形で、深さ52cm。遺物の出土はなかった。

44号土坑（第23図、第4表）

N16区に位置する。平面は100×120cmの円形で、深さ約60cm。遺物の出土はなかった。

45号土坑（第24図、第4表）

N17区に位置する。平面は68×195cmの長楕円形で、深さ約30cm。遺物の出土はなかった。

50号土坑（第23図、第4表）

N14区に位置する。平面は77×116cmの不整な楕円形で、深さ68cm。遺物の出土はなかった。

55号土坑（第23図、第4表）

N14区に位置する。平面は120×128cmの円形で、深さ約50cm。遺物の出土はなかった。

59号土坑（第23図、第4表、図版8）

O14区に位置する。平面は111×123cmの不整形で、深さ35cm。底面に48×51cm、深さ約20cmの不整形の小穴1基がある。遺物の出土はなかった。

60号土坑（第23図、第4表）

O14区に位置する。平面は約100×110cmの円形で、深さ約40cm。遺物の出土はなかった。

61号土坑（第23図、第4表）

O13・14区に位置する。平面は89×100cmの隅丸長方形で、深さ約30cm。遺物の出土はなかった。

63号土坑（第23図、第4表、図版8）

M17区に位置する。平面は114×204cmの楕円形で、深さ58cm。遺物の出土はなかった。

井戸跡

調査区北西部を除いたほぼ全域に分布し、13基確認した。この中で4・7号井戸跡は330cm以上の深さがあり、崩落や酸欠などの危険が伴うため、底面までの掘り下げを中止した。

1号井戸跡（第24図、第5表、図版8）

J18区に位置し、北側は近世5号土坑が近接する。平面は113×121cmの円形で、深さ約180cm。壁面はやや外傾しながら立ち上がる。底面からは若干の湧水が認められた。

遺物は、覆土下位に木片が認められたのみである。

2号井戸跡（第24図、第5表、図版8）

M17区に位置し、西側は45・63号土坑と17号地下式坑が近接する。平面は径約130cmの円形で、深さ約310cm。壁面はやや外傾しながら立ち上がる。遺物の出土はなかった。

3号井戸跡（第24図、第5表、図版8）

N16区に位置し、北側は44号土坑が近接する。平面は径約110cmの円形で、深さ約230cm。壁面はやや内湾しながら立ち上がる。遺物の出土はなかった。

4号井戸跡（第26・46図、第5・6表）

O 17区に位置する。平面は114×127cmの隅丸方形で、深さ350cm以上。壁面はやや外傾し立ち上がる。また、北側に接して100×102cmの方形で、深さ約40cmの掘り込みが認められ、本跡に伴う施設と考えられる。

遺物は、覆土中より内耳鍋、内耳焙烙などの土器類が出土し、一部を掲載した。

5号井戸跡（第24図、第5表）

P 15区に位置する。大型竪穴跡と重複し本跡が新しい。平面は122×148cmの楕円形で、深さ約80cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面で若干の湧水が認められた。遺物の出土はなかった。

6号井戸跡（第24図、第5表、図版9）

R 16区に位置し、3号土塁状遺構の寄せ土を除去した際に確認された。平面は径約100cmの円形で、深さ約230cm。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物は、覆土中より近世の土器、陶磁器が出土した。

7号井戸跡（第26図、第5表）

S 16区に位置する。平面は径約100cmの円形で、深さ330cm以上。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物は、覆土中より近世の土器、陶磁器が出土した。

8号井戸跡（第24図、第5表、図版9）

N 20区に位置し、18号地下式坑と近接する。平面は径約110cmの円形で、深さ約210cm。壁面はやや外傾し立ち上がる。

遺物は、覆土中より近世の土器、陶磁器が出土した。

9号井戸跡（第24図、第5表）

M 20区に位置し、西側に近世の掘立柱建物跡、東側に1号炭灰跡が近接する。平面は径約110cmの円形で、深さ約140cm。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面には15×35cmの不整形で、深さ15cmの小穴が1基ある。遺物の出土はなかった。

10号井戸跡（第24図、第5表）

K 18区に位置し、近世3号土坑と重複し本跡が古い。南側に9号地下式坑、東側には近世2号土坑が近接する。平面は111×132cmの楕円形で、深さ約260cm。壁面はやや外傾し立ち上がる。遺物の出土はなかった。

11号井戸跡（第24・46図、第5・6表、図版17）

M 16区に位置し、28・29号土坑が近接する。平面は径約110cmの円形で、深さ約170cm。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物は、覆土中より中・近世の土器、陶磁器、炆器などが出土し、瀬戸・美濃産の陶器天目茶碗・播鉢、常滑産の炆器甕などを掲載した。

12号井戸跡（第24図、第5表）

O 21 区に位置し、南側に13号井戸跡が近接する。平面は径約80cmの円形で、深さ約130cm。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はなかった。

13号井戸跡（第24図、第5表）

O・P 21 区に位置し、北側に12号井戸跡が近接する。平面は径約100cmの円形で、深さ約50cm。壁面は外傾し立ち上がる。遺物の出土はなかった。

埋設桶

O 20・N 19 区の2か所で確認されたが、ともに上部は整地の際に削平され、桶の底板が残存するのみである。確認状況から井戸状の遺構と考えられる。

1号埋設桶（第25図、図版9）

O 20 区に位置する。底板の径は約190cm、幅約30～40cm、厚さ1cmの杉板を6枚組み合わせている。埋設穴は径約210cmである。遺物の出土はなかった。

2号埋設桶（第25図、図版9）

N 19 区に位置する。底板の径は約230cm、幅約30cm、厚さ1cmの杉板を8枚組み合わせている。埋設穴は径約250cmで、壁下には幅15cm、深さ10cmの溝が圍繞している。遺物の出土はなかった。

土塁

1・2号土塁の2か所を確認した。いずれも第1次調査の際に確認・調査されている。1号土塁はK 15・16区付近から1号堀跡と平行し、M 17区で終わる。幅は約580～920cm、高さ約220cmである。2号土塁はJ 16・17、K 16・17区からL 19区付近で終わり、K 16・17、L 16・17区の平場を区画する役割がある。いずれもローム層を掘り残り削り込んで築かれていた。

堀跡

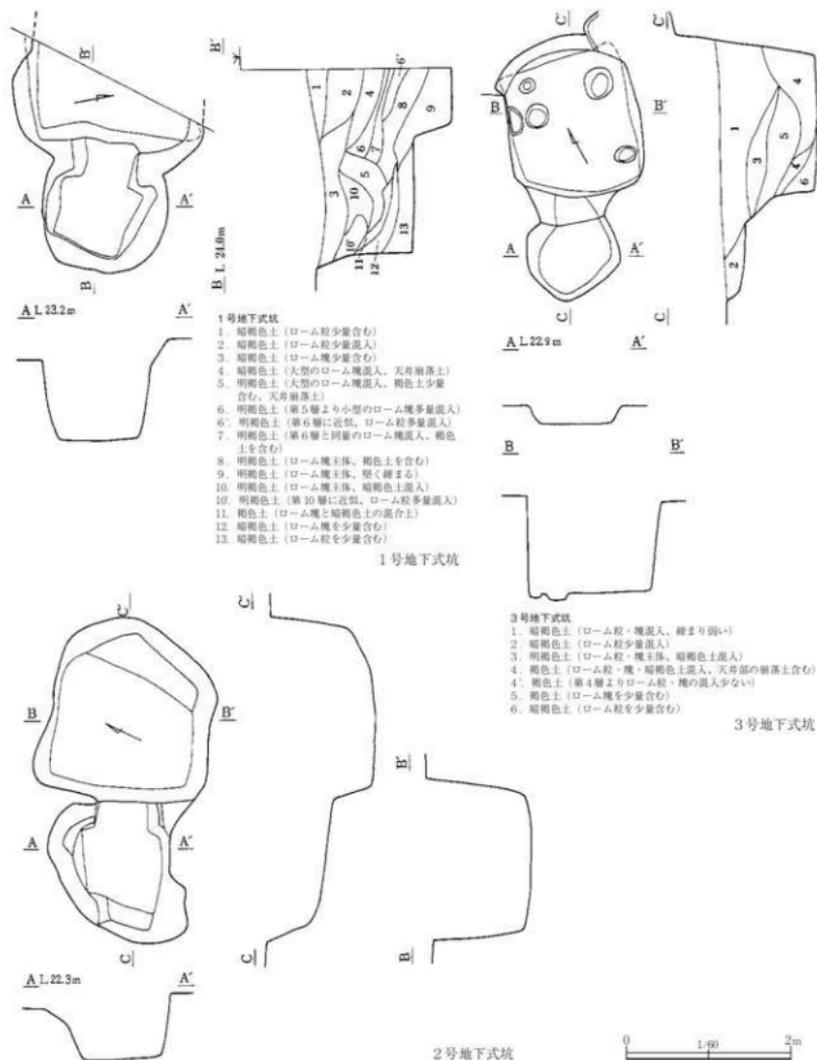
1号堀跡1条を確認した。第2次調査区ではK 15～17、L 15～17、M 15～17区に位置する。覆土は第1次調査の際にすでに除去されていた。遺物の出土はなかった。

溝跡（第27・47図、第6表）

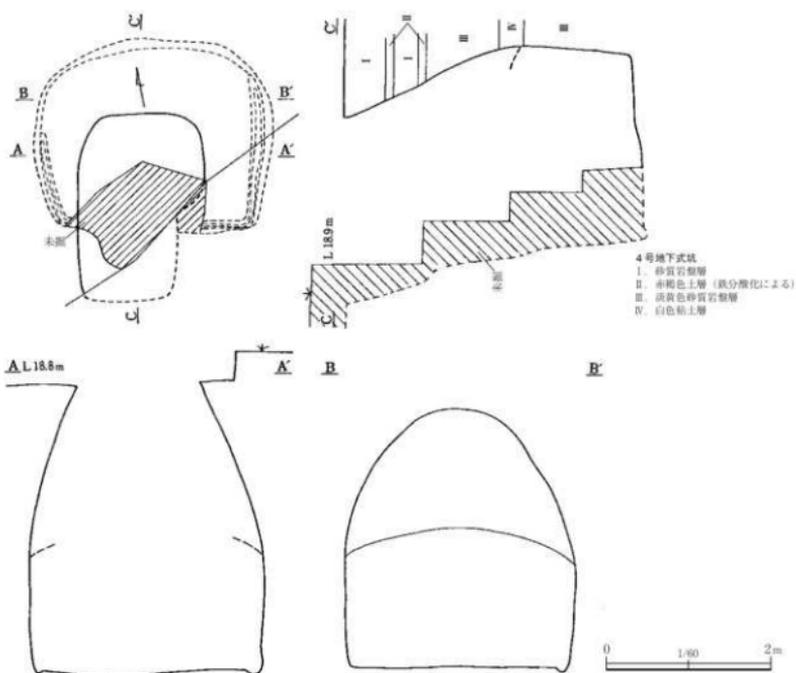
2条を確認した。1号溝跡はN 15・16区に位置する。1号堀跡からさらに延長する形で東側に延び、近世の切土整地面によって切られている。断面は逆台形で、幅約240～650cm、深さ90～157cmである。2号溝跡はN 15・16区に位置し、同区付近の平場をU

字状に延びている。幅は0.6～1.4m、深さは約0.4mである。

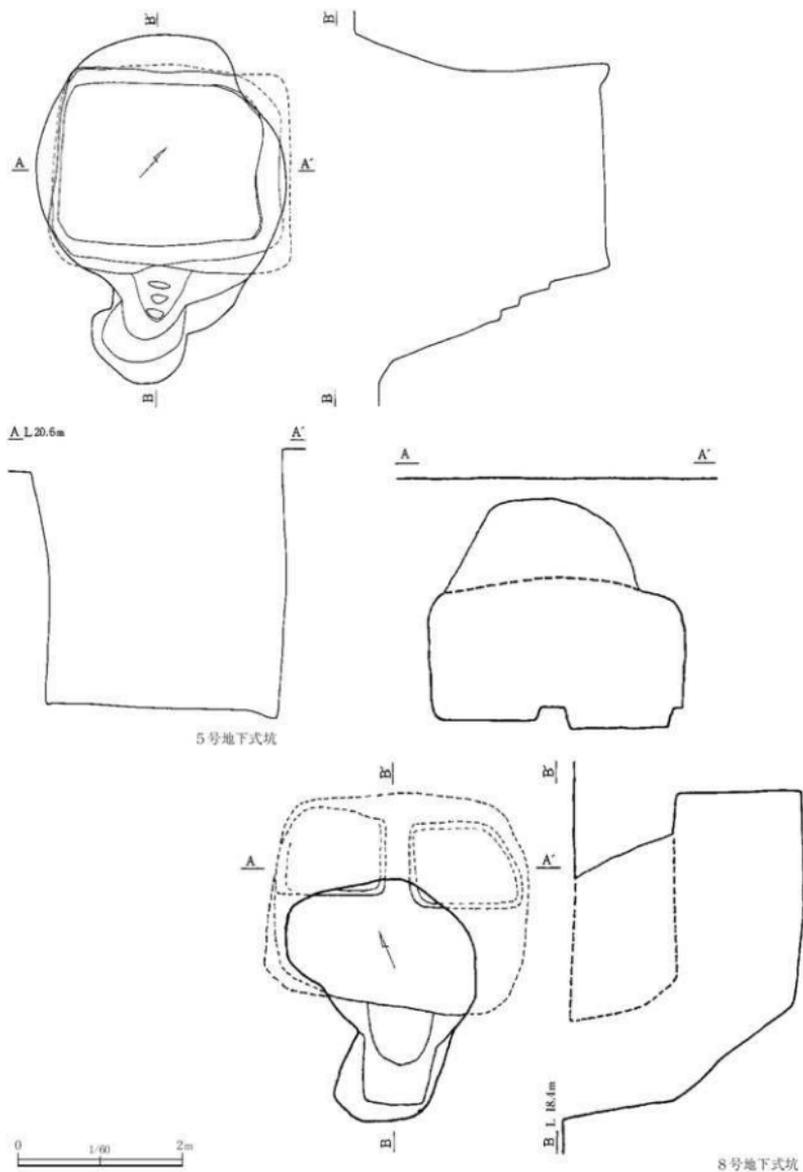
遺物は、1号溝跡の覆土中より内耳鍋、土師質土器皿などが出土し、内耳鍋を掲載した。



第5図 1～3号地下式坑



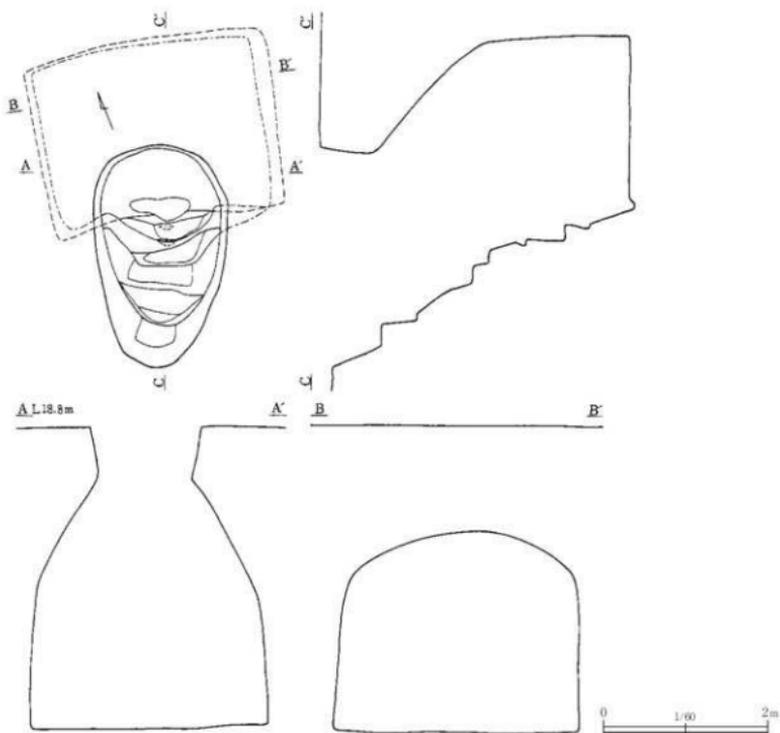
第6図 4号地下式坑



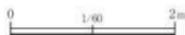
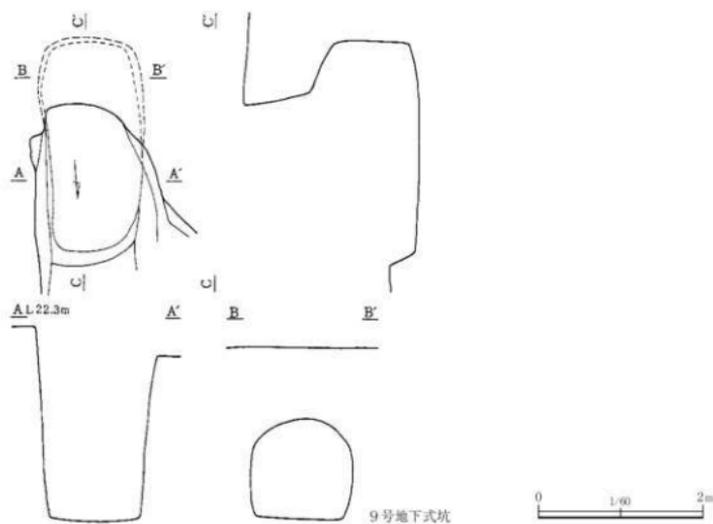
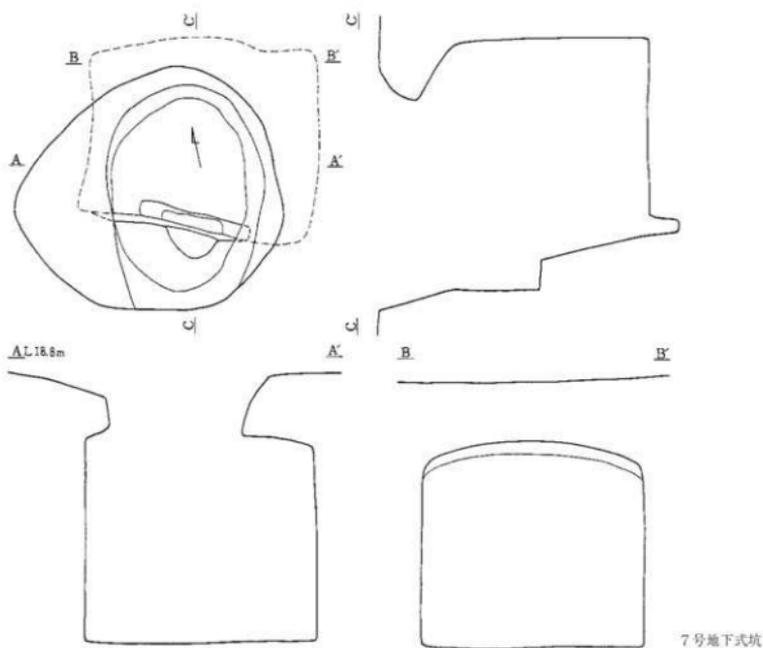
5号地下式坑

8号地下式坑

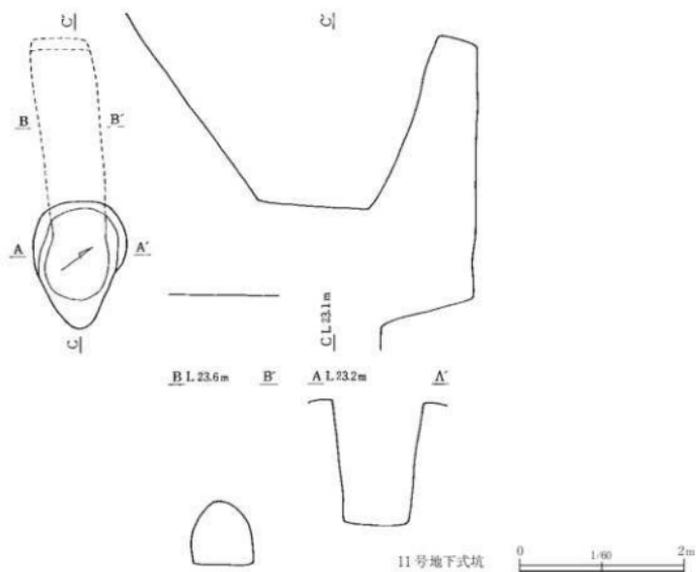
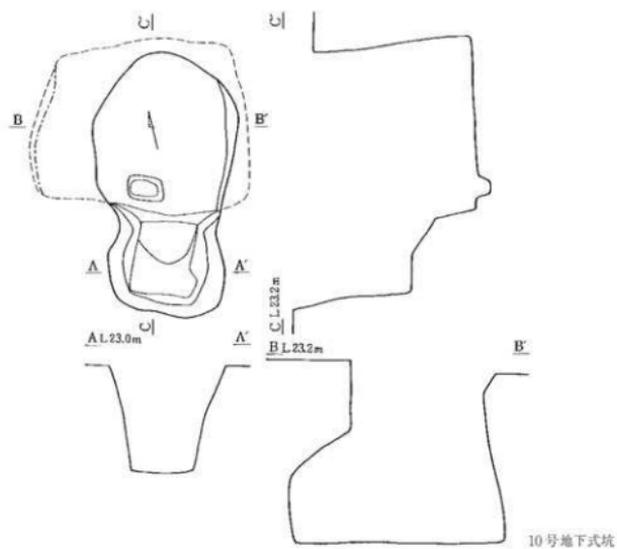
第7图 5・8号地下式坑



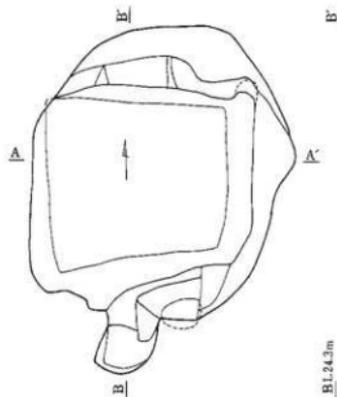
第8圖 6号地下式坑



第9図 7・9号地下式坑



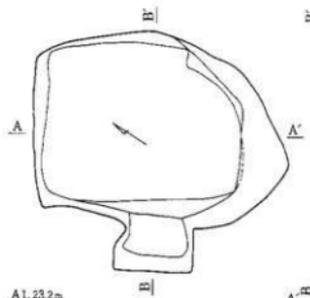
第 10 图 10・11 号地下式坑



A.L.24.3m

B.L.24.3m

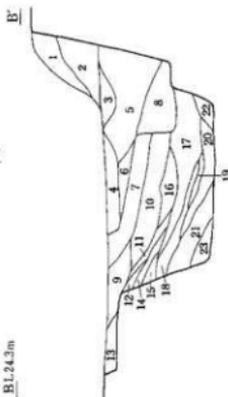
12号地下式坑



A.L.23.2m

13号地下式坑

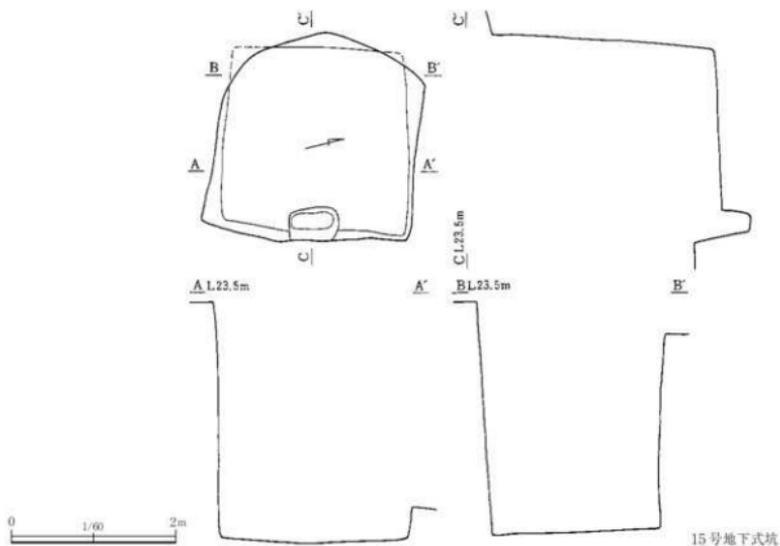
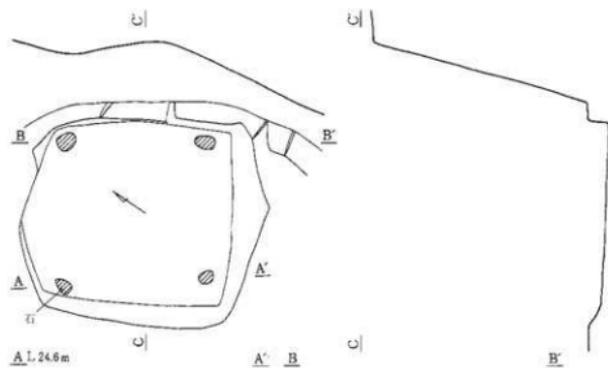
0 1.00 2m



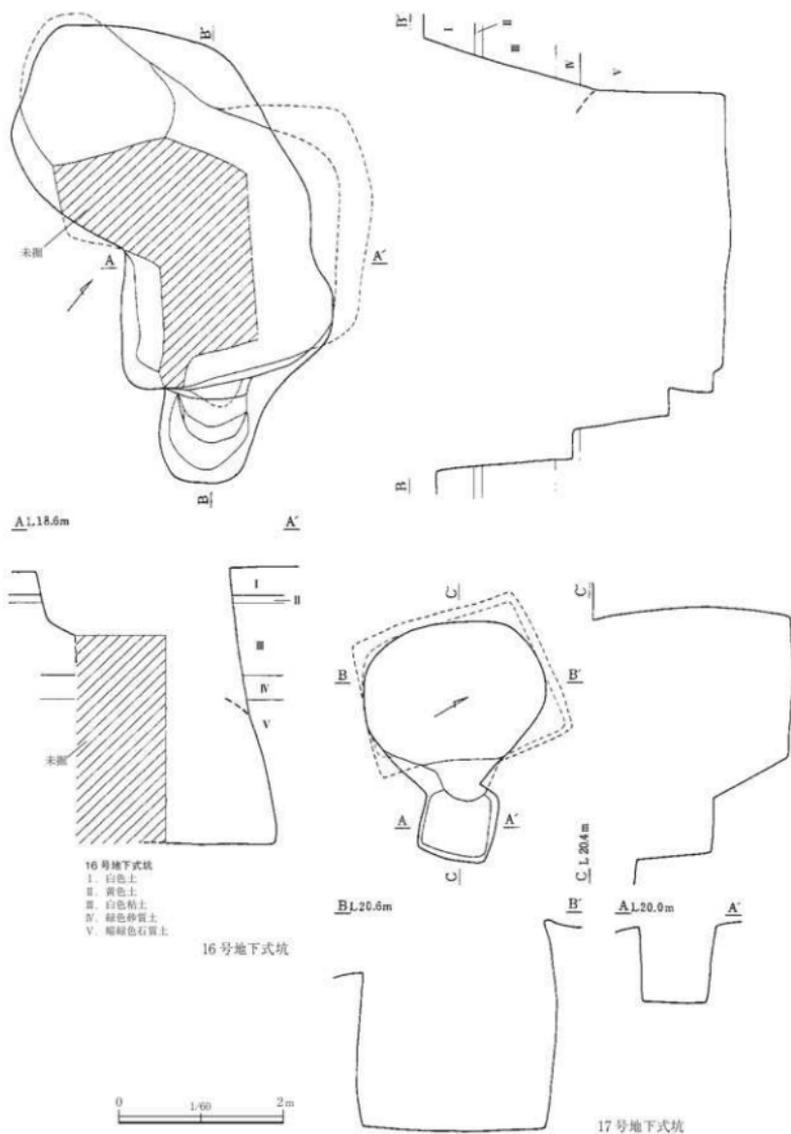
12号地下式坑

1. 暗褐色土 (ロ-ム粒・塊少量混入)
2. 暗褐色土 (ロ-ム粒混入)
3. 褐色土 (ロ-ム粒混入、同塊少量含む)
4. 褐色土 (ロ-ム粒混入、同塊少量含む)
5. 暗赤褐色土 (ロ-ム粒多量・同塊中量混入、面石層上と中・暗赤)
6. 暗赤褐色土 (ロ-ム粒多量・同塊中量混入)
7. 黒褐色土 (ロ-ム粒・塊混入)
8. 暗赤褐色土 (ロ-ム粒・塊多量混入)
9. 褐色土 (ロ-ム粒・塊混入)
10. 暗褐色土 (ロ-ム粒・塊少量混入)
11. 褐色土 (ロ-ム粒多量混入)
12. 黒褐色土 (ロ-ム粒少量混入)
13. 暗褐色土 (ロ-ム塊混入)
14. 暗褐色土 (ロ-ム塊多量混入)
15. 暗赤褐色土 (ロ-ム粒・塊多量混入)
16. 褐色土 (ロ-ム粒中量・同塊多量混入)
17. 暗褐色土 (ロ-ム粒中量・同塊少量混入)
18. 暗褐色土 (ロ-ム粒中量・同塊少量混入)
19. 赤褐色土 (ロ-ム塊少量混入)
20. 黒褐色土 (ロ-ム塊混入)
21. 暗褐色土 (ロ-ム塊多量混入)
22. 褐色土 (ロ-ム粒・塊多量混入)
23. 黒褐色土 (ロ-ム粒混入)

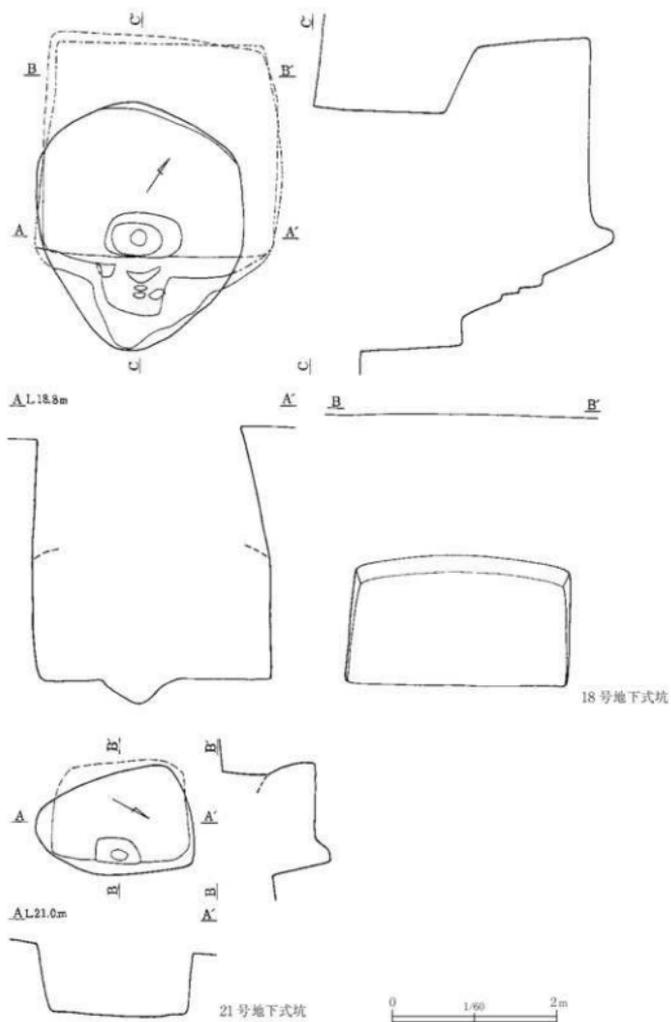
第 11 图 12・13号地下式坑



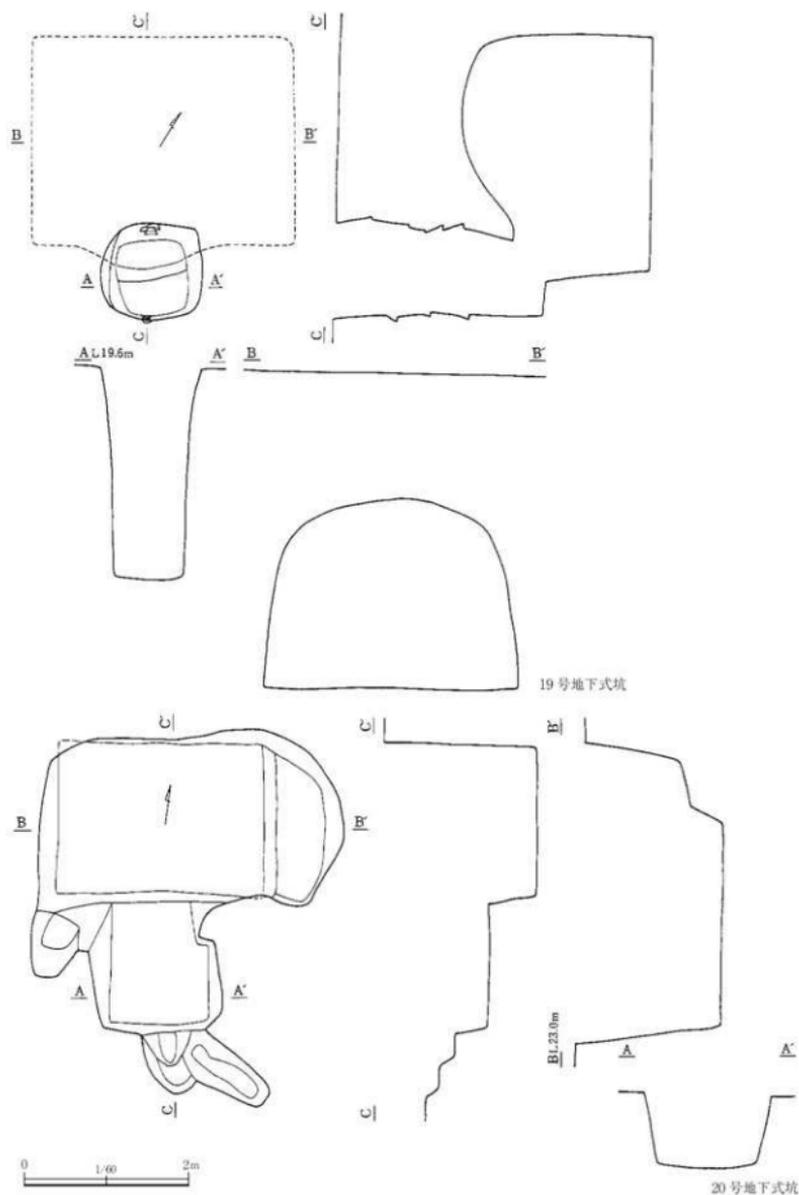
第12图 14・15号地下式坑



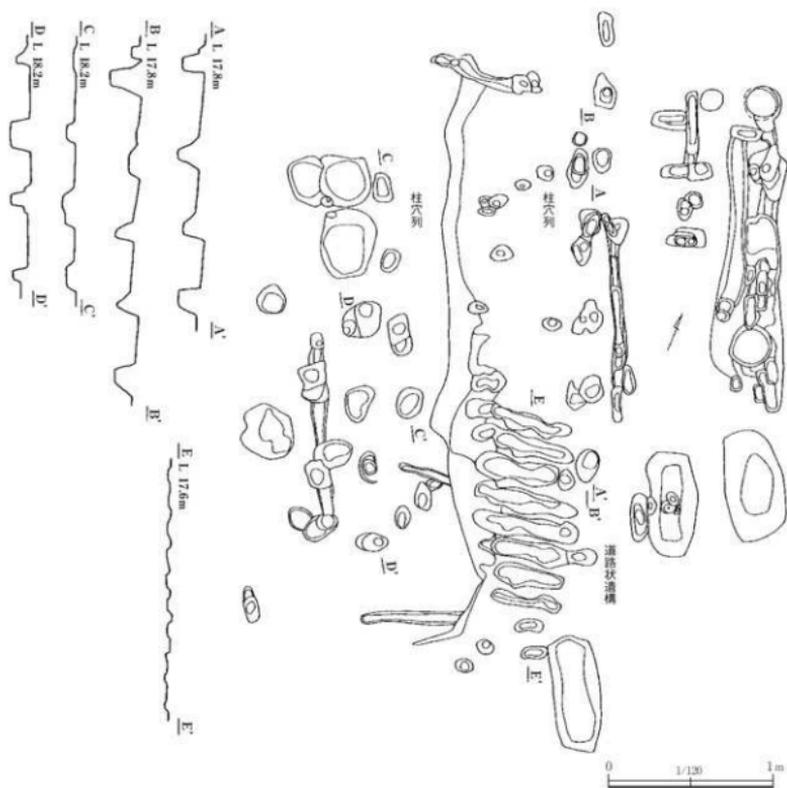
第13图 16・17号地下式坑



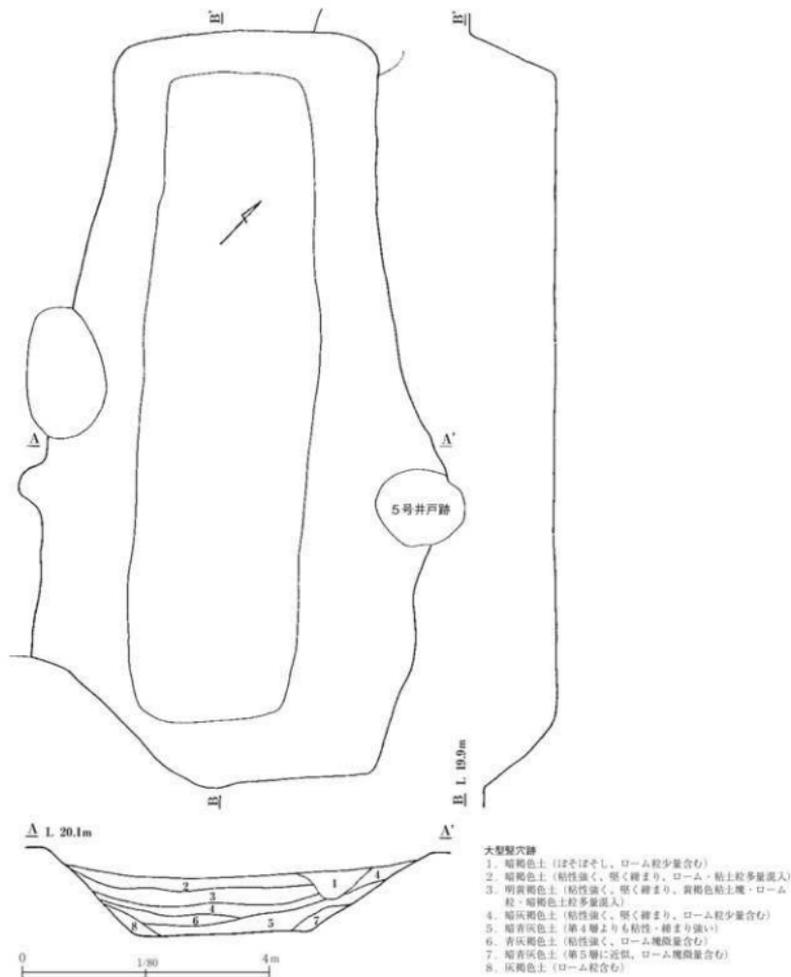
第 14 图 18・21 号地下式坑



第 15 图 19・20号地下式坑

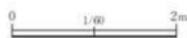
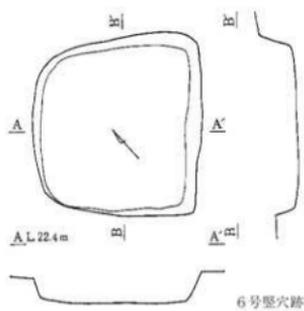
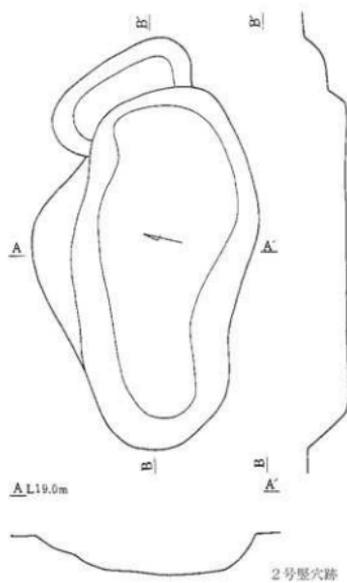
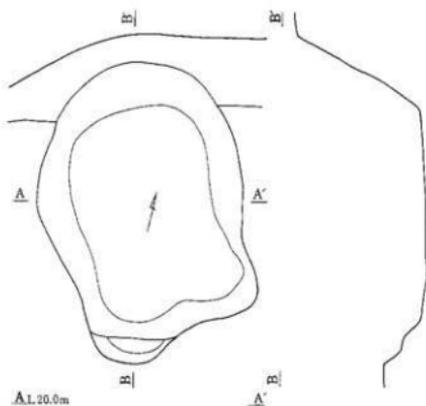
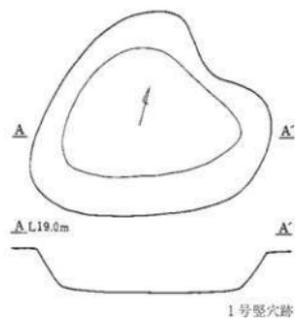


第 16 図 中世柱穴列、道路状遺構

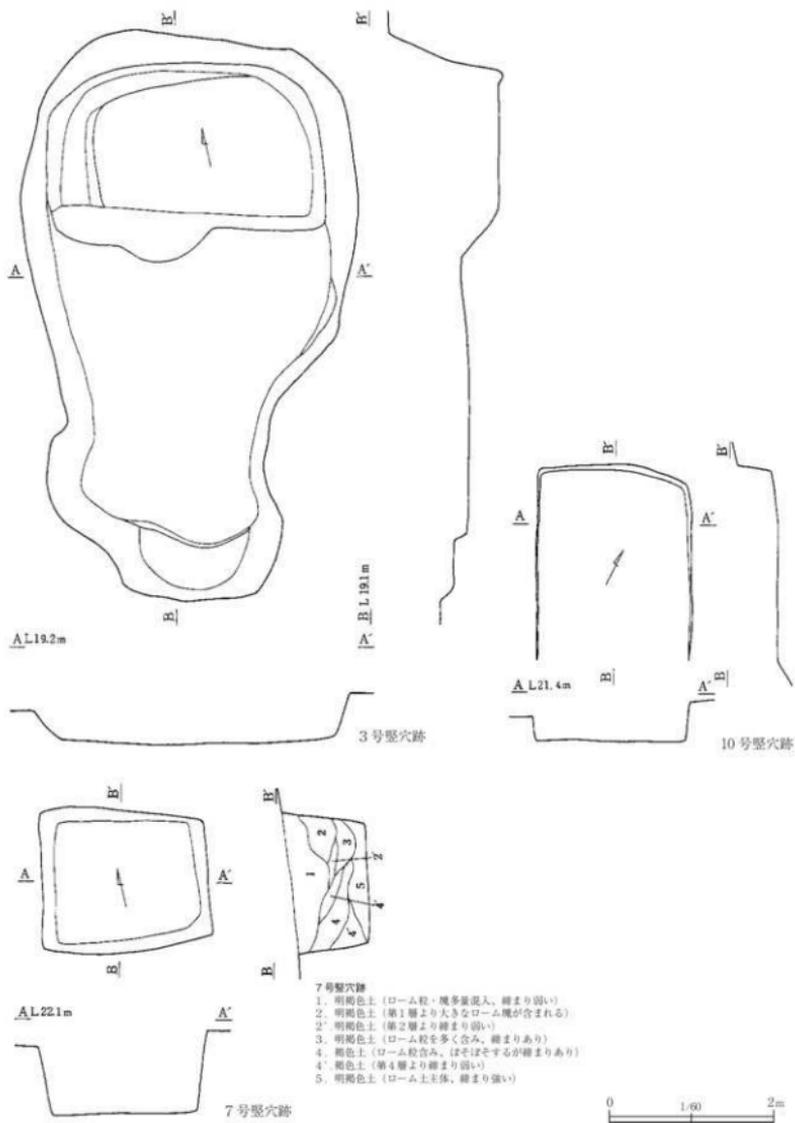


第17図 大型縦穴跡

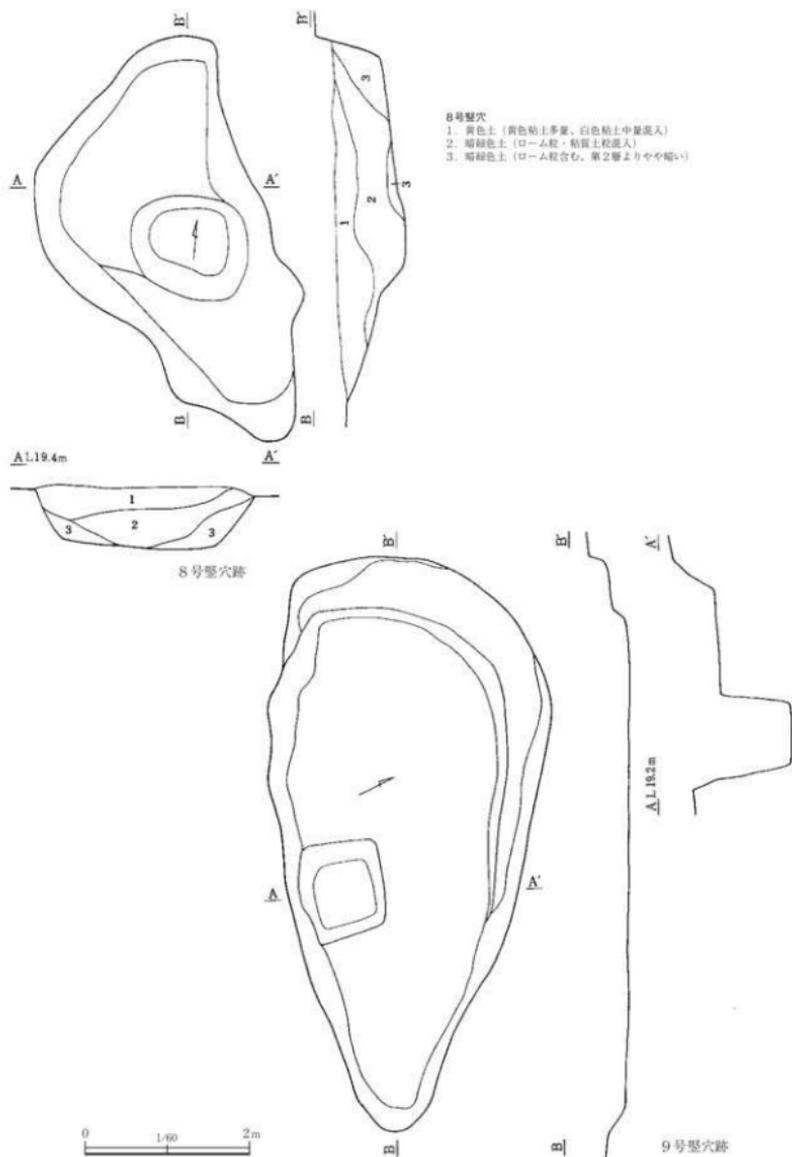
高品城跡



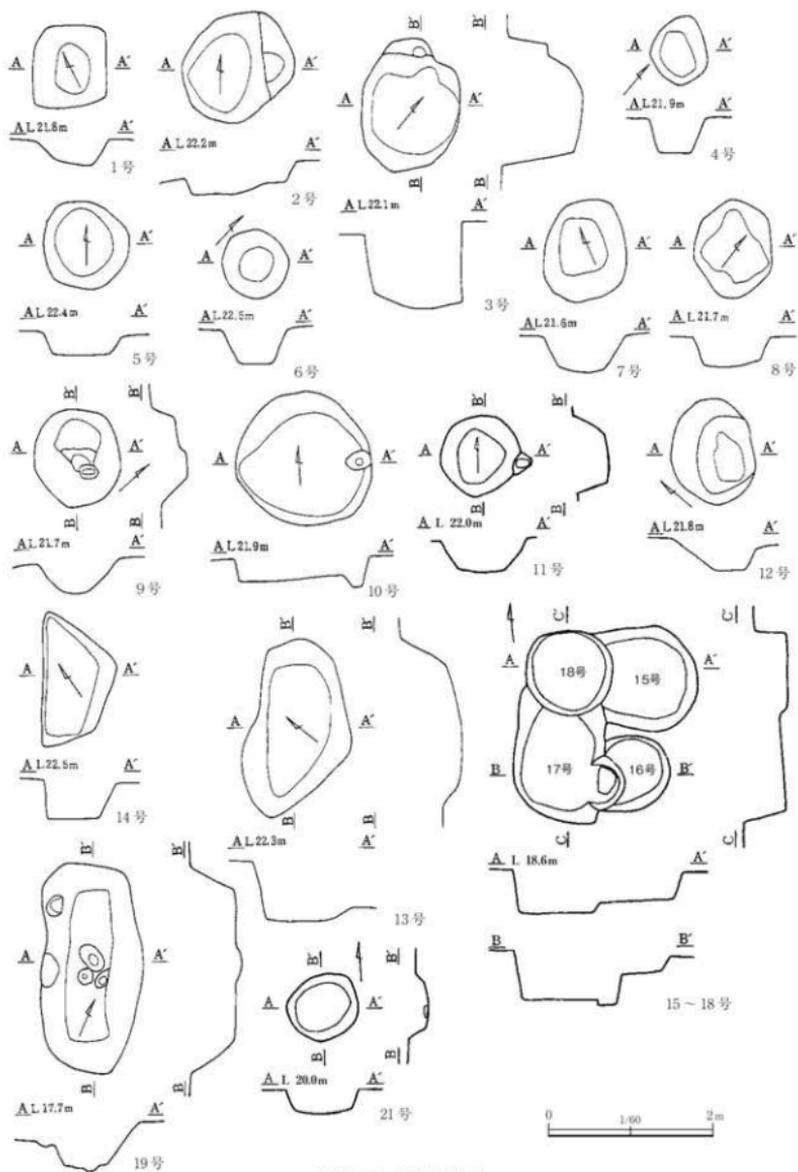
第18图 1·2·4~6号竖穴跡



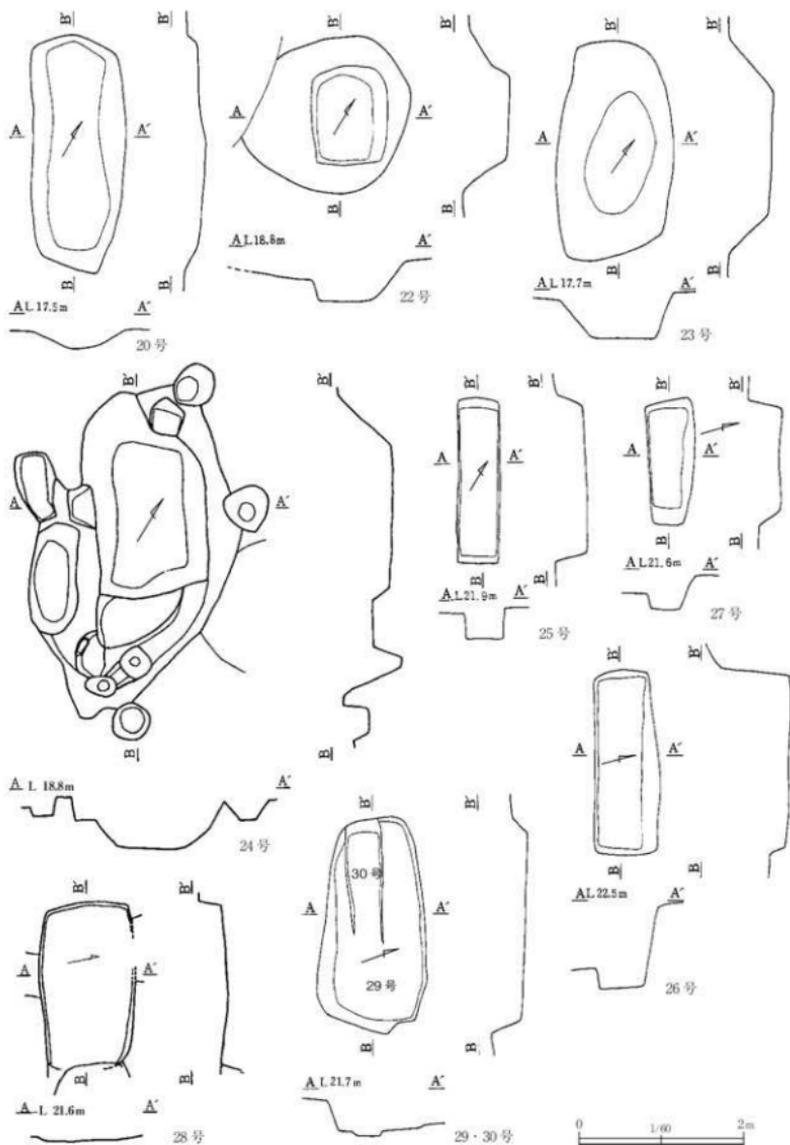
第19図 3・7・10号竖穴跡



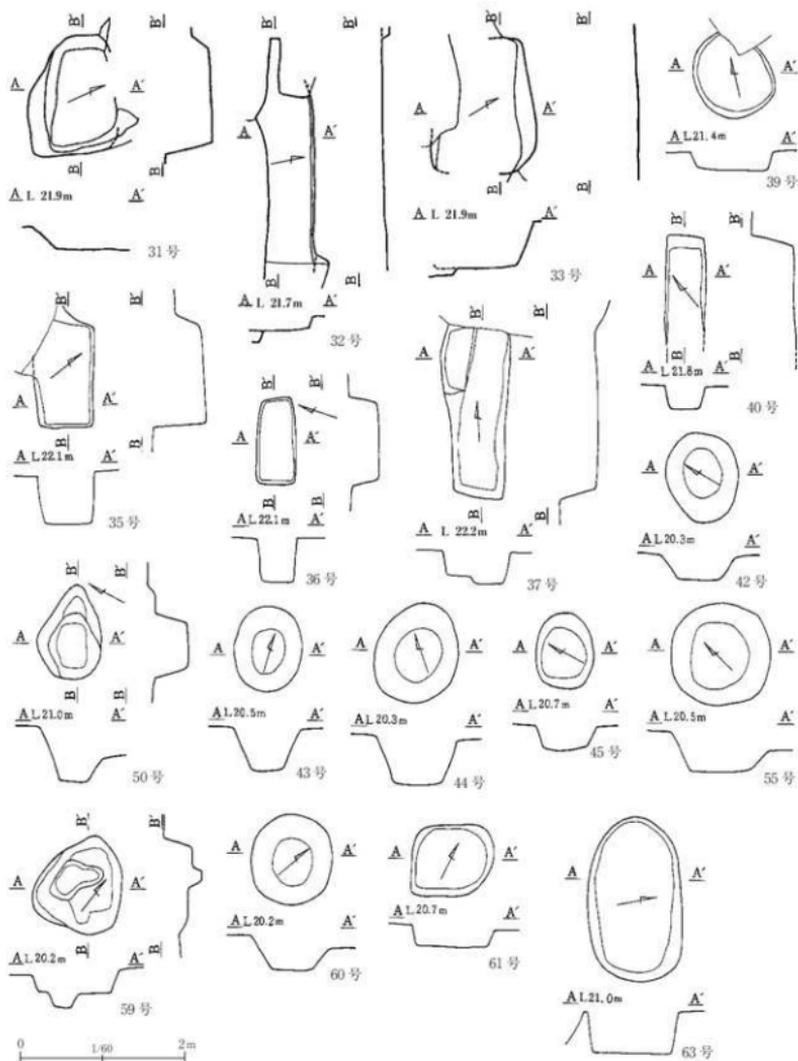
第20图 8・9号竖穴跡



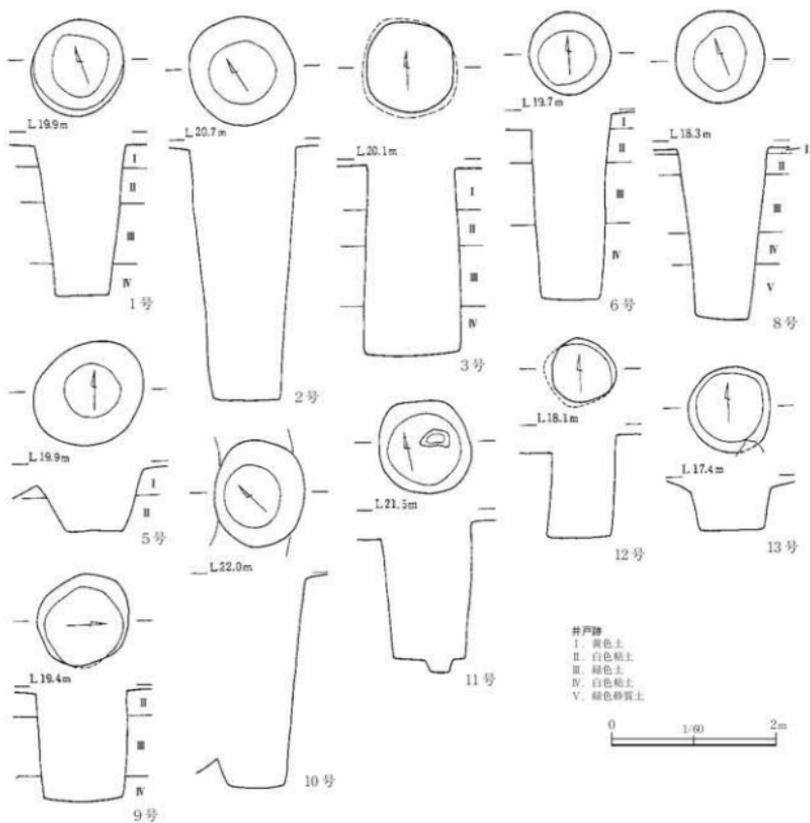
第21圖 中世土坑(1)



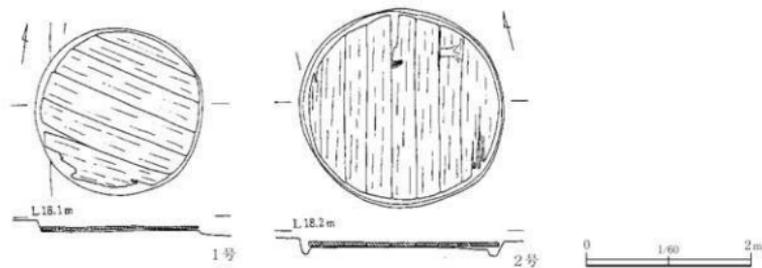
第22图 中世土坑(2)



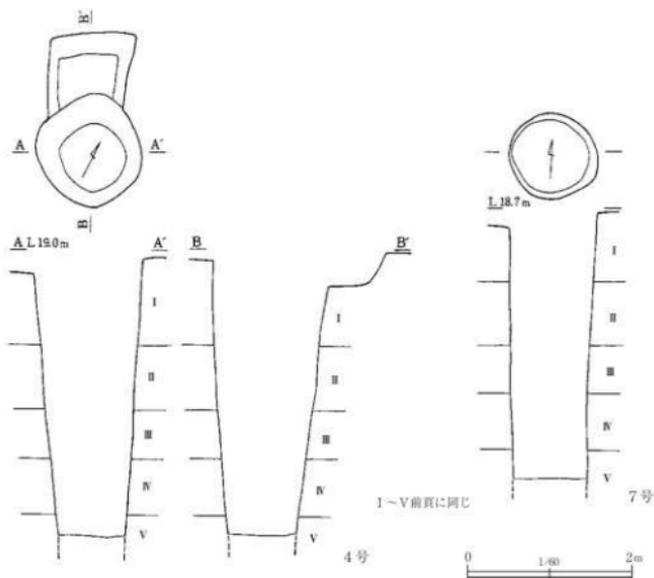
第23图 中世土坑(3)



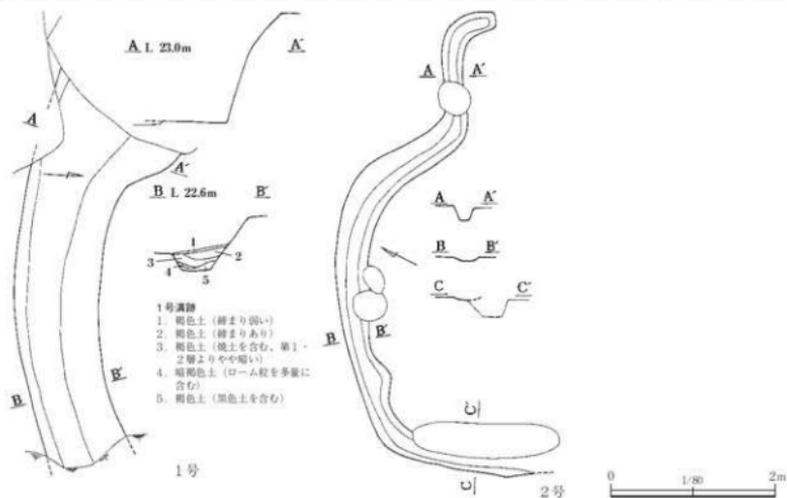
第24図 1~3・5・6・8~13号井戸跡



第25図 1・2号埋設桶



第26図 4・7号井戸跡



第27図 1・2号溝跡

第2表 地下式坑一覧表

〔 〕 現存値、() 推定値、単位 cm

番号	室部		塹坑部		備 考
	幅 × 奥行 × 深さ	幅 × 奥行 × 深さ	幅 × 奥行 × 深さ	幅 × 奥行 × 深さ	
1	180 × [105] × 220	90 × 90 × 120			塹坑部と室部の間に幅 60 cm の入口部
2	170 × 190 × 125	130 × 95 × 80			塹坑部と室部の間に幅 60 cm の入口部
3	150 × 170 × 180	87 × 85 × (80)			塹坑部と室部の間に幅 50 cm の入口部
4	300 × 240 × 360	(120) × (100) × 360			室部底面の奥壁側を除く三方の壁下に幅 10 ~ 20 cm、深さ 5 cm の溝
5	290 × 240 × 310	115 × 170 × 275			塹坑下部階段状、室部壁下に幅 20 cm、深さ 10 cm の溝
6	280 × 210 × 375	100 ~ 160 × (200) × 298			急傾斜な階段状の塹坑部
7	280 × 240 × 325	径 140 × 200			室部入口の底面に 135 × 25 × 30 cm の掘り込み
8	315 × 265 × 280	110 × 140 × 280			室部奥側の左右に、深さ 18 ~ 26 cm の不整形の掘り込み
9	110 × 260 × 235	— × — × 175			
10	260 × 215 × (215)	80 × 45 × 142			室部入口の底面に 45 × 25 × 15 cm の掘り込み、中央よりやや西に寄る
11	70 × 250 × 430	径 80 × 425			非常に深く、室部天井低くトンネル状
12	220 × 170 ~ 220 × 220	70 × 100 × (105)			北側後世の掘り込みと整地
13	240 × 200 × 170	70 × 50 × (132)			
14	230 × 260 × 280	—			塹坑部不明、四隅に礎を据える、支柱用の礎石か?
15	230 × 230 × 280	— × — × (250)			室部入口の底面に 50 × 40 × 35 cm の掘り込み
16	370 × 330 × 370	120 × 130 × 280			塹坑部 2 段に掘る
17	180 × 230 × 250	70 × 80 × 95			
18	285 × 275 × 335	100 × 110 × (280)			塹坑部 2 段、180 cm 垂直に降り、その下は急傾斜の階段状
19	320 × 260 × 390	80 × 50 × 260			塹坑部南・北面に足掛け穴
20	250 × 190 × 190	120 × 150 × 125			塹坑部南に階段状施設
21	170 × 130 × 115	—			塹坑部不明、室部東側の底面に 55 × 30 × 20 cm の掘り込み

第3表 竪穴跡一覧表

単位 cm

番号	出土位置	短径 × 長径 × 深さ	平面形	備 考
1	N18 区	252 × 284 × 50	不整形	
2	Q17-18 区	225 × 451 × 55	不整形	
3	N21 区	418 × 702 × 21 ~ 43	不整形	北壁側に 208 × 345 cm、深さ 50 cm の不整形の掘り込み
4	N22 区	253 × 382 × 64 ~ 166	不整形丸長方形	
5	N23 区	145 × 174 × 41 ~ 81	長方形	
6	L25 区	208 × 214 × 37	方形	
7	K・L26 区	153 × 208 × 75 ~ 102	長方形	
8	M19-20 区	267 × 516 × 86	不整形	近世 1 号掘立柱建物跡と重複し、本跡が古い。古瀬戸の瓶子
9	M18-19、N18-19 区	347 × 709 × 68	不整形長楕円形	底面に 102 × 116 cm、深さ 85 cm の方形掘り込み、九州産四耳壺
10	N14 区	191 × 241 × 44	長方形	

第4表 土坑一覽表

() 推定値、単位 cm

番号	出土位置	短径×長径×深さ	平面形	備 考	番号	出土位置	短径×長径×深さ	平面形	備 考
1	L 24 区	92×102×34	方形		33	M16 区	133×166×51	長方形	29-32・34号と重複、大半が崩平
2	J・K25 区	118×141×50	楕円形		34	M16 区	—×—×14	—	29-31・33-35号と重複、大半が崩平
3	K 25 区	120×167×100	楕円形		35	M16 区	73×126×56	長方形	34号と重複
4	K 25 区	79×82×46	楕円形		36	M16 区	48×107×53	長方形	
5	K 25 区	径 110×34	円形		37	M17 区	84×212×39	長方形	
6	L 25 区	70×86×40	楕円形		38	M16 区	—×—×56	長方形	26-32号と重複
7	L 25 区	102×125×44	楕円形		39	M15 区	94×107×22	楕円形	
8	L 25 区	96×124×41	楕円形		40	M15 区	49×126×52	長方形	
9	L 25 区	120×140×44	円形		41	M15 区	110(204)×26	長方形	20号地下式坑と重複
10	L 26 区	径 167×30	円形		42	N15 区	71×93×27	楕円形	
11	L 26 区	径 100×36	不整形円形		43	N16 区	84×108×52	楕円形	
12	L 25 区	103×132×42	楕円形		44	N16 区	100×120×60	円形	
13	K25-26 区	136×219×45	不整形		45	N17 区	68×195×30	長楕円形	
14	K 25 区	90×168×43	不整形長方形		46	N15 区	60×66×30	円形	
15	R 18 区	120×134×38	楕円形	17-18号と重複	47	N15 区	104×120×28	円形	
16	R・S19 区	87×94×24	楕円形	17号と重複	48	N14-15 区	径 90×20	円形	
17	S19 区	111×167×60	楕円形	15-16-18号と重複	49	N15 区	径 60×48	円形	
18	R・S19 区	径 110×50	円形	15-17号と重複	50	N14 区	77×116×68	不整形楕円形	
19	P 21 区	119×259×26	楕円形	瀬戸・美濃系陶器壺	51	N14 区	径 140×84	円形	52号と重複
20	P・Q21 区	115×299×50	楕円形	常滑産灰器壺	52	N14 区	(120)×140×90	楕円形	51-53号と重複
21	N15 区	79×91×30	楕円形	2号溝と重複	53	N14 区	100×114×53	円形	52号と重複
22	Q18 区	192×210×53	楕円形	24号と重複	54	N14 区	110×130×53	楕円形	
23	P 21 区	146×272×65	隅丸長方形		55	N14 区	120×128×50	円形	
24	Q18 区	145×256×70	不整形長方形	22号と重複	56	O14 区	80×106×28	不整形楕円形	
25	M15 区	53×206×40	長方形		57	O14 区	50×66×28	楕円形	
26	M16 区	80×130×100	長方形	27-38号と重複	58	O14 区	70×96×16	楕円形	
27	M16 区	57×159×50	長方形	26-28-32号と重複	59	O14 区	111×123×35	不整形	底面：48×51cm、深5.20cmの不整形小穴1基
28	M16 区	120×204×32	長方形	27-29-30-32号と重複	60	O14 区	100×110×40	円形	
29	M16 区	135×272×90	隅丸長方形	28-30-32～34号と重複	61	O13-14 区	89×100×30	隅丸長方形	
30	M16 区	43×154×6	長方形	28-29-32号と重複	62	O16 区	70×120×52	楕円形	
31	M16 区	105×148×55	長方形	34号と重複	63	M17 区	114×204×58	円形	
32	M16 区	(71)×(284)×15	長方形	27～30-33-38号と重複、大半が崩平	64	M17 区	75×130×40	楕円形	

第5表 井戸跡一覧表

単位 cm

番号	出土位置	短径×長径×深さ	平面形	備 考
1	J 18区	113×121×180	円形	湧水あり
2	M17区	径 130×310	円形	
3	N16区	径 110×230	円形	
4	O17区	114×127×350	隅丸方形	
5	P15区	122×148×80	楕円形	大型堅穴跡と重複し、本跡が新しい。湧水あり
6	R16区	径 100×230	円形	
7	S16区	径 100×330	円形	
8	N20区	径 110×210	円形	
9	M20区	径 110×140	円形	底面に 15×35 cm、深さ 15 cm の不整形小穴あり
10	K18区	111×132×260	楕円形	近世3号土坑と重複し、本跡が古い。湧水あり
11	M16区	径 110×170	円形	
12	O21区	径 80×130	円形	
13	O・P21区	径 100×90	円形	

第3節 近世以降の遺構

礎石建物跡、掘立柱建物跡、塚、土塁状遺構、炭窯跡、近世土坑、池跡などを確認した。

礎石建物跡

O 19・20、P 18～20、Q 18～20 区に3棟を確認した。

1・2号礎石建物跡（第28・47図、第6表、図版9・10・18）

1・2号礎石建物跡は同じ位置に建て替えられたもので1号礎石建物跡が旧く、2号礎石建物跡が新しい。1・2号礎石建物跡ともに桁行10間×梁行6間の東西棟の建物で、桁行の方位はN-61°-E。桁行総長は約1,890cm、梁行総長は約1,000cmである。桁行及び梁行の柱間は約180cmを基本とし、北西に幅約90cmの廂を持つ。掘方は径約20～80cmの円形もしくは楕円形で、中に貝殻を築き固めその上に石を載せて礎石としていたが、建て替えに際してすべて除去されている。

遺物は、近世の土器、陶磁器が少量出土し、陶器皿1点を掲載した。

3号礎石建物跡（第28・29・47・57図、第6・8・9表、図版9～11・18・22）

3号礎石建物跡は、1・2号礎石建物跡の後に方位を変更して建て替えられた建物跡で、桁行8間×梁行6間の東西棟の建物で、桁行の両側に廂を持つ。桁行の方位はN-84°-E。桁行総長は約1,460cm、梁行総長は約1,100cmである。桁行及び梁行の柱間は約180cmを基本とし、北と南の廂は幅約80と約130cmである。1・2号礎石建物跡と同様に径約20～80cmの円形の掘方に貝殻を築き固めて、その上に石を載せて礎石としている。

3号礎石建物跡の北東隅にはカマド跡があり、凝灰岩の切石と粘土を使用して構築されていた。

また、西側約10mの位置には常滑産の甕を2か所埋設した副跡が確認され、すぐ南側からは完形に近い益子産の陶器山水土瓶が正位で出土した。さらに、近くからは磁器の小便器が倒れた状態で出土した。

遺物は、近世～近代の土器、陶磁器、石製品（砥石）、銭貨（寛永通宝）などが出土し、一部を掲載した。

近世1号掘立柱建物跡（第30図）

M 19・20 区の切土整地が行われた所に位置する。梁行5間×桁行6間の東西棟の建物で桁行の方位はN-6°-Eである。桁行の総長約900cm、柱間は約180cm、梁行の総長約360cm、柱間は約180cmを基本とし、西側では間柱が見られたが全体に設けられていたか否かは不明である。掘方は径約30～50cmの円形もしくは方形で、深さは約6cmと大きく削平されていた。遺物の出土はなかった。

1号塚（第31～33・47・48・55～57図、第6～9表、図版12・18・22）

K 19・20 区に位置する。2号土塁の東側に位置し、平面は約270×360cmの不整な楕円形である。盛土はロームを掘り残して芯とし、黒色土を盛り上げて築かれていた。高さ約

140cmで、頂部には石塔や石祠が6基祀られていた。これらには「天保十四年」、「寛□」（寛政?）、「昭和十年」の年号、「月日仙元大菩薩」・「稲荷大神」・「山神宮」などの神名、「藤代惣左衛門」、「藤代相之助」などの建立者名が刻まれていた。

遺物は、盛土中より中・近世の土器、陶磁器、石製品（砥石・石塔）、銭貨（寛永通宝）などが出土し、その一部を掲載した。盛土中より貝殻が出土したが、3号土塁状遺構と同様に、礎石建物跡の建築との関係が推察される。

土塁状遺構（第34・49・50・53・55・57・59、第6～10表、図版12・18・19・21・22）

3号土塁状遺構はP 16・17、Q 16、R 16・17、S 17～19区、4号土塁状遺構はO 13、P 13・14、Q 14区に位置する。いずれも当初は中世の土塁と推定して調査を行ったが、土塁ではなく、3・4号土塁状遺構ともに近世に行われた整地の際に出た土を寄せて、盛り上げたものと判明した。殊に、3号土塁状遺構は東側の礎石建物跡の建築に際しての整地に伴うものと考えられる。

遺物は、中世～近代の土器、陶磁器類、石製品（砥石・石臼・石塔）、銭貨、土製品などが焼土、炭化物と一緒に多量に出土し、その一部を掲載した。また、3号土塁状遺構南側の上面にはアサリ、ハマグリ、巻貝などの貝殻が広く分布していた。おそらく周辺の貝塚から持ち込まれたもので、礎石建物跡の礎石部分の築き固めに使用した残りと考えられる。

炭窯跡

近世～近代にかけての炭窯跡4基を確認したが、全体に遺存状態は不良であった。

1号炭窯跡（第35・54・57・59図、第8～10表、図版21）

M 21区に位置する。切土整地された平坦地にあり、西側には近世1号掘立柱建物跡がある。

窯は砂質の白色粘土で構築され、平面は全長585cm、炭化室は長さ335cm、最大幅210cm、焚口部の幅は42cmで所謂いちじく形を呈する。壁高は最も遺存の良好な部分で約40cm。煙道部は窯尻に認められ、長さ45cm、幅30cm。焚口部の外側には灰捨て穴と思われる径約90×80cm、深さ25cmと径約55×50cm、深さ約30cmの不整楕円形の穴が2基ある。また、本跡の北西側に径約175×160cm、深さ約50cmの不整形な穴と、それより焚口部に延びた長さ約340cm、幅25cmの小溝が認められる。この他に本跡の周囲には径約25～40cm、深さ約20～30cmの小穴14基が見られ、上屋が建てられていたものと思われる。

遺物は、覆土中より近世～近代の陶磁器、砥石、銭貨、泥めんこが出土し、一部を掲載した。

近世土坑

5基を確認した。J 18・19、K 18・19区付近に位置する。平面形から3つの種類に大別でき、小形の長方形が近世1・4号土坑、大型で不整楕円形の近世2・3号土坑、円形の近世5号土坑がある。

近世1号土坑（第36図）

M 19区に位置し、北側には近世2号土坑が近接する。平面は161×225cmの隅丸長方形で、深さは135cm。

遺物は、覆土中より近世～近代の土器、陶磁器、妬器が出土した。

近世2号土坑（第37・48図、第6表、図版11・18）

K 18・19区に位置する。西側の一部が近世3号土坑と接し、南側は近世1号土坑と近接する。平面は506×694cmの不整楕円形で、深さは約190cm。掘鉢状で底面には杭が打ち込まれていた。

遺物は、覆土中より近世の陶磁器片や丸太が出土し、底面には湧水が認められた。陶器1点を掲載した。

近世3号土坑（第36・48・57図、第6・8・9表、図版18）

K 18区に位置する。10号井戸跡と重複し、本跡が新しい。また、東側の一部が近世2号土坑と接している。平面は510×574cmの不整楕円形で、深さは261cm。掘鉢状で底面近くから丸太と漆片が出土した。

遺物は、覆土中より近世の土器、陶磁器、砥石、銭貨が出土し、一部を掲載した。

近世4号土坑（第36図）

K 17・18区に位置する。平面は174×231cmの長方形で、深さは142cm。

遺物は、覆土中より土師器片が1点出土した。

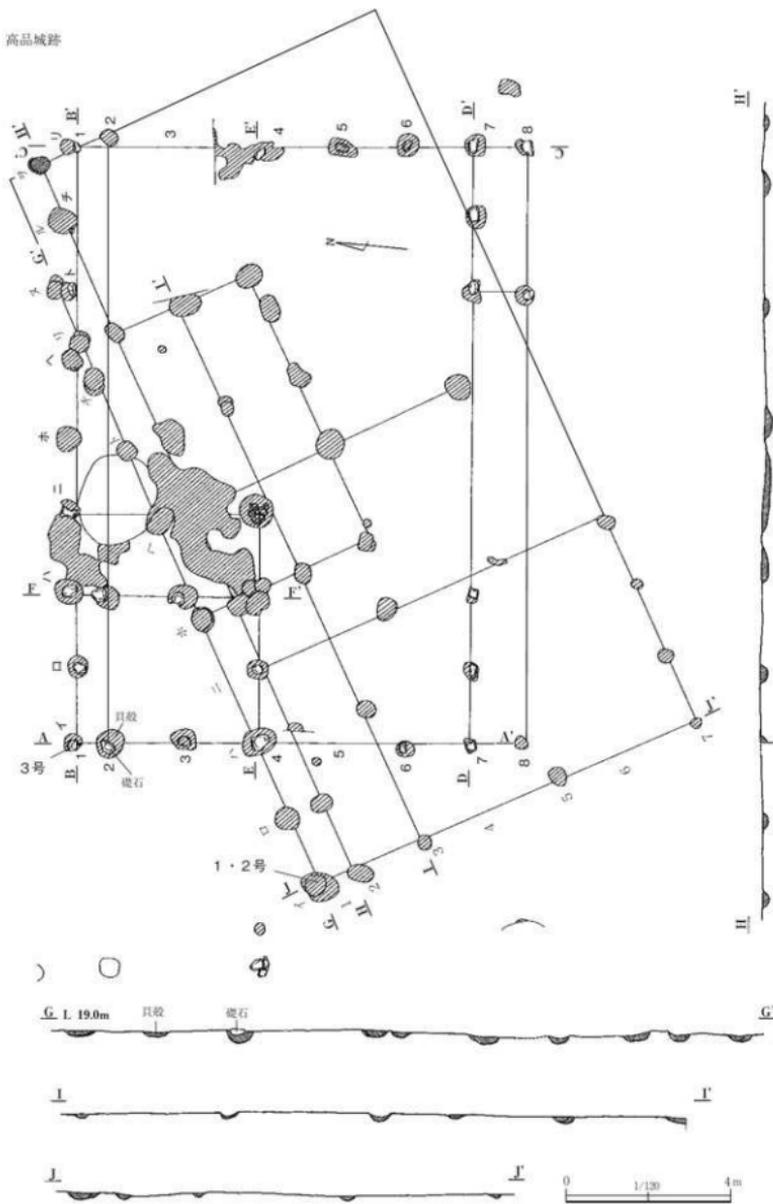
近世5号土坑（第37・57図、第8・9表、図版12・22）

J 18・19区に位置し、南側に1号井戸跡が近接する。平面は径約310cmの円形で、深さは約230cm。壁は大きく外傾する。底面からは湧水が認められ、覆土中より近世の陶磁器、土器、砥石、銭貨、底面近くから丸太や桶が出土し、一部を掲載した。

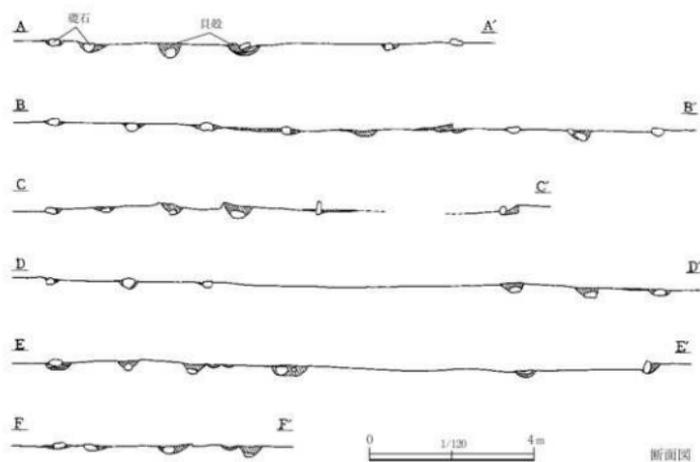
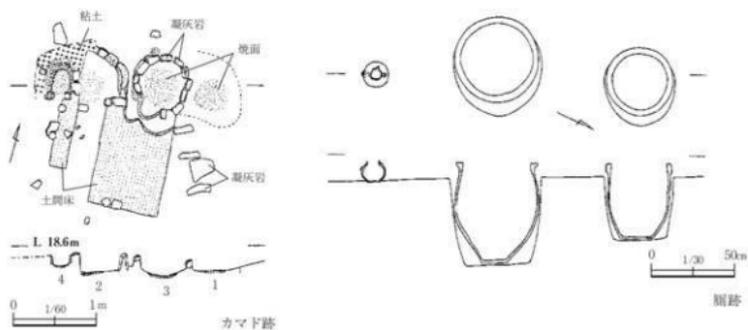
1号池跡（第38・48図、第6・8表・図版18）

Q 14・15区に位置する。北で大型堅穴跡、北西は4号土塁状遺構と重複し、大型堅穴跡を切り、4号土塁状遺構に切られていた。また、南北の土層観察から掘り直しが想定される。平面形・規模は、南北約810cm、東西約585cmの不整楕円形。深さ約90cmで、断面は皿状である。南東部の上場に沿って径25～45cm、深さ18～30cmの小穴が4基、法面及び外側から径5～10cmの小穴15基が確認された。また、底面などに径5cm程の木杭が6本程遺存していた。大きさから前述の15基の小穴も木杭の痕跡の可能性が高いが、その性格については不明である。覆土は4号土塁状遺構の端部を含め、18層に分層された。

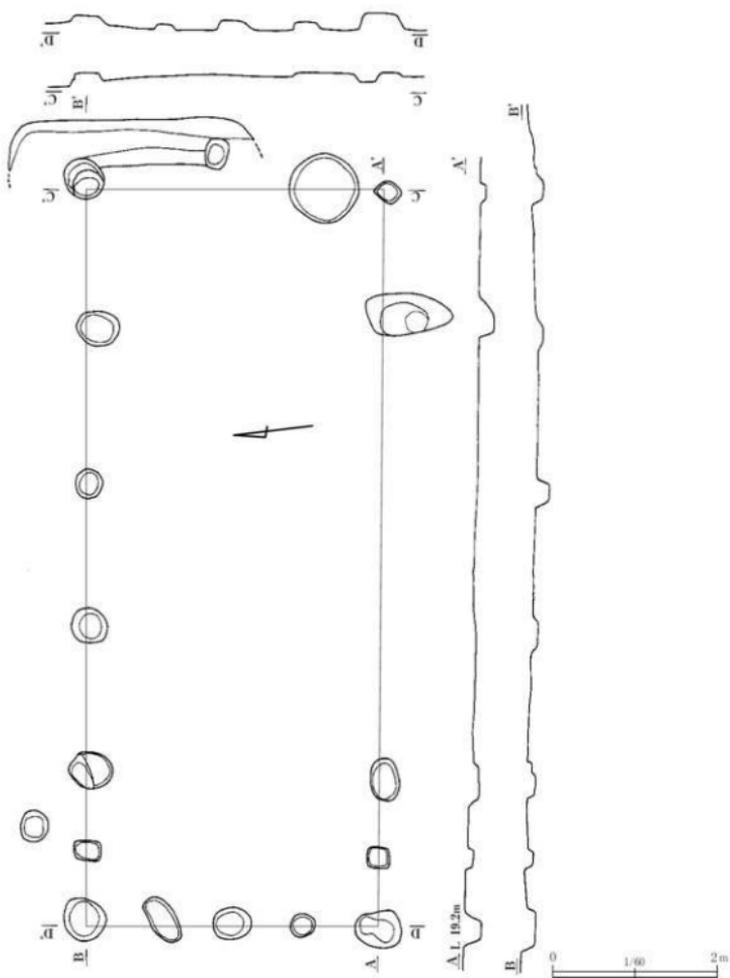
遺物は、覆土中より近世の土器、陶磁器、砥石などが出土し、一部を掲載した。



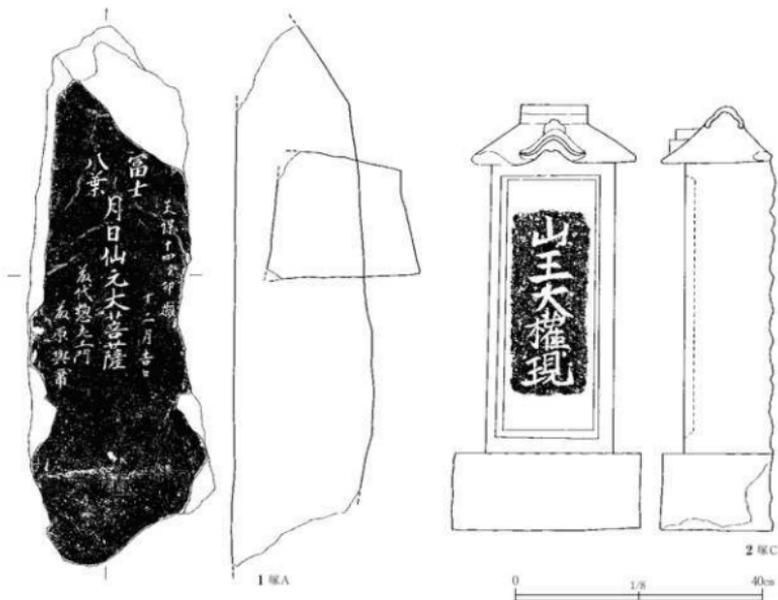
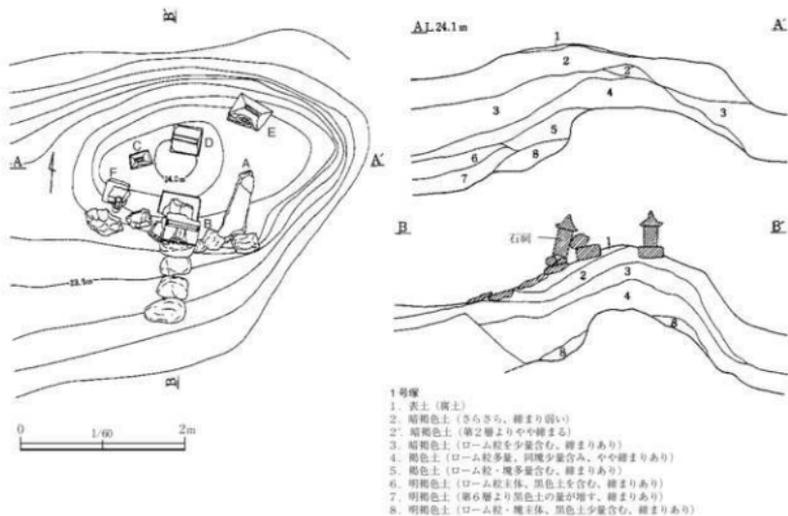
第28图 1~3号礎石建物跡、1・2号礎石建物跡断面图



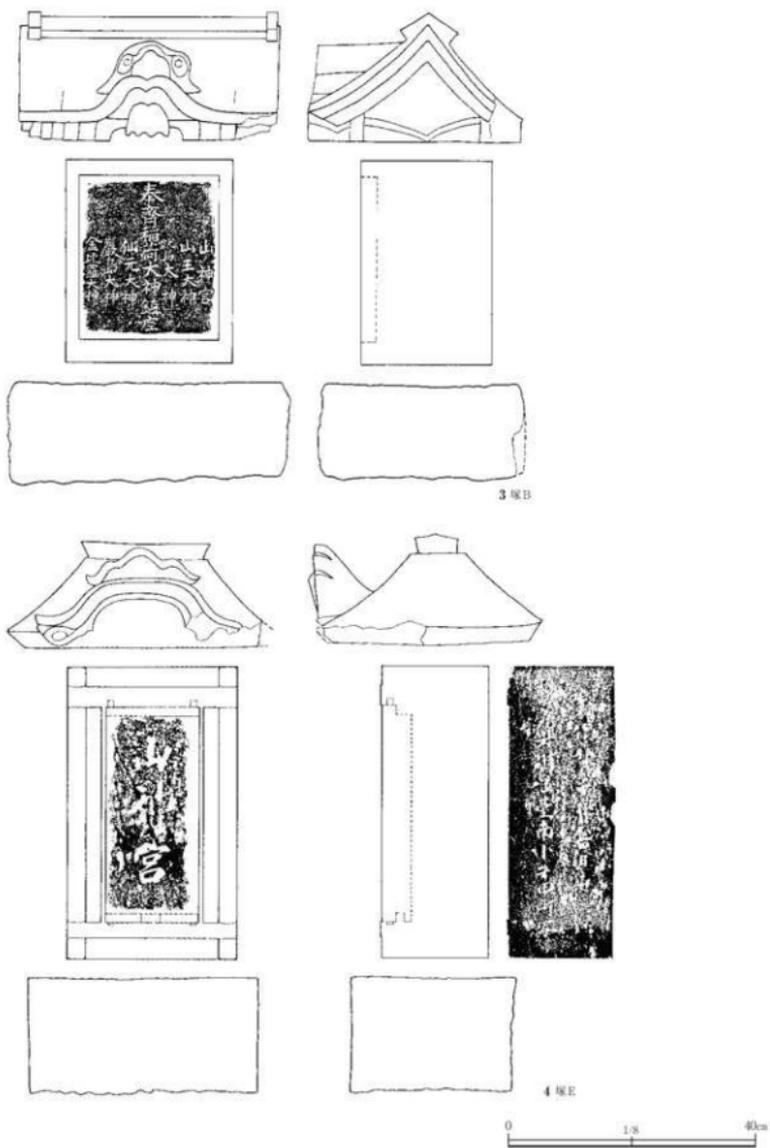
第29図 3号礎石建物跡カマド跡・厠跡・断面図



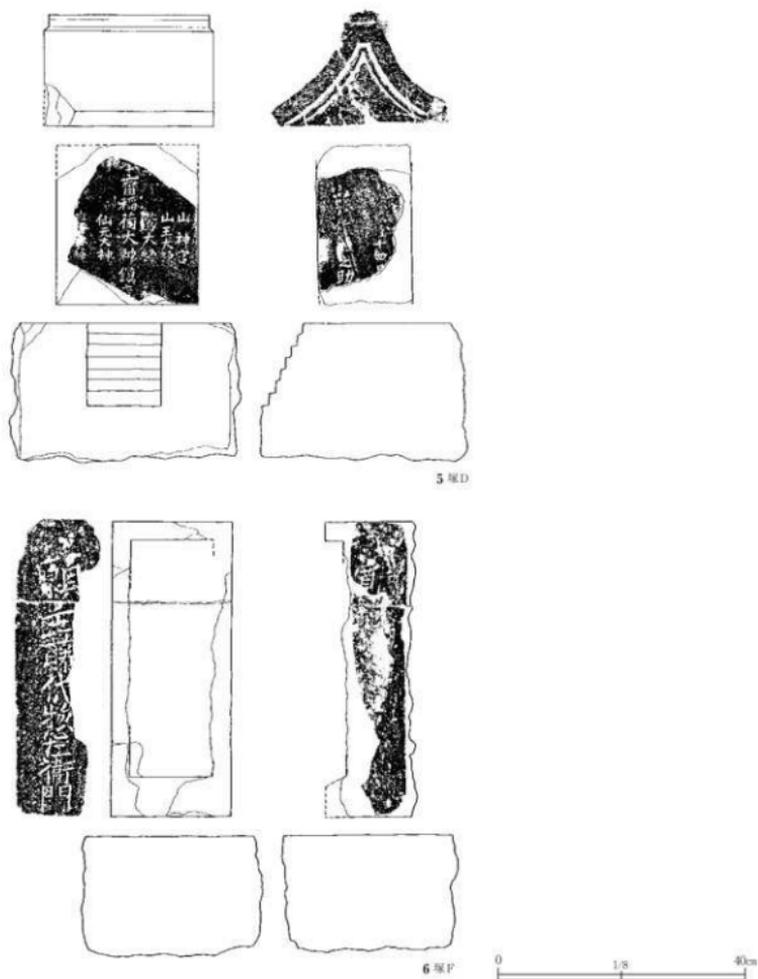
第30图 近世1号掘立柱建物跡



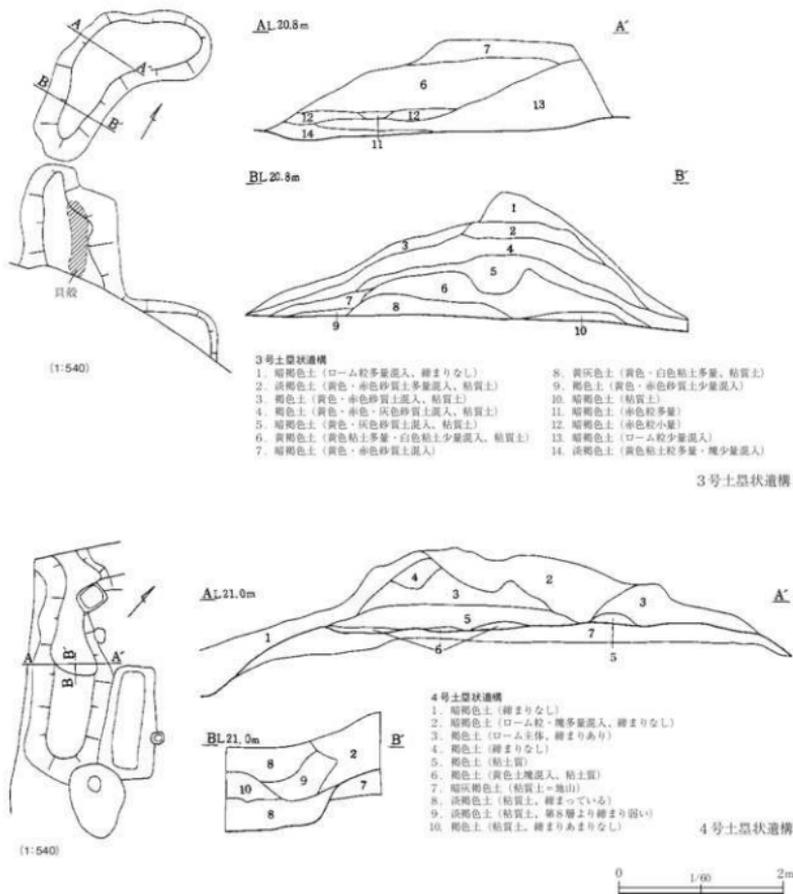
第31図 1号塚・石塔・石祠（1）



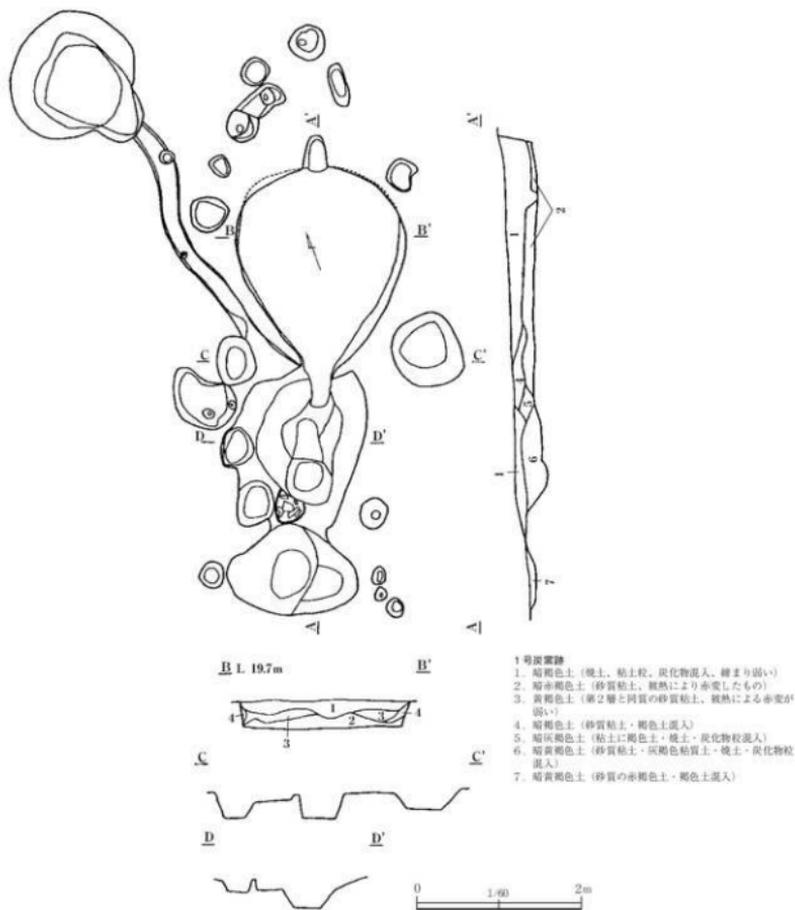
第 32 図 1 号塚石祠 (2)



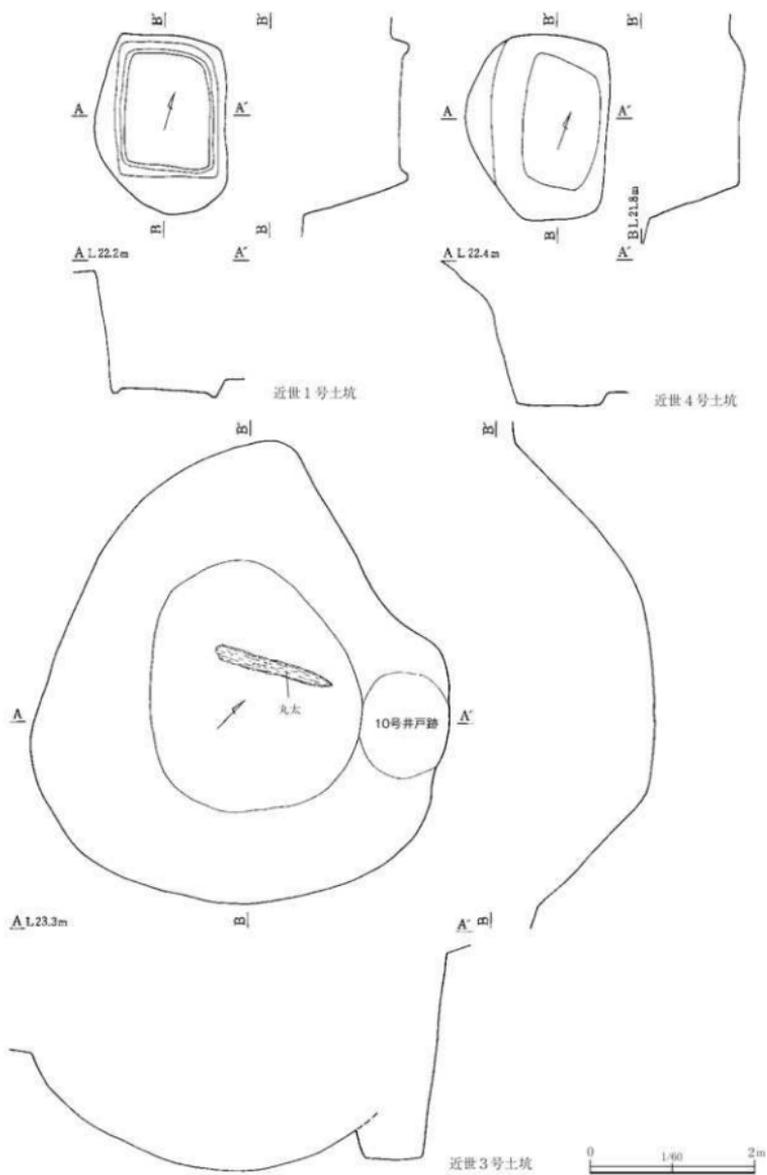
第33图 1号塚石祠(3)



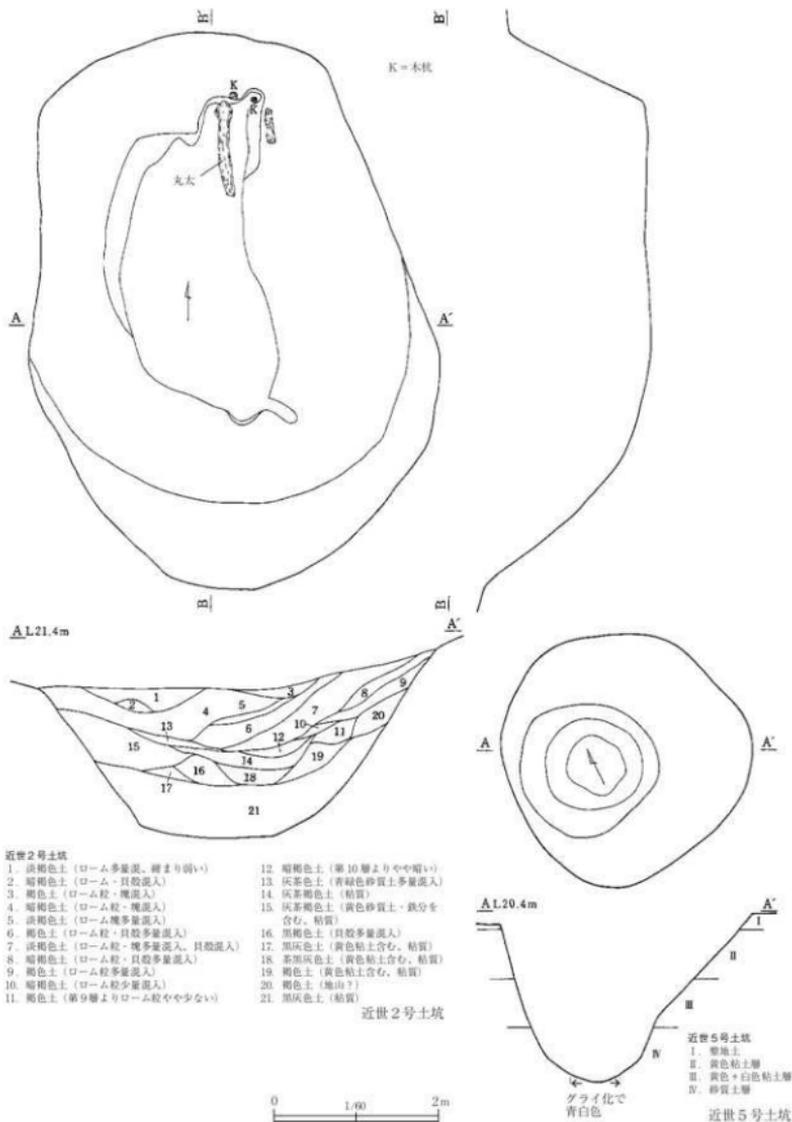
第34図 3・4号土塁状遺構



第35図 1号炭窯跡



第36图 近世1・3・4号土坑



- | | |
|---------------------------|----------------------------|
| 1. 淡褐色土 (ローム多量混入、跡まり弱い) | 12. 暗褐色土 (第10層よりやや暗い) |
| 2. 暗褐色土 (ローム・貝殻混入) | 13. 灰茶色土 (黄褐色砂質土多量混入) |
| 3. 褐色土 (ローム粒・塊混入) | 14. 灰茶褐色土 (粘質) |
| 4. 暗褐色土 (ローム粒・塊混入) | 15. 灰茶褐色土 (黄色砂質土・鉄分を含む、粘質) |
| 5. 淡褐色土 (ローム塊多量混入) | 16. 黒褐色土 (貝殻多量混入) |
| 6. 褐色土 (ローム粒・貝殻多量混入) | 17. 黒灰色土 (黄色粘土含む、粘質) |
| 7. 淡褐色土 (ローム粒・塊多量混入、貝殻混入) | 18. 黒灰色土 (黄色粘土含む、粘質) |
| 8. 暗褐色土 (ローム粒・貝殻多量混入) | 19. 褐色土 (黄色粘土含む、粘質) |
| 9. 褐色土 (ローム粒多量混入) | 20. 褐色土 (地山?) |
| 10. 暗褐色土 (ローム粒少量混入) | 21. 黒灰色土 (粘質) |
| 11. 褐色土 (第9層よりローム粒やや少ない) | |

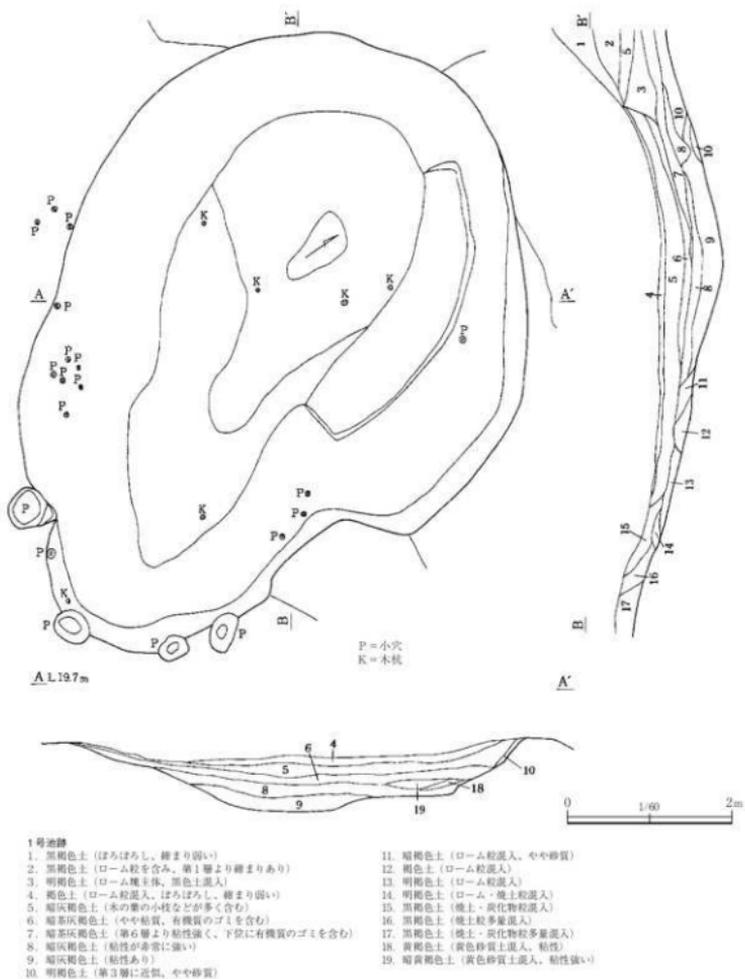
近世2号土坑

近世5号土坑

- I. 礫土層
II. 黄色粘土層
III. 黄色 + 白色粘土層
IV. 砂質土層

近世5号土坑

第37図 近世2・5号土坑



第38図 1号池跡

第4節 中・近世の遺物

今次調査では、土器、陶磁器類を主体に、石製品、金属製品、土製品などが出土した。しかし、中世の遺物は少なく、近世以降の遺物が大部分を占めるが、廃城以降の土地利用の変遷を示す資料として合わせて掲載した。

土器（第39～42・44～53図、第6表、図版13～20）

土師質土器皿とした所謂「かわらけ」類は、中世～近世にわたるものが出土した。いずれもロクロ整形で底部糸切り、胎土に海綿骨針を含む在地産である。一部油煙が付着し、灯明皿に転用したものが認められた。内耳鍋としたものは、すべてが内面に耳の存在を確認したのではない。断面形状は土製播鉢に近いものの、クシ目が認められず、外面にススの付着が見られたものも含めた。また、一部瓦質のものも見られた。土器播鉢も一定量見られた。これらも、胎土に海綿骨針が含まれるものが多い。概ね15～16世紀代と考えられる。内耳焙烙、焙烙は丸底でやや深め、平底で著しく浅いもの、両者の中間的深さのもの、とがある。また、耳を持つものと、持たないもの、ロクロによる整形、型による整形など多様である。これらにも胎土に海綿骨針を含むものが多く見られた。この他、火鉢・手あぶり・植木鉢があり、植木鉢はやや瓦質。火鉢・手あぶりには角形と丸形があり、角形は16世紀代、丸形火鉢と植木鉢は18世紀以降と思われる。

陶磁器（第39～53図、第6表、図版13～20）

出土したのはいずれも国産の陶磁器（妬器含む）類で、出土遺物の大半を占める。

妬器は、常滑産の甕類が主体で、14世紀代は極僅かであるが、15・16世紀代に増加し、それ以降も使用が認められる。17世紀以降には信楽産や備前産の播鉢が見られる。陶器はほとんどが瀬戸・美濃産で、一部信楽産や唐津など九州産のものも認められた。これらも、15世紀代の古瀬戸瓶子や緑釉皿などの他15～16世紀代の天目茶碗や丸壺、種々の皿類、仏花瓶などが見られたものの、大部分が17世紀以降のものであった。近世末～近代には益子産や会津産など、関東・東北諸窯の製品も含まれる。

磁器類は、近世以降の所産であり17～18世紀には肥前系で占められ、皿、碗、鉢などが見られた。19世紀以降は瀬戸・美濃産が多量に含まれるようになり、器種も多様化する。なお、肥前産の磁器皿・鉢などには、所謂「焼き継ぎ」の施されたものが見られ、珍重されていたことが知られる。

石製品（第31～33・53～56図、第7・8表、図版21）

石製品としては、硯、砥石、石臼、石塔類、石祠などがある。石製品は塚上の記年銘のある石塔・石祠の他、形態的特徴を示す石塔類の他は帰属時期を明確にし難いのが現状である。硯は10数点出土したが、石質や製作手法から在地産と思われるものを掲載した。砥石は各遺構・地区より210点以上出土した。使用石材の主体は凝灰岩で、その他に砂（岩）質のもの、その他の石材のものが少量出土している。なお、砥石の代用として使用された瓦片が3点あり、近世以降の所産と考えられる。用材の加工痕をのこすものが多く見られ、

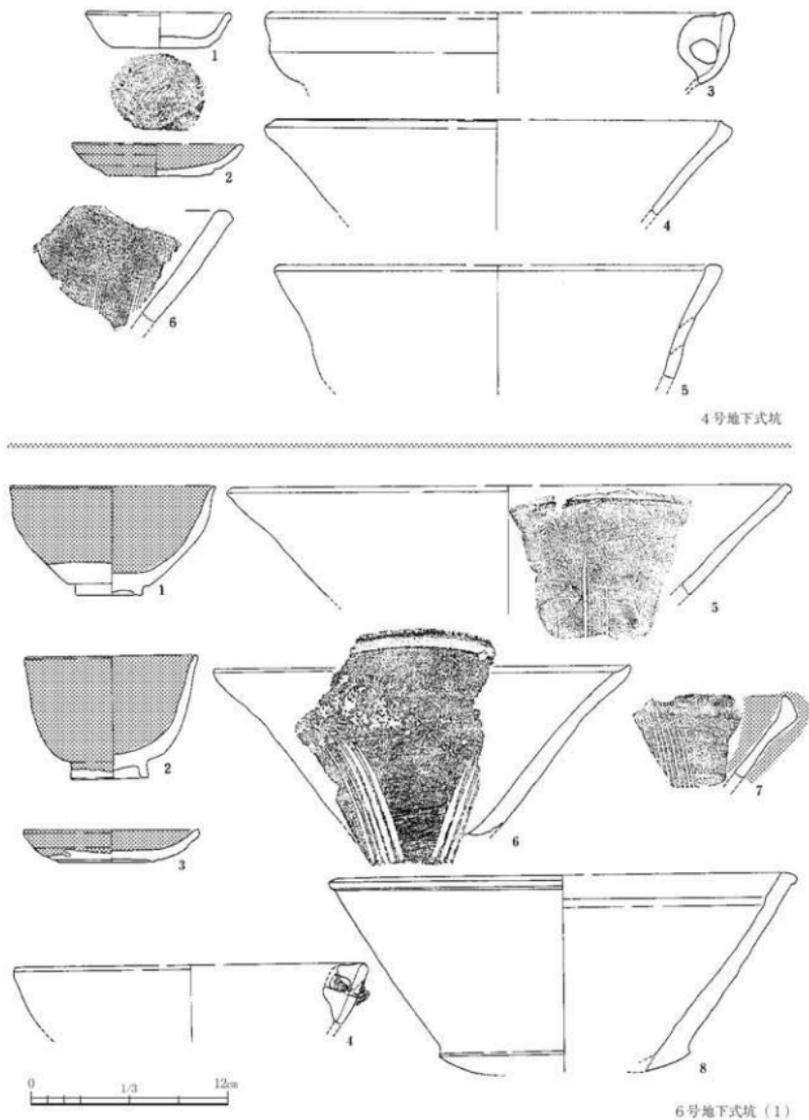
研ぎ面も1～4面と様々である。出土数が多く各種遺構や各地区より出土した。石臼は6点程出土し、殻臼の上臼、茶臼の上臼を掲載した。未掲載のものの中には、茶臼下臼の受皿部分の破片が複数見られたが、上臼とは石材が幾分異なっており、他の組み合わせが想定される。石塔類は、1号塚の上に祀られていた石塔・石祠（A～F）と、調査で出土した五輪塔、宝篋印塔の部材がある。前者は出土遺物ではなく、調査・記録の後移転して再び安置した。記年銘などは前述の通りである。出土の石塔類は、五輪塔の「空風輪」「火輪」「水輪」「地輪」、宝篋印塔の「相輪部」「笠部」「塔身部」「台座部」などである。4号地下式坑・1号塚より「空風輪」、12・14号地下式坑より「地輪」、大型竪穴跡・6号地下式坑より「笠部」が出土した他は、調査区内に広範囲に分布していた。

金属製品（第57・58図、第9表、図版22）

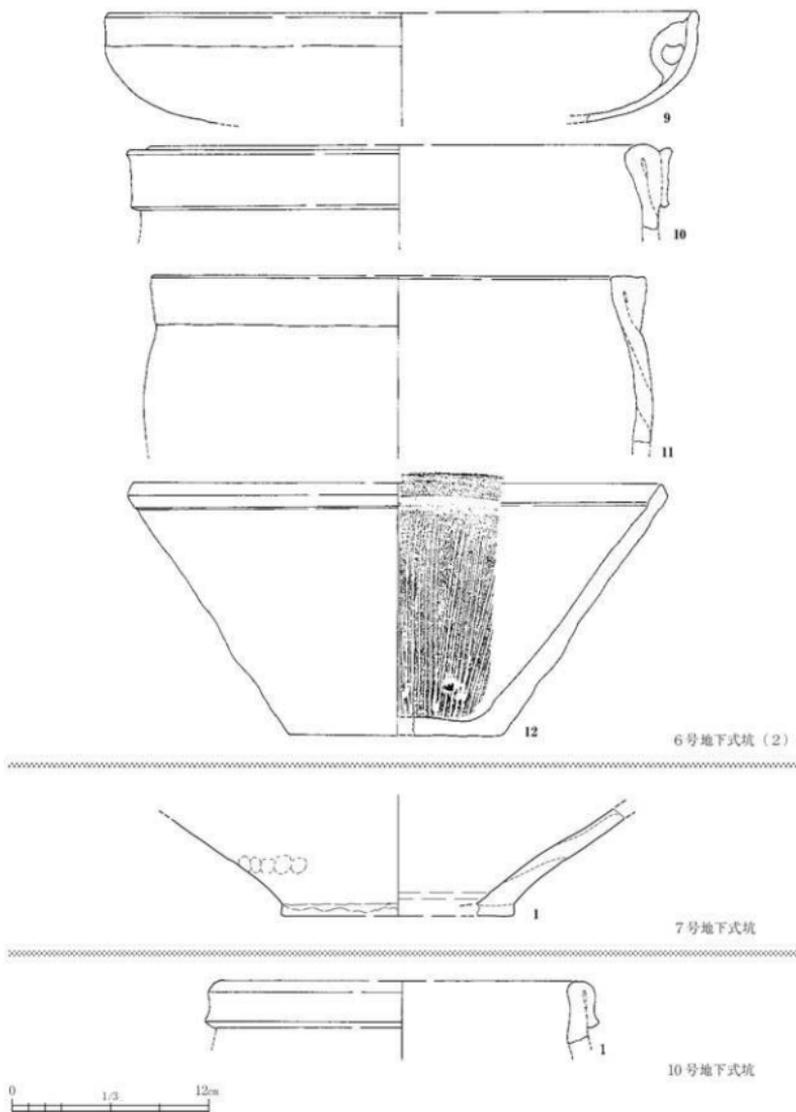
金属製品としては、銭貨、キセル、鉛玉、筭などが出土し、銭貨を掲載した。計59点のうち唐銭、北宋銭、明銭などの渡来銭が10点、寛永通宝が46点、文久永宝2点、不明1点である。遺構との属性を見ると、8号地下式坑より北宋銭「明道元宝」、大型竪穴跡より北宋銭「至道元宝」「至和元宝」「○宋○宝（皇宋通宝?）」が特徴的であり、18号地下式坑より出土の「寛永通宝」は他の多量の近世陶磁器とともにゴミ穴として後世の利用を示している。また、3号礎石建物跡、1号塚、3・4号土壘状遺構、1号炭窯跡、近世3・5号土坑より出土の「寛永通宝」もその属性を明示する。

土製品（第59図、第10表、図版21）

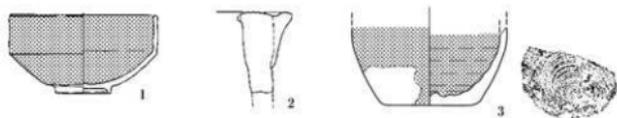
いずれも玩具類と見られる土人形、泥めんこ、飯事道具が出土し、土人形と泥めんこの一部を掲載した。いずれも近世の所産である。土人形はいずれも二次被熱を受けたものか器面が荒れる。2点は「下総雛」と思われる女性座像、もう1点は女性立像に幼児と赤子が伴い、「常盤御前」と推定される。泥めんこは人（鬼）面を現したのものや丸に各種の文様を付したものがある。一般的に、泥めんこが地方（特に千葉方面）の畑地より出土した場合、江戸の下肥とともに運ばれたと判断されるが、本跡の場合は屋敷内での出土であり、本来の目的（玩具）で搬入されたものと判断される。



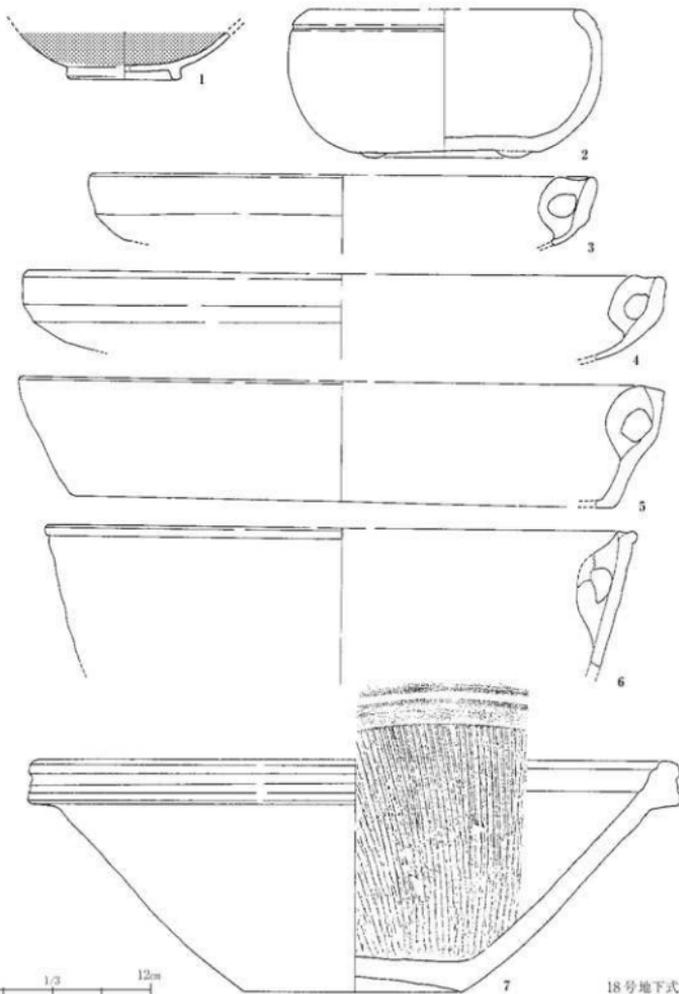
第39图 4・6(1)号地下式坑出土遺物



第40图 6 (2) · 7 · 10号地下式坑出土遺物

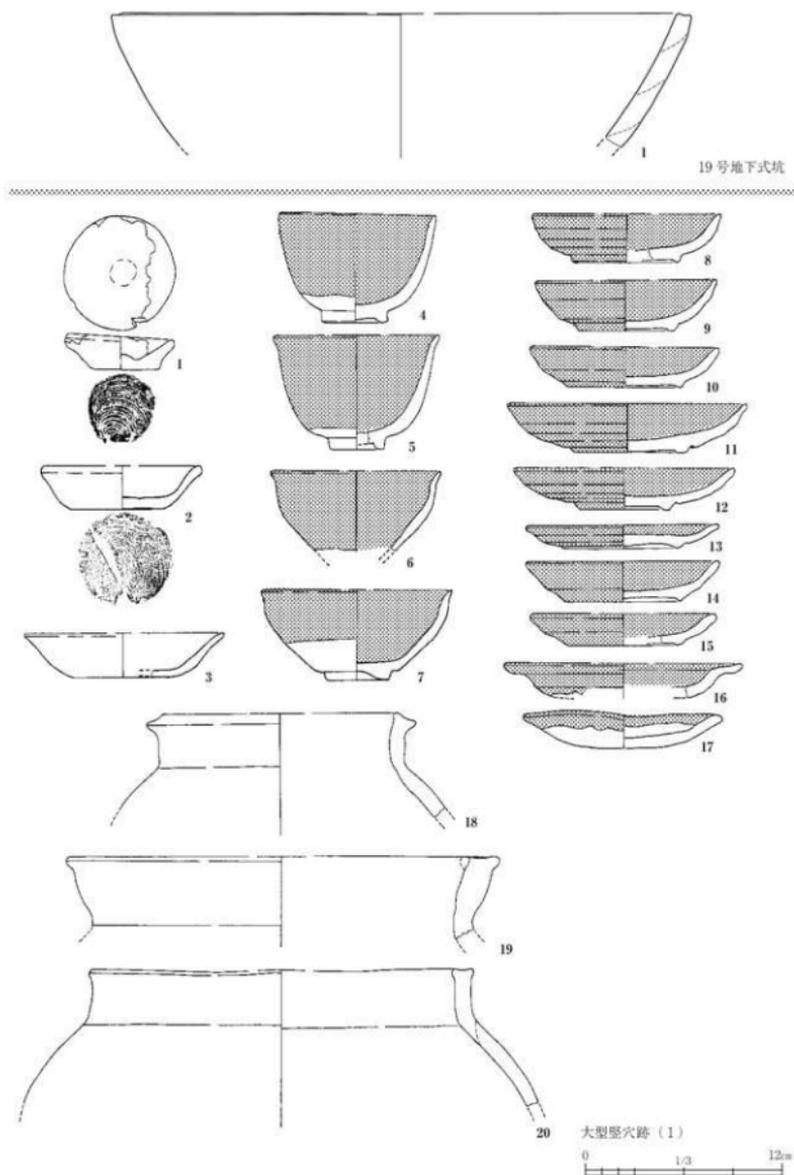


16号地下式坑

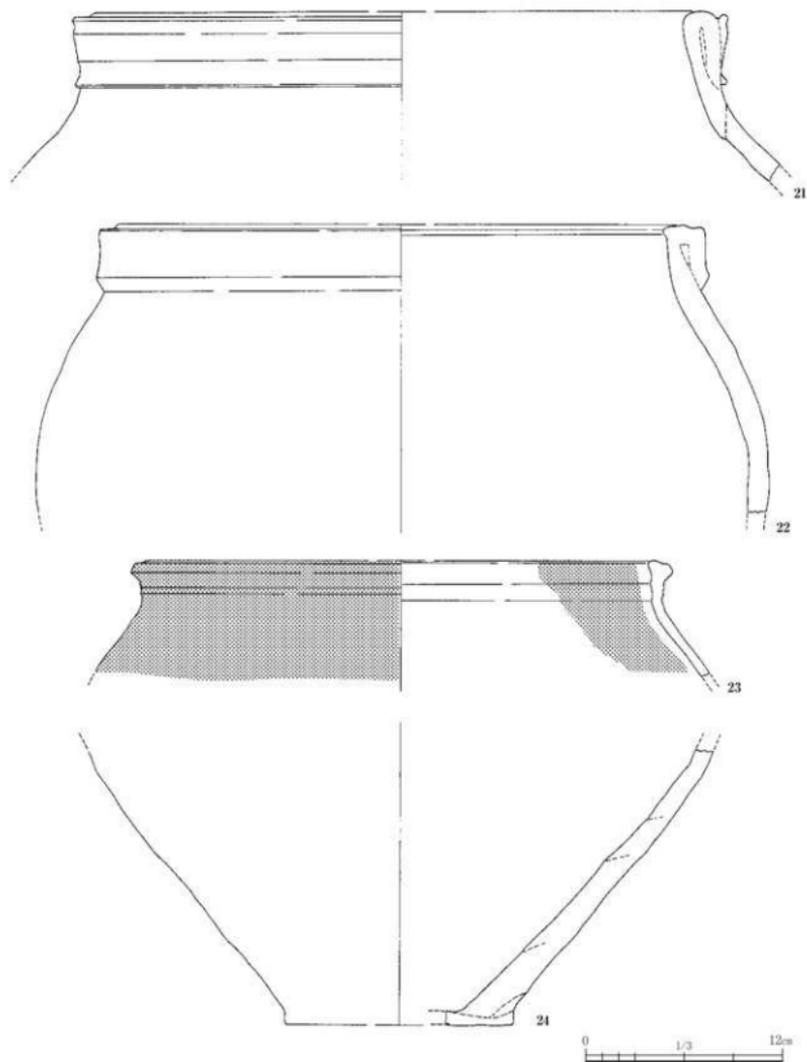


18号地下式坑

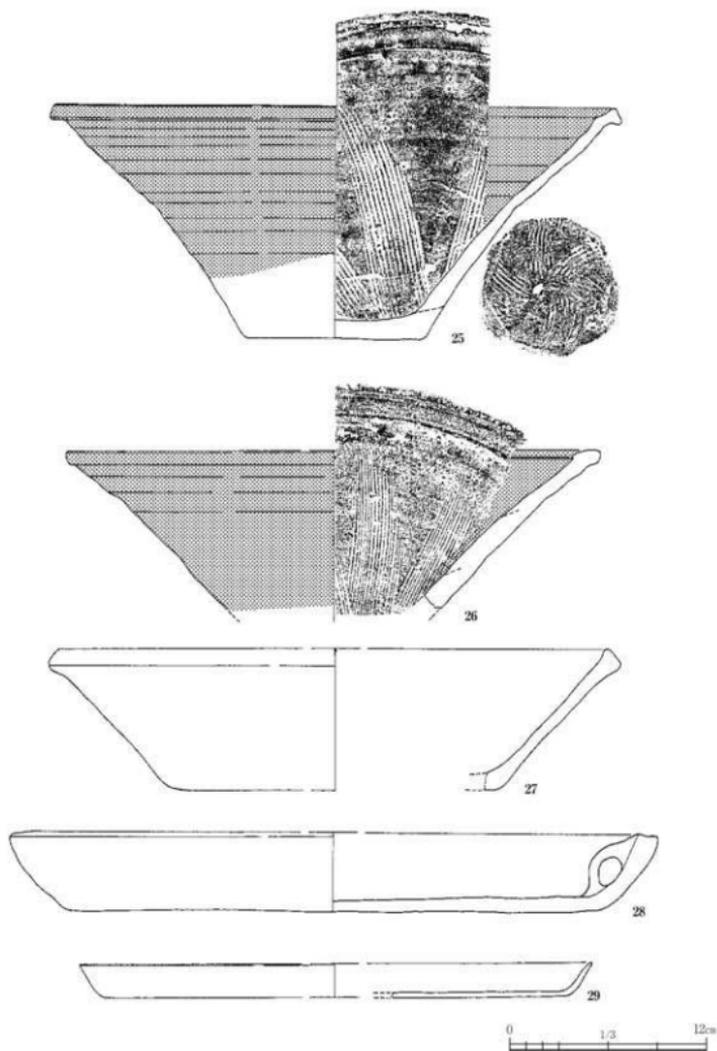
第41图 16・18号地下式坑出土遺物



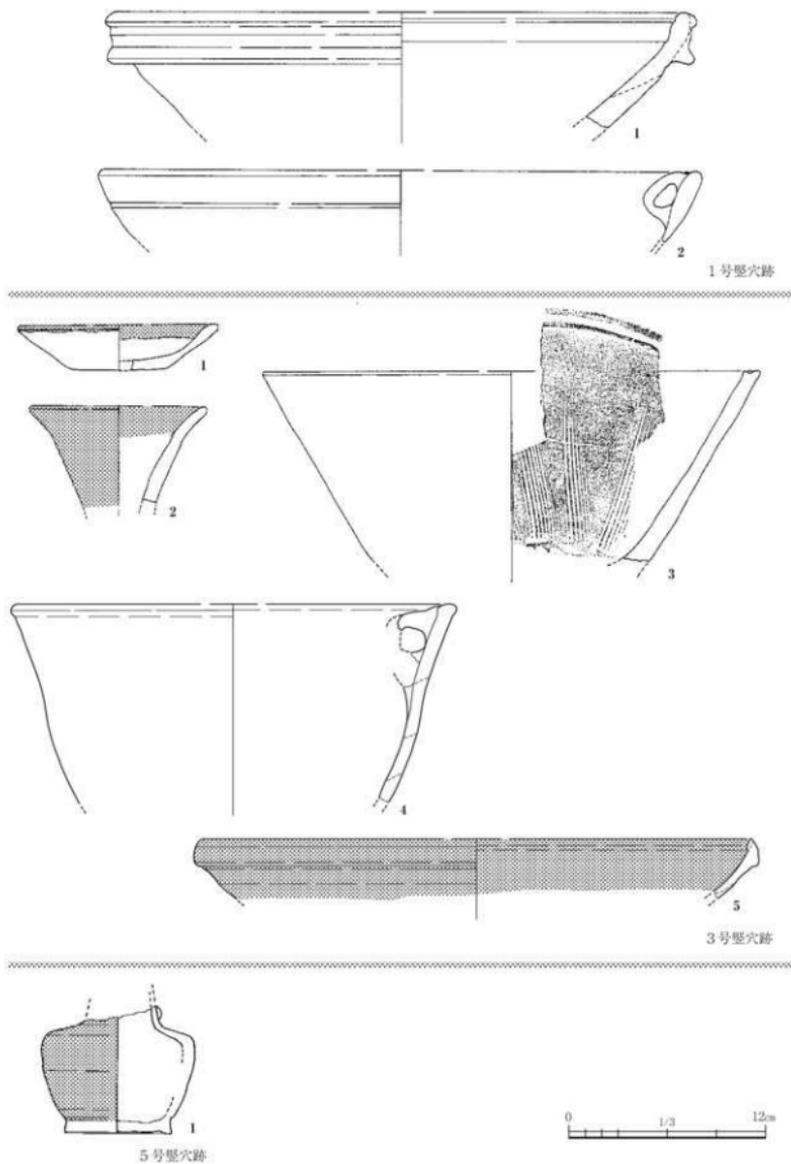
第 42 図 19 号地下式坑・大型堅穴跡 (1) 出土遺物



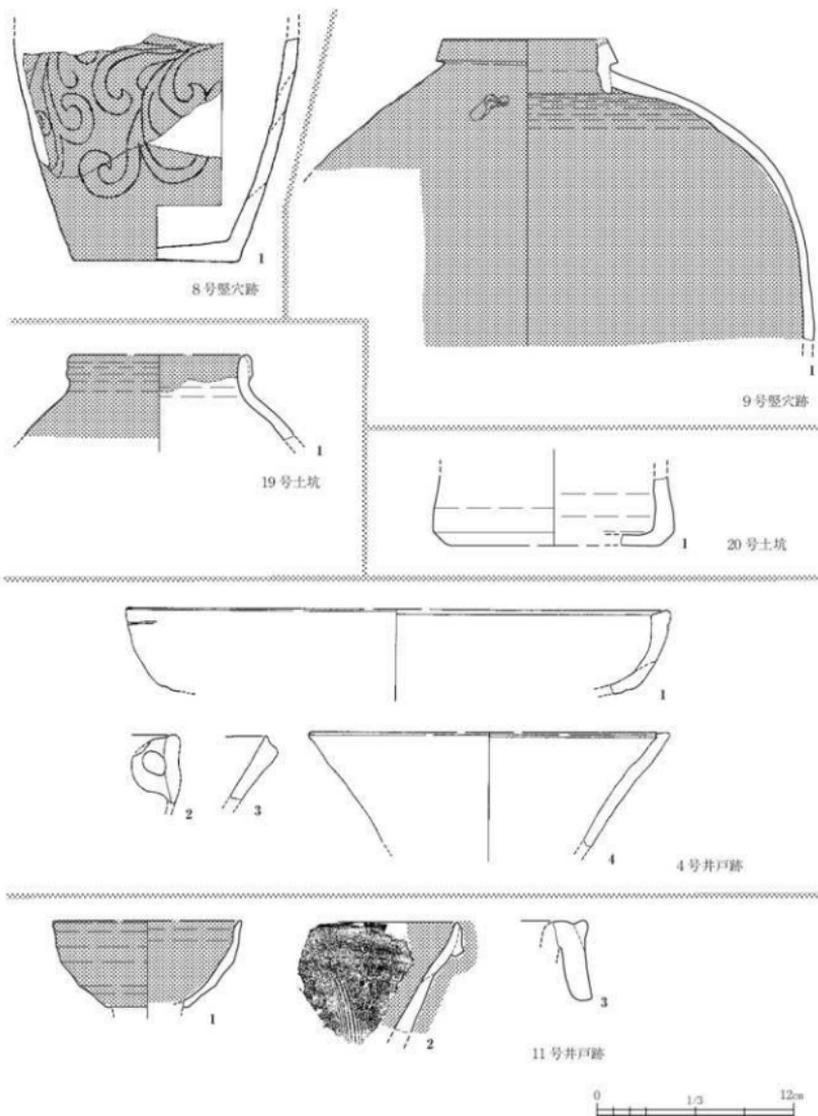
第43図 大型壺穴跡出土遺物(2)



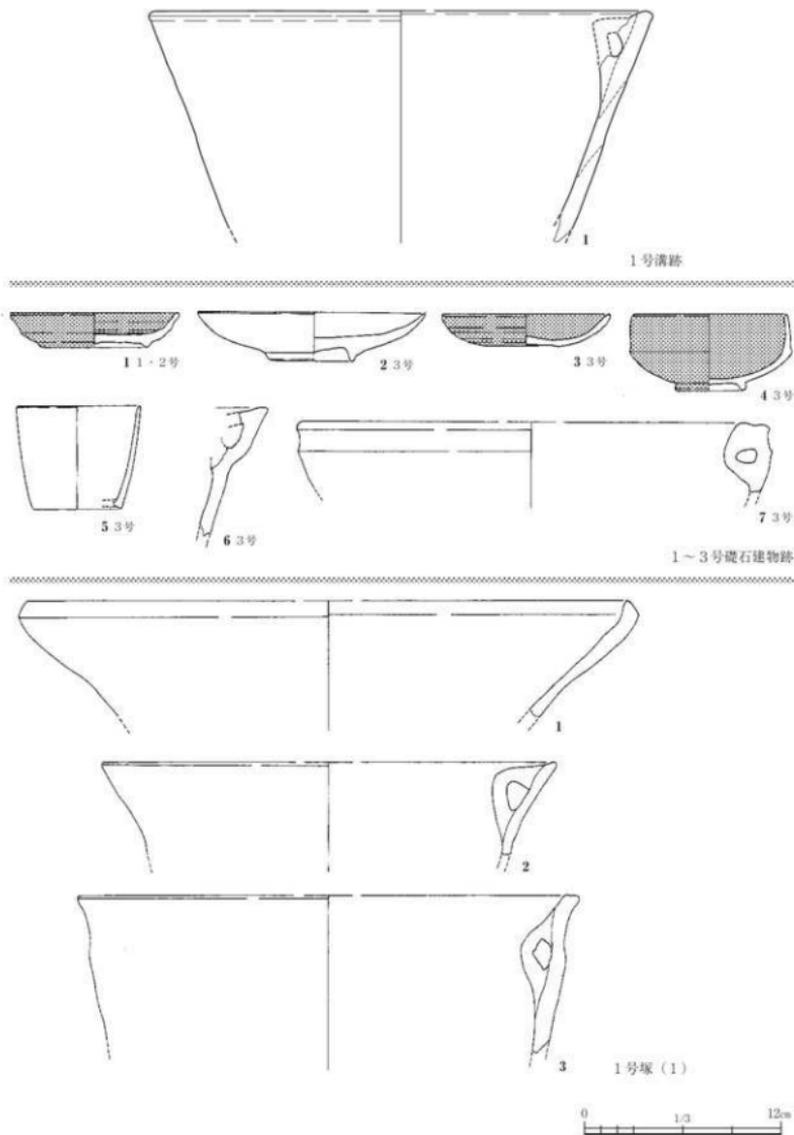
第44図 大型竪穴跡出土遺物(3)



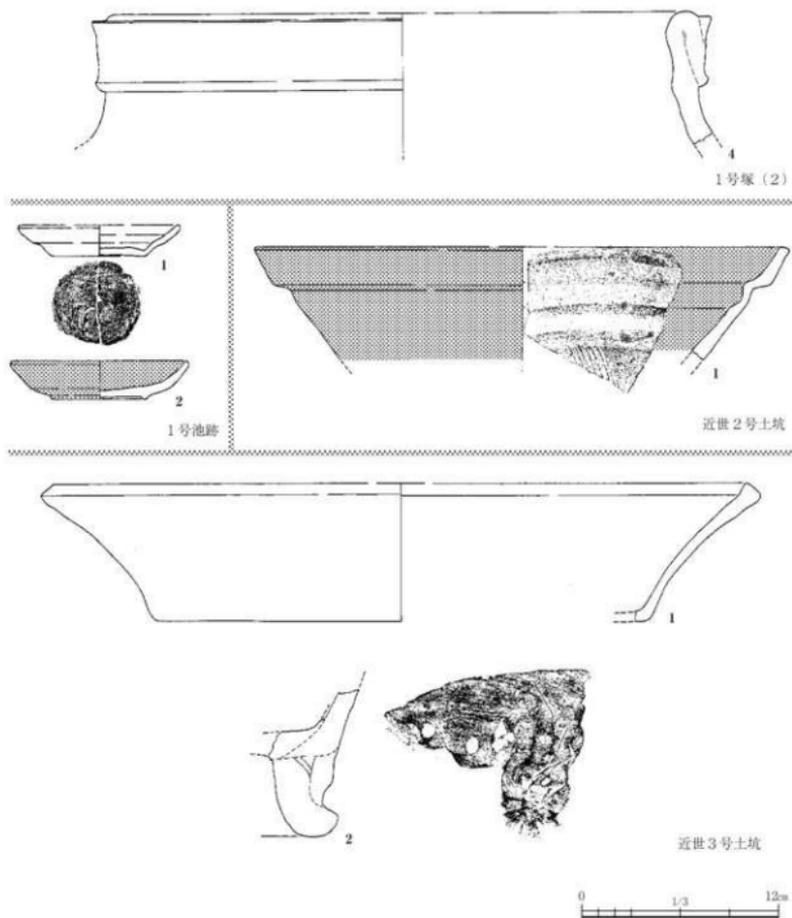
第45圖 1・3・5号壺穴跡出土遺物



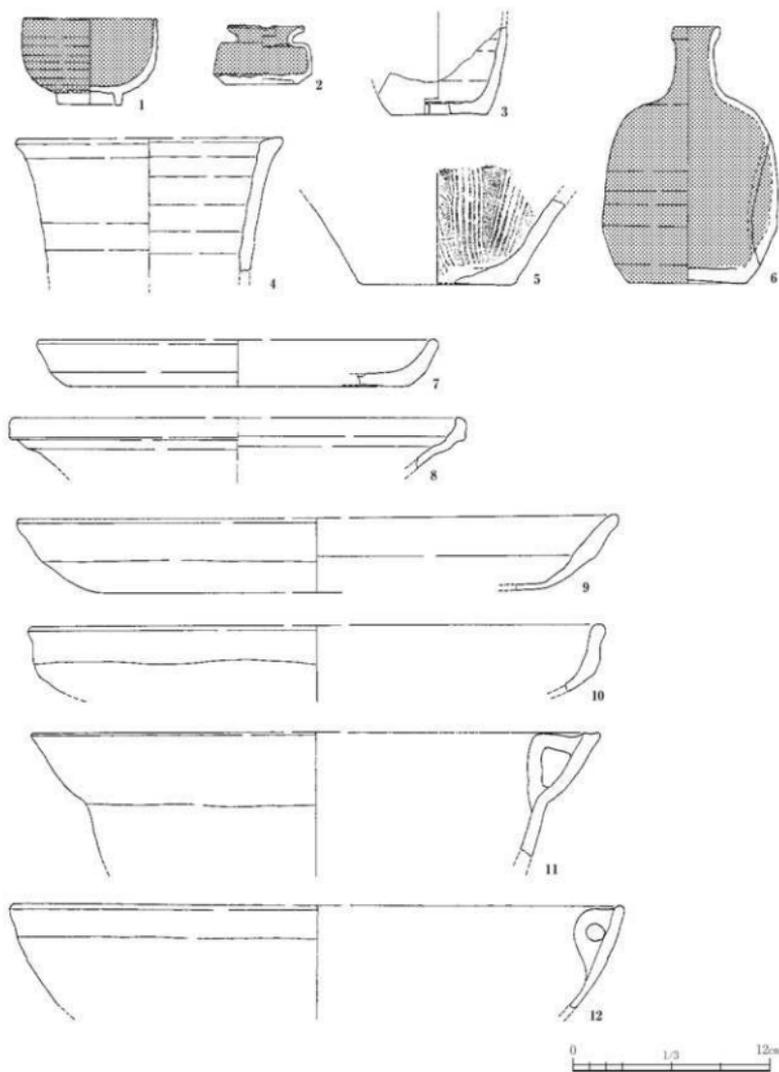
第46图 8·9号壺穴跡·19·20号土坑·4·11号井戸跡出土遺物



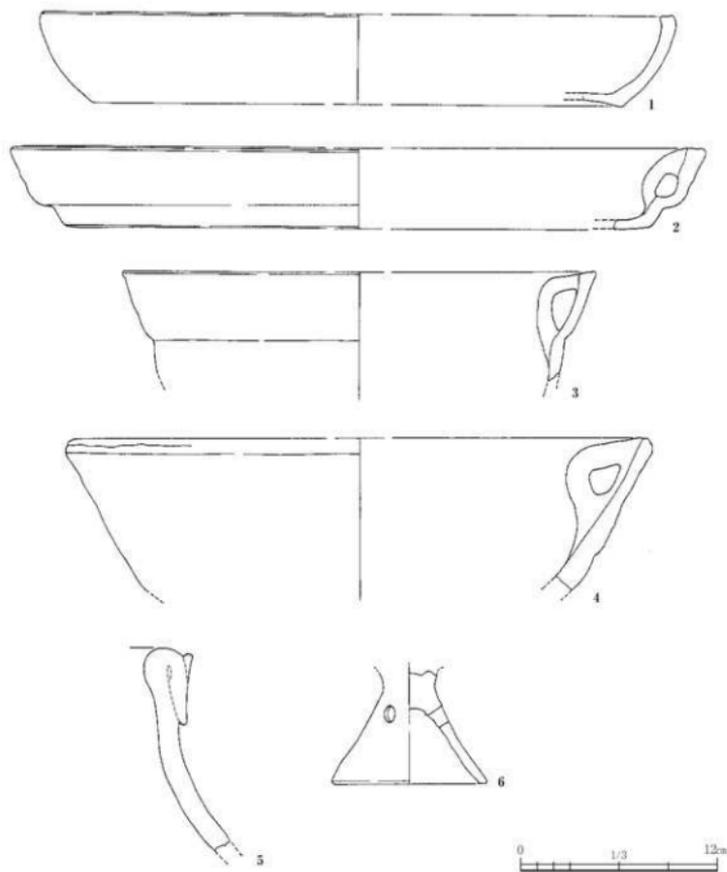
第47図 1号溝跡・1~3号礎石建物跡・1号塚(1)出土遺物



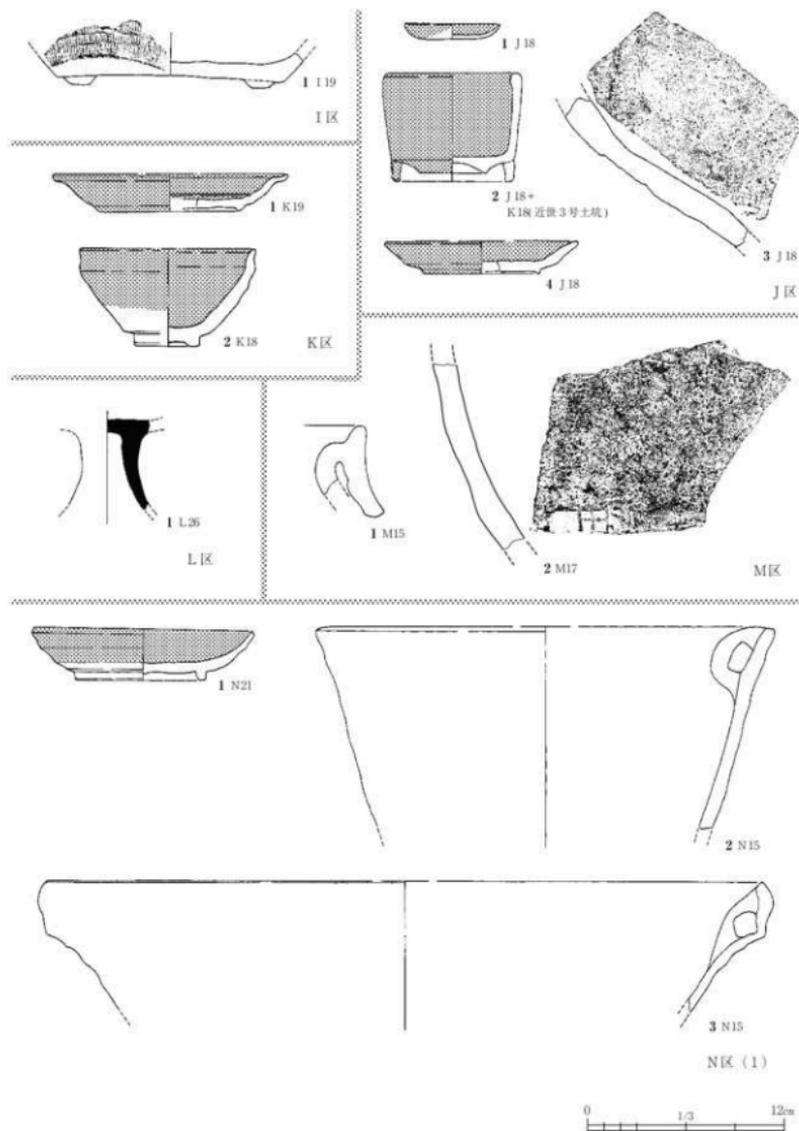
第48図 1号塚 (2)・1号池跡・近世2・3号土坑出土遺物



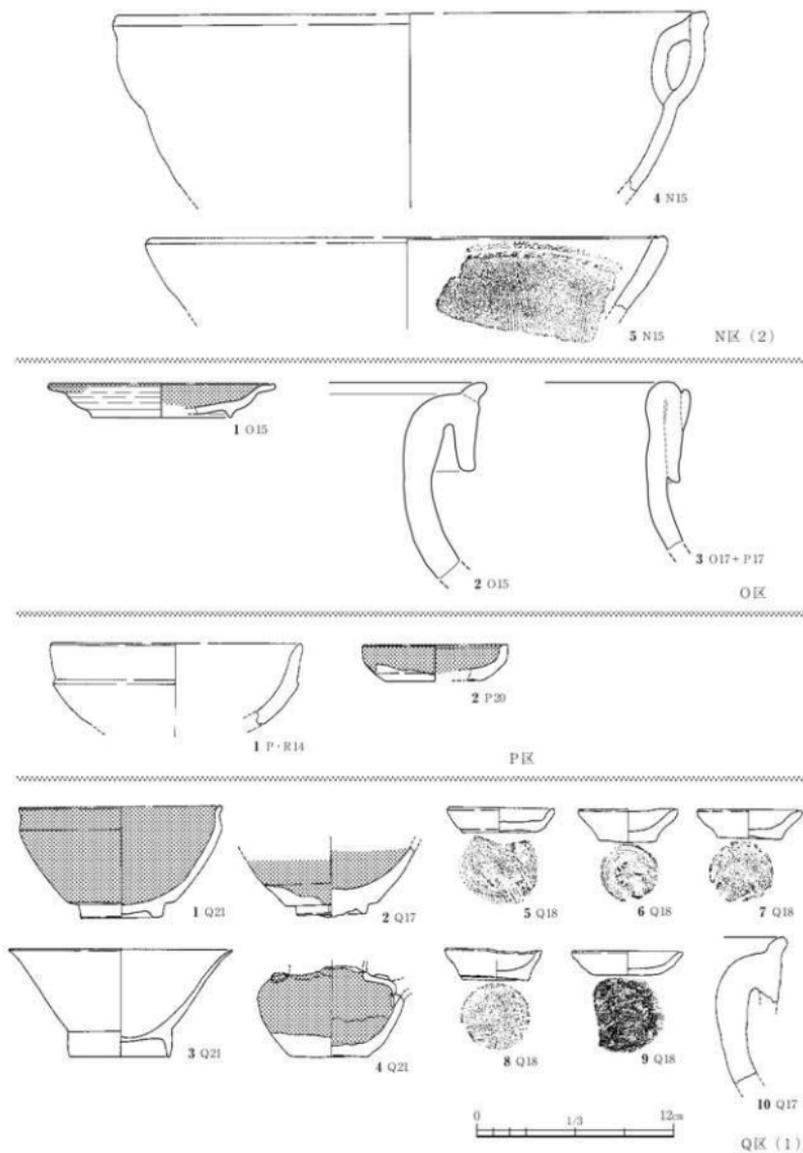
第49図 3号土壘状遺構出土遺物



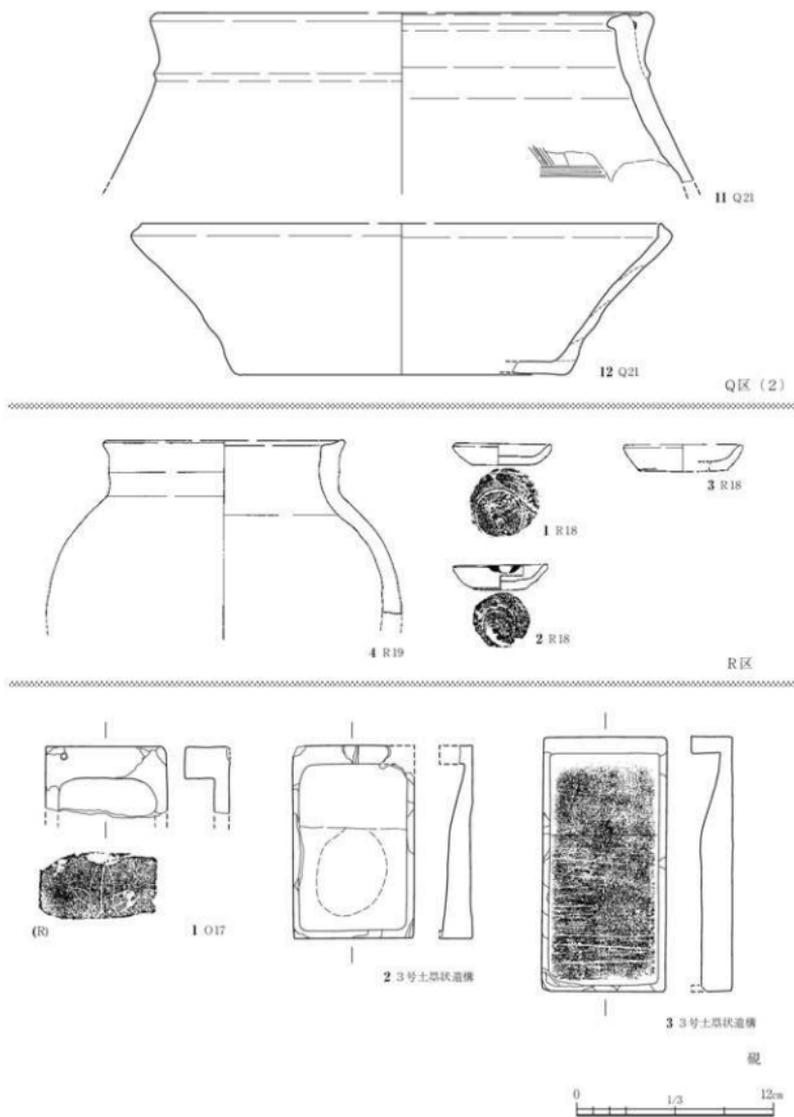
第50図 4号土壘状遺構出土遺物



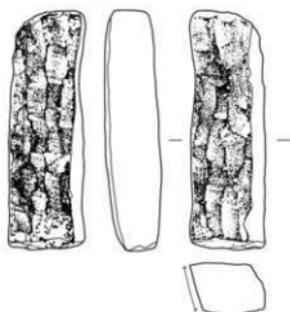
第51回 グリット出土遺物(1)



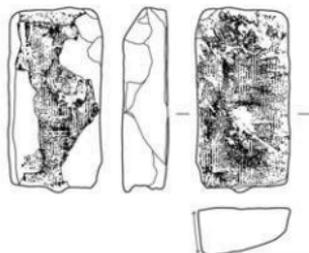
第52図 グリット出土遺物(2)



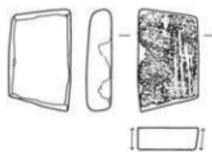
第53図 グリット出土遺物(3)、硯



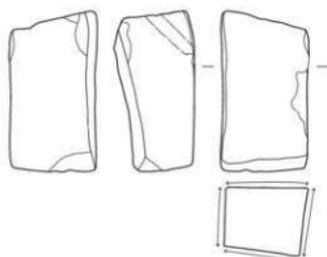
5 大型整穴跡



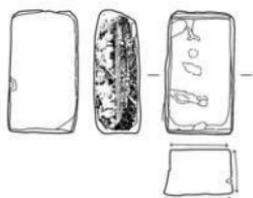
91号穴窟跡



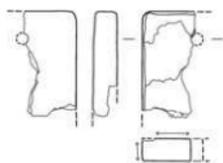
19 9号整穴跡



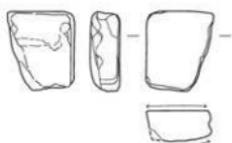
29 M19



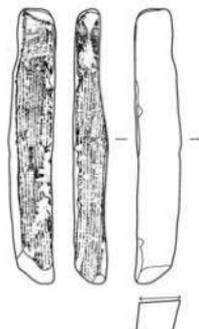
34 M18



104 Q17

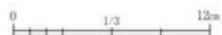


212 6号地下式坑

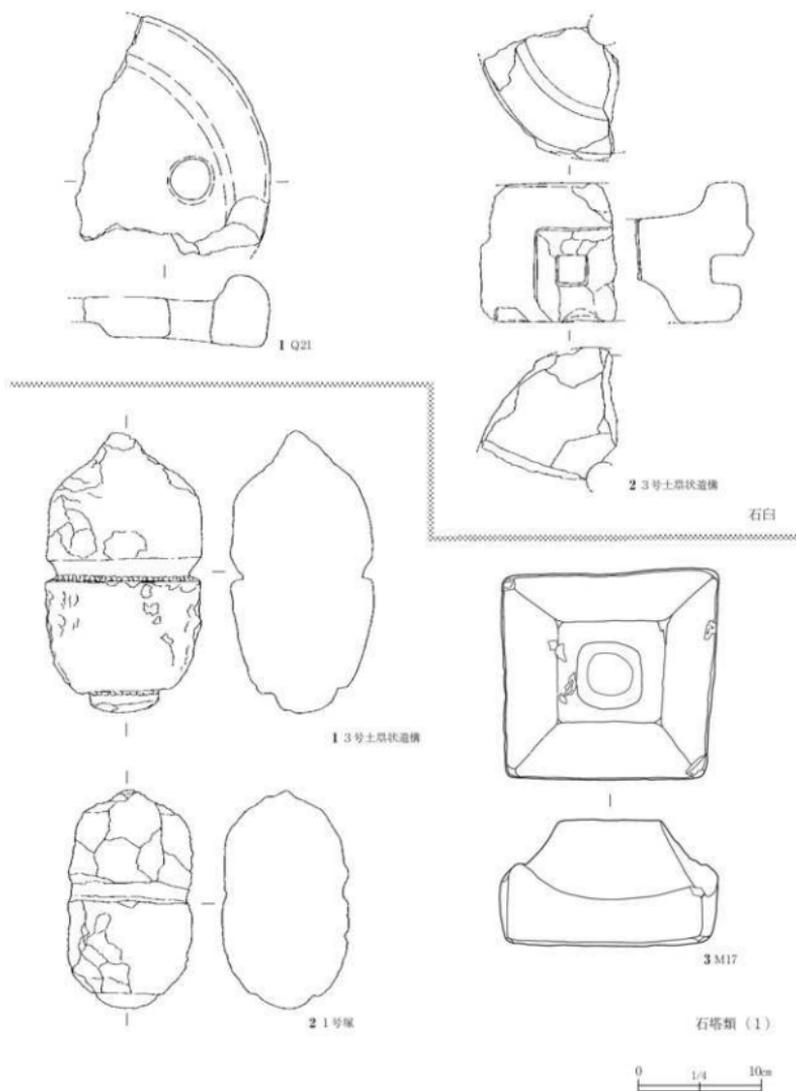


119 P14

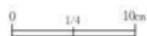
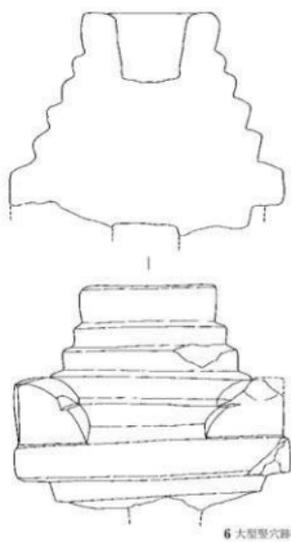
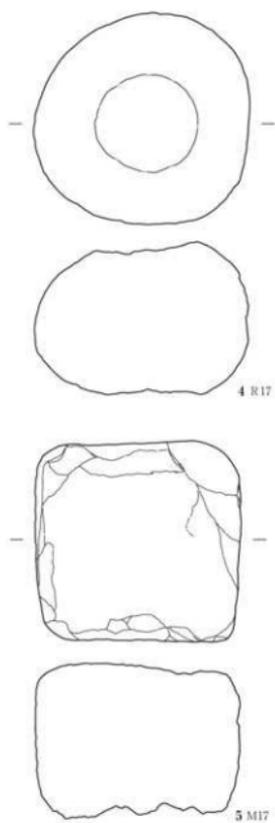
Noは計測表と合致する



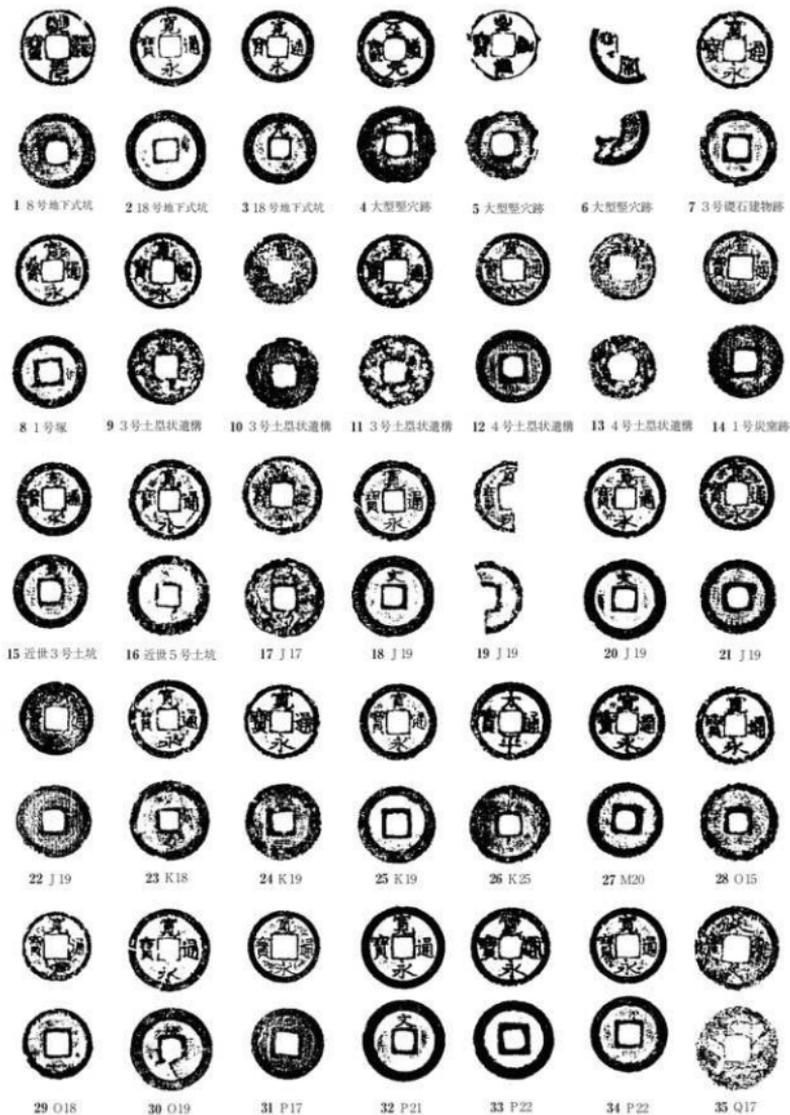
第54図 礎石



第55図 石白、石塔類 (1)

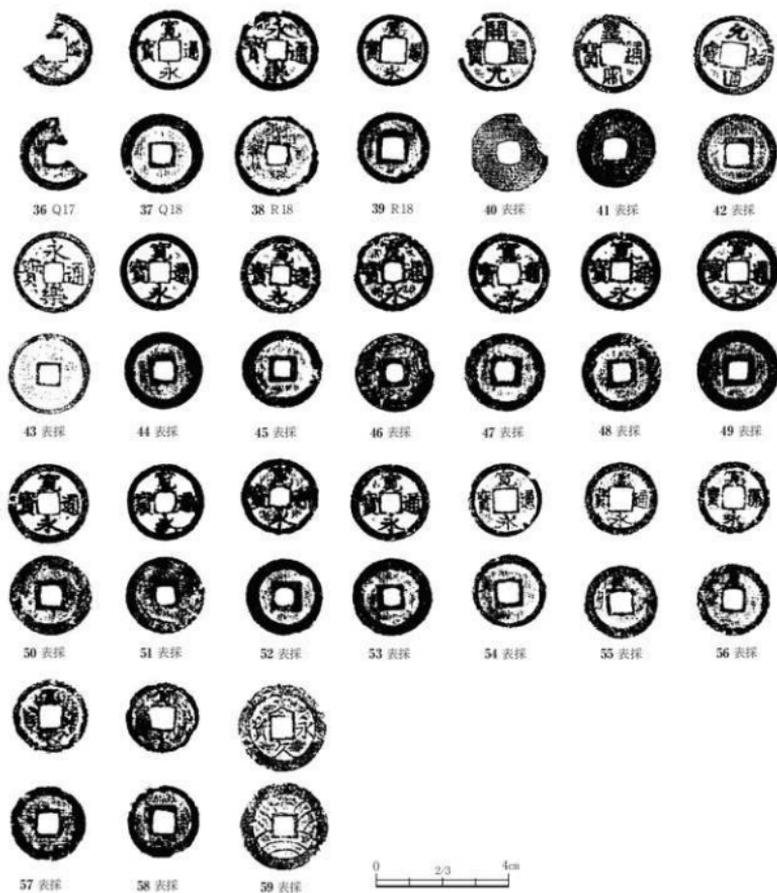


第56図 石塔類(2)

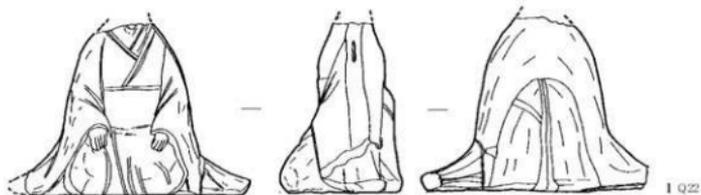


第57図 銭貨(1)

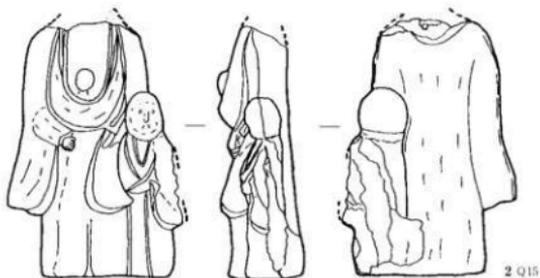




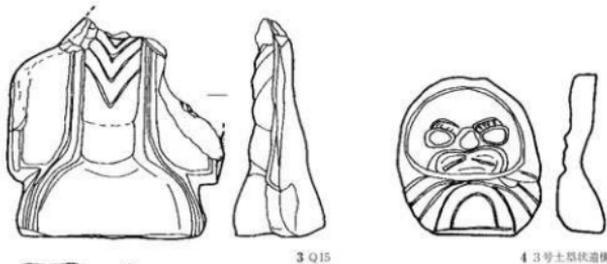
第 58 図 錢貨 (2)



1 Q22

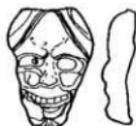


2 Q15

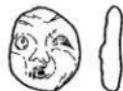


3 Q15

4 3号土原状遺構



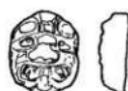
5 3号土原状遺構



6 3号土原状遺構



7 3号土原状遺構



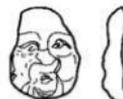
8 1号尖底跡



9 3号土原状遺構



10 3号土原状遺構



11 3号土原状遺構



12 3号土原状遺構



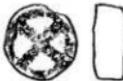
13 7号地下式坑



14 R16



15 3号土原状遺構



16 8号地下式坑



第59図 土人形、泥めんこ

第6表 出土遺物観察表 (土器・陶磁器)

[] 現存値、() 推定値、単位 cm

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4号地下式坑											
1	土師質土器	皿	8.8	2.2	5.9	金雲母・長石	内・外、明褐色	普通	ロクロ、底部糸切り	覆土	在地産
2	陶器	皿	10.3	2.0	6.0	精良	釉: 灰色 胎: 暗灰色	普通	志野釉、むずみ志野、目跡3ヶ、底部削出し高台	覆土	瀬戸・美濃産
3	土器	内耳始器	(28.4)	[4.3]	—	石英・黒色粒・粗砂粒	内・外、明褐色	普通	内・外面横ナゲ仕上げ	覆土	在地産 外面スス付着
4	土器	鍋 or 鉢	(27.4)	[6.0]	—	金雲母・長石・黒色粒	内・外、暗褐色	普通	内・外面横ナゲ仕上げ	覆土	在地産 外面スス付着
5	土器 (瓦質)	鍋 or 鉢	(27.4)	[7.1]	—	石英・長石	内: 灰色 外: 暗灰色	良好	内・外面横ナゲ仕上げ	覆土	在地産
6	土器	鉢鉢	—	[7.0]	—	石英・長石・粗砂粒	内・外、黒褐色	良好	8本クン目、内・外面横ナゲ仕上げ	覆土	在地産
6号地下式坑											
1	陶器	火目茶碗	12.5	6.8	4.6	精良	釉: 暗茶褐色 胎: 乳白色	普通	削出し高台、鉄軸+灰軸	覆土	瀬戸産、16C
2	陶器	丸碗	10.4	7.7	4.6	精良	釉: 暗茶褐色 胎: 乳白色	普通	削出し高台、うのふ桶(鉄軸+灰軸の成しかけ)	覆土	瀬戸産、16C
3	陶器	皿	10.6	2.0	5.9	精良、長石	釉: 乳白色 胎: 乳白色	普通	削出し高台、志野釉、鉄分のボツボツ、目跡2ヶ所のこる	覆土	瀬戸・美濃産
4	土器	内耳鍋	(21.4)	[3.8]	—	粗砂粒少量	内・外、明褐色	良好	内・外面横ナゲ仕上げ	覆土	耳の欠損部鉄線と釘で補修、小川
5	土器 (瓦質)	鉢鉢	(34.0)	[6.7]	—	長石・粗砂粒	内・外、暗褐色	良好	5本クン目、内面横ナゲ仕上げ、外面指頭瓦直後ヘラナゲ	覆土	在地産
6	土器	鉢鉢	(25.6)	[10.4]	—	長石・粗砂粒・黒色粒	内: 褐色 外: 黒褐色	良好	5本クン目、内面横ナゲ、外面ヘラナゲ	覆土	在地産 外面スス付着
7	陶器	鉢鉢	—	[5.2]	—	精良、長石	釉: 紫色 胎: 乳白色	良好	8本クン目、鉄軸	覆土	瀬戸・美濃産、16C
8	土器 (瓦質)	鉢鉢	(27.2)	[12.4]	(15.4)	長石・粗砂粒	内: 暗灰色 外: 暗茶褐色	良好	6本クン目、内面横ナゲ仕上げ、外面指頭瓦直後ヘラナゲ	覆土	在地産 外面スス付着
9	土器	内耳始器	(30.2)	[6.8]	—	海綿骨針	内: 明褐色 外: 褐色	普通	内面と口辺部外面横ナゲ仕上げ	覆土	在地産 外面スス付着
10	磁器	羹	(33.2)	[5.2]	—	長石	内・外、赤褐色	良好	折返し口縁、内面横ナゲ	覆土	常滑産
11	磁器	羹	(30.2)	[10.3]	—	長石	内: 黄褐色 外: 褐色	良好	折返し口縁、内面指頭瓦直後横ナゲ	覆土	常滑産、16C 第3
12	磁器	鉢鉢	(32.4)	15.6	(13.0)	長石	内・外、赤褐色	良好	6本クン目、内面と口辺部外面・体部下端横ナゲ仕上げ、体部外面ヘラナゲ	覆土	信楽産、17C 外面自然釉
7号地下式坑											
1	磁器	羹	—	[6.2]	(14.2)	長石	内: 褐色 外: 濃い黄褐色	良好	輪積み、ロクロ整形、体部外面指頭瓦、底部外面砂底	覆土	常滑産 内面の磨滅著しい
10号地下式坑											
1	磁器	羹	(22.4)	[3.9]	—	長石	内: 赤褐色 外: 暗褐色	普通	折返し口縁、外面自然釉多	覆土	常滑産、16C 前
16号地下式坑											
1	陶器	碗	8.8	4.9	3.4	精良	釉: 乳白色 胎: 乳白色	普通	内・外面とも大きい、体部外面鉄軸、削出し高台	覆土	信楽産(新焼皿)
2	磁器	羹	—	[5.0]	—	長石	内: 灰色 外: 赤褐色	普通	折返し口縁、外面に自然釉	覆土	常滑産、16C 後半、口縁に自然釉
3	陶器	小皿	—	[4.9]	(4.8)	精良	釉: 黒褐色 胎: 灰白色	良好	ロクロ整形、底部糸切り、内・外面鉄軸、足込み焼成による変色	覆土	瀬戸・美濃産、16C
18号地下式坑											
1	陶器	皿	—	[3.0]	(7.0)	精良	釉: 茶褐色 胎: 淡黄色	良好	削出し高台、筋軸	覆土	瀬戸・美濃産
2	土器 (瓦質)	火鉢	16.6	8.7	11.4	精良、粗砂粒微量	内・外、暗灰色	普通	底部にボタン状の低い脚を貼付する	覆土	在地産
3	土器	内耳始器	(30.8)	[4.2]	—	金雲母微量・黒色粒・粗砂粒	内・外、明褐色	普通	内面と口辺部外面横ナゲ仕上げ、外面体部ヘラナゲ	覆土	在地産 外面スス付着

[] 現存値、() 推定値、単位 cm

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4	土器	内耳始輪	(20)	[49]	—	黒色粒・粗砂粒・長石	内・外・明褐色	普通	内・外面横ナデ仕上げ	覆土	在地点 外面スス付着
5	土器	内耳輪	(20)	(7.4)	(33.2)	金雲母・粗砂粒多量	内・外・明褐色	普通	内・外面横ナデ仕上げ	覆土	在地点 外面スス付着
6	土器	内耳輪	(33.8)	[8.5]	—	粗砂粒・長石	内・外・褐色	普通	内・外面横ナデ仕上げ	覆土	在地点 外面スス付着
7	土器	椀鉢	38.2	14.4	13.2	粗砂粒・長石	内・外・赤褐色	良好	タシ目単位不詳、密に刷む	覆土	備前産

19号地下式坑

1	土器	内耳輪	(34.0)	[8.2]	—	金雲母・黒色砂粒・海綿骨針	内・にぶい褐色 外・黒色	普通	内・外面横ナデ仕上げ	覆土	在地点 外面スス付着
---	----	-----	--------	-------	---	---------------	-----------------	----	------------	----	---------------

大型器片跡

1	土師質土器	皿	6.7	2.0	4.5	白色・黒色粒	内・暗灰色 外・暗褐色	普通	底部赤切り、見込みにへソ状の突起	覆土	内面と外面の口縁に油煙、灯明痕
2	土師質土器	皿	9.5	2.7	5.7	金雲母・海綿骨針微量	内・灰白色 外・褐色	普通	底部赤切り	覆土	在地点
3	土師質土器	皿	(12.4)	2.7	(6.4)	金雲母・長石・海綿骨針微量	内・外・褐色	普通	底部赤切り	覆土	在地点
4	陶器	丸碗	9.5	6.8	4.1	精良	釉：茶褐色 胎：灰白色	良好	削出し高台、鉄軸	覆土	瀬戸産、17C
5	陶器	碗	10.0	7.1	3.2	精良、褐色粒	釉：暗緑色 胎：黄白色	良好	削出し高台、灰軸	覆土	瀬戸・美濃産、17C 二次被熱
6	陶器	天目茶碗	(10.3)	[4.9]	—	精良	釉：黒色・褐色 胎：褐色	良好	鉄軸	覆土	瀬戸・美濃産、16C
7	陶器	天目茶碗	11.6	5.6	3.9	精良	釉：暗褐色・褐色 胎：灰白色	良好	削出し高台、鉄軸、高台部外面に染灰	覆土	瀬戸・美濃産、16C 後半
8	陶器	鉄絵皿	(11.5)	(3.0)	(6.7)	精良、黒色の小粒	釉：白色 胎：乳白色	良好	削出し高台、鉄軸、長石軸	覆土	瀬戸・美濃産
9	陶器	鉄絵皿	(11.0)	3.2	6.8	精良、黒色の小粒	釉：白色 胎：乳白色	良好	削出し高台、鉄軸、長石軸	覆土	瀬戸・美濃産
10	陶器	丸皿	11.5	2.5	7.0	精良	釉：白色 胎：乳白色	良好	削出し高台、長石軸、外底に目録3か所	覆土	瀬戸・美濃産
11	陶器	丸皿	14.6	3.0	6.9	精良、長石	釉：白色 胎：乳白色	良好	削出し高台、長石軸	覆土	瀬戸・美濃産
12	陶器	丸皿	13.4	2.6	5.4	精良、長石	釉：白色 胎：乳白色	良好	削出し高台、長石軸	覆土	瀬戸・美濃産
13	陶器	丸皿	11.6	1.5	7.1	精良、長石	釉：乳白色 胎：乳白色	良好	削出し高台、長石軸	覆土	瀬戸・美濃産
14	陶器	丸皿	11.8	2.5	7.1	精良	釉：乳白色 胎：乳白色	良好	削出し高台、長石軸	覆土	瀬戸・美濃産
15	陶器	丸皿	(11.0)	2.0	7.4	精良、長石	釉：乳白色 胎：乳白色	良好	削出し高台、長石軸	覆土	瀬戸・美濃産
16	陶器	段皿	(14.6)	[2.1]	—	精良、長石	釉：乳白色 胎：乳白色	良好	鉄軸、長石軸	覆土	瀬戸・美濃産
17	陶器	緑絵皿	11.8	2.0	3.4	精良、砂粒微量	釉：暗緑色・灰白色 胎：灰白色	良好	底部赤切り、口縁に灰軸	覆土	瀬戸産、15C
18	土器	壺	(16.5)	[6.5]	—	長石	内：暗灰色 外：暗赤褐色	良好	口辺部内・外面横ナデ仕上げ、外面自然釉	覆土	常滑産、14C 前半
19	土器	壺	(26.7)	[5.2]	—	長石	内：暗灰色 外：赤褐色	良好	折返し口縁、口縁内面に染灰	覆土	常滑産、15C 前半
20	土器	壺	(23.6)	[8.5]	—	金雲母微量・長石	内：灰褐色 外：黒褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ仕上げ、体部内面へソナデ	覆土	在地点
21	土器	壺	(40.2)	[10.6]	—	長石	内・外：茶褐色	良好	折返し口縁、外面に自然釉	覆土	常滑産、14C 前半 別口に接合痕
22	土器	壺	(37.3)	[17.6]	—	長石粗粒	内・外：赤褐色	良好	折返し口縁	覆土	常滑産、15C 前半
23	陶器	壺	(33.2)	[7.2]	—	黒色粒・長石	釉：灰赤色 胎：褐色	良好	内面に同心円文具前、外面と内面の一部に施釉	覆土	在地点、16C ?
24	土器	壺	—	[17.1]	(14.0)	長石多量	内・外：赤褐色	良好	輪積み、ロクロ整形、底部砂跡	覆土	常滑産、15～16C
25	陶器	椀鉢	34.4	14.5	11.0	精良、長石	釉：紫色 胎：乳白色	良好	13本タシ目、見込み放射状のタシ目、底部赤切り	覆土	瀬戸・美濃産、16C
26	陶器	椀鉢	(32.6)	[9.8]	—	黒色粒・長石	釉：赤褐色 胎：乳白色	良好	16本タシ目、精輪	覆土	瀬戸・美濃産、16C
27	土器	内耳輪	(34.0)	(8.7)	(20.2)	金雲母・長石	内：暗灰色 外：黒褐色	普通	内面と口縁横ナデ仕上げ、体部外面へソナデ	覆土	在地点
28	土器	内耳始輪	(37.8)	4.9	(28.8)	金雲母多量・長石	内・外：暗褐色	普通	内面と体部外面横ナデ、同下位へ底部外面へソナデ	覆土	在地点 口縁にスス付着
29	土器	始輪	(31.4)	(2.1)	(28.2)	金雲母・白色粒多量・海綿骨針	内・褐色 外：灰褐色	普通	内・外面横ナデ仕上げ	覆土	在地点 外面スス付着

高名城跡

[] 現存値、() 推定値、単位 cm

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1号竪穴跡											
1	瓦器	様鉢	(36.3)	[72]	—	長石多量、 φ13mmの小礫、 チャート	内・外・赤褐色	良好	クシ目単位不詳、密に施す (8本クシ目)、体部 外面へウケリ	覆土	堀前産
2	土器	内耳始筒	(37.0)	[4.4]	—	粗砂粒・黒色 粒	内・明褐色 外・暗茶褐色	普通	内・外面横ナテ仕上げ	覆土	在地産 外面スス付着
3号竪穴跡											
1	陶器	縁輪皿	(12.1)	(28)	(5.7)	精良	輪：灰白色 胎：内・乳白色、 外・灰白色	良好	口縁内・外に灰輪を施す 、底部赤切り	覆土	瀬戸産、15C 前半
2	陶器	仏花器	(11.0)	[6.0]	—	精良、砂粒微量	輪：暗緑色 胎：灰白色	良好	外面全体と内面の口辺 部に灰輪を施す	覆土	瀬戸・美濃産、16C 二次被熱
3	土器	様鉢	(30.4)	[11.9]	—	長石多量	内・外・暗褐色	普通	9本クシ目	覆土	在地産
4	土器 (瓦質)	内耳鍋	(26.6)	[12.2]	—	石英・長石・ チャート	内・外・褐灰色	普通	体部内面横ナテ仕上げ、 内外面粗いナテ	覆土	在地産
5	陶器	様鉢	(33.6)	[3.7]	—	長石・黒色粒	輪：暗紫色 胎：橙色	良好	クシ目単位不詳	覆土	瀬戸・美濃産、16C 後半
5号竪穴跡											
1	陶器	仏花器	—	[7.8]	6.4	精良、長石	輪：黄緑色 胎：乳白色	良好	削出し高台、肩部ボタン 状の貼付、灰輪	覆土	瀬戸産、17C 中
8号竪穴跡											
1	陶器	菓子	—	[14.2]	(10.2)	精良、長石	輪：緑色 胎：乳白色	良好	輪縁、ロクロ整形、体 部外面滑草文除削、灰輪	覆土	瀬戸・美濃産、15C
9号竪穴跡											
1	陶器	四耳壺	(9.6)	[18.6]	—	長石・黒色粒	輪：黒褐色 胎：灰白色	良好	口縁部膨出し、肩部に 4ヶの耳を貼付するも 配置は不揃い	覆土	九州産？16C
19号土坑											
1	陶器	四耳壺？	(10.8)	[5.4]	—	精良	輪：褐色・黒色 胎：灰白色	良好	折返し口縁、口面の施輪 は口縁のみ	覆土	瀬戸・美濃産、16C
20号土坑											
1	瓦器	壺	—	[4.2]	(12.8)	精良、長石細粒 微量	内・明褐色 外・暗赤褐色	良好	体部～底部外面へウケ リ	覆土	常滑産、15～16C
4号井戸跡											
1	土器	始筒	(33.0)	[5.2]	—	金雲母・長石・ 粗砂粒	内・橙色 外・黒色・暗褐色	良好	内面と口辺部外面横ナ テ仕上げ、口縁に平坦面	覆土	在地産 外面スス付着
2	土器	内耳始筒	—	[4.3]	—	金雲母微量・黒 色粒・油粘骨針	内・橙色 外・暗褐色	良好	内面と口辺部外面横ナ テ仕上げ	覆土	在地産
3	土器	内耳鍋？	—	[3.9]	—	金雲母・粗砂粒	内・褐色 外・暗褐色	良好	内面と口辺部外面横ナ テ仕上げ	覆土	在地産
4	土器 (瓦質)	内耳鍋	(21.9)	[7.2]	—	白色粒・黒色粒	内・外・灰白色	良好	内面と口辺部外面横ナ テ仕上げ、体部外面粗い ナテ	覆土	在地産
11号井戸跡											
1	陶器	天目茶碗	(11.4)	[5.4]	—	精良	輪：黒褐色 胎：灰白色	良好	削出し高台	覆土	瀬戸・美濃産、16C 前半
2	陶器	様鉢	—	[6.8]	—	精良	輪：暗紫色 胎：淡黄色	良好	11本クシ目	覆土	瀬戸・美濃産、16C 初
3	瓦器	甕	—	[6.6]	—	長石	輪：にぶい赤褐色 胎：暗赤色	良好	折返し口縁	覆土	常滑産、15C
1号溝跡											
1	土器 (瓦質)	内耳鍋	(30.2)	[14.2]	—	長石・石英・海 綿骨針	内：褐灰色 外：灰黄褐色	普通	内面と口辺横ナテ上 げ、体部外面粗いナテ	覆土	在地産、15～16C
1～3号礎石建物跡											
1	陶器	皿	10.2	2.2	6.6	精良	輪：淡緑色 胎：灰白色	良好	削出し高台、灰輪を施す	1-2号掘方 口6	瀬戸・美濃産、17C
2	磁器	染付皿	14.0	3.0	5.0	精良	内・外・白色	良好	削出し高台、内面に花鳥 文、口辺外面に襷縁	3号カマド	肥前産
3	陶器	灯明皿	10.4	2.0	5.6	精良	輪：茶褐色 胎：淡褐色	良好	底部へウケリ、内・外面 鉄輪を施す	3号カマド	瀬戸・美濃産、18C

[] 現存値、() 推定値、単位 cm

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4	陶器	瓶	9.4	4.8	4.4	精良	釉:淡緑色 胎:灰白色	良好	削出し高台、内・外面口輪	3号竈方二	瀬戸・美濃産、18C 辻上J焼
5	磁器	染付碗 そば口	(6.4)	[7.5]	(5.4)	精良	内・外:白色	良好	削出し高台、外面松絵、 下縁に彫線、内面上位に 帯状の施文	3号カマド	肥前産、18C後半
6	土器	内耳鍋	—	[8.0]	—	長石・石英・海綿骨針	内・外:灰色	普通	内面と口縁横ナデ仕上げ、 外面粗いナデ	3号カマド	在産
7	土器	内耳鍋	(29.2)	[4.3]	—	褐色粒・海綿骨針	内:褐色 外:黒褐色	普通	内面と口縁横ナデ仕上げ、 外面粗い	3号カマド	在産
1号塚											
1	土器	内耳鍋	(36.7)	[7.3]	—	長石・赤褐色 粒・粗砂粒	内:灰黄褐色 外:黒灰色	普通	内面と口縁横ナデ仕上げ、 外面粗いナデ	盛土	在産 外面スス付着
2	土器 (瓦質)	内耳鍋	(28.0)	[5.8]	—	長石・石英	内・外:褐色	良好	内面と口縁横ナデ仕上げ、 外面粗いナデ	盛土	在産 外面スス付着
3	土器 (瓦質)	内耳鍋	(29.0)	[9.8]	—	長石・石英	内:褐色 外:黒褐色	普通	内面と口縁横ナデ仕上げ、 外面粗いナデ	盛土	在産 外面スス付着
4	磁器	羹	(38.0)	[8.3]	—	長石	内:暗赤褐色 外:暗赤色	普通	折返し口縁	盛土	常産
1号池跡											
1	土師質 土器	皿	9.6	1.9	5.6	長石・海綿骨針	内:灰色 外:褐色	普通	ロクロ整形、底部糸切り	覆土	在産 二次焼
2	陶器	皿	10.6	2.4	5.8	精良	釉:浅黄色 胎:灰白色	良好	削出し高台、灰輪	覆土	瀬戸・美濃産、17C
近世2号土坑											
1	陶器	播鉢	(32.1)	[7.0]	—	精良	釉:褐色 胎:灰白色	普通	7本タシ目、筋輪	覆土	瀬戸・美濃産、18C
近世3号土坑											
1	土器	内耳鍋	(42.5)	[8.6]	(30.2)	金雲母・石英・ 長石・粗砂粒	内:褐色 外:褐色	良好	内面と口縁横ナデ仕上げ、 外面粗いナデ	覆土	在産 外面スス付着
2	土器 (瓦質)	火鉢?	—	[9.1]	—	粗砂粒・白色粒	内・外:褐色	良好	高さ5cmの取っ手を 貼付する	覆土	在産
3号土器状遺構											
1	陶器	丸瓶	8.2	5.3	5.0	精良・砂粒	釉:内 白色、外 淡褐色、胎:乳 白色	良好	削出し高台、外面淡褐色 輪の上に白の梅花文、 外縁に折沿	盛土	京焼系
2	陶器	小壺	4.7	3.7	4.4	精良	釉:褐色 胎:灰白色	良好	削出し高台、内・外面に 貫輪、口縁を内めた口口 を2ヶ所	盛土	美濃産、お南黒虫
3	土器 (瓦質)	楕鉢	—	[5.4]	5.9	粗砂粒・小石 少量	内・外:灰白色、 一部褐色	普通	ロクロ整形、底部糸切り、 中央に径1.5cmの孔を穿つ、 内面ロクロ目肌	盛土	在産
4	土器 (瓦質)	楕鉢	(14.2)	[8.3]	—	粗砂粒少量	内・外:灰白色、 灰色	普通	ロクロ整形、内面ロクロ 目肌	盛土	在産
5	土器	播鉢	—	[5.3]	(10.0)	長石・石英	内・外:褐色	普通	7本タシ目	盛土	在産
6	陶器	磁利	2.6	3.6	7.2	精良	釉:褐色 胎:灰白色	良好	胴の一部を凹ませたべ こかん彫り	盛土	瀬戸・美濃産、 18C?
7	土器	焙烙	(24.8)	2.9	(20.9)	金雲母・粗砂粒	内・外:淡褐色	普通	内・外面横ナデ仕上げ、 外面下面下縁へつ加り	盛土	在産
8	陶器	播鉢	(28.2)	[3.1]	—	精良	釉:暗紫色 胎:褐色	良好	筋輪を施す、タシ目単位 折沿	盛土	瀬戸・美濃産、16C
9	土器	焙烙	(36.8)	(4.6)	(28.0)	金雲母・海綿骨針・ 粗砂粒	内:淡褐色 外:暗茶褐色	普通	内面と外面の上半横ナ デ仕上げ、外面下位粗い ナデ	盛土	在産 外面スス付着
10	土器	焙烙	(35.2)	[4.2]	—	金雲母・海綿骨針・ 粗砂粒	内:淡褐色 外:暗茶褐色	普通	内面と外面の上半横ナ デ仕上げ、外面下位粗い ナデ	盛土	在産 外面スス付着
11	土器 (瓦質)	内耳鍋	(34.6)	[7.8]	—	長石・石英	内:灰色 外:褐色	普通	内面と外面の上位横ナ デ仕上げ、外面スス付着 ナデ、耳2ヶ所並ぶ	盛土	在産 外面スス付着
12	土器	内耳鍋	(37.0)	[6.4]	—	金雲母・海綿骨針	内:褐色 外:黒褐色	普通	内面と外面の上位横ナ デ仕上げ、外面下位粗い ナデ	盛土	在産 外面スス付着

高品城跡

[] 現存値、() 推定値、単位 cm

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
4号土器状遺構											
1	土器	内耳始帯	(38.6)	(5.5)	(32.6)	金雲母・長石・ 海綿骨針	内: 明赤褐色 外: 黒褐色	普通	内面と口縁横ナテ仕上げ、外面粗いナテ、耳の表縁	盛土	在地産
2	土器	内耳始帯	(42.0)	(4.9)	(36.0)	金雲母・長石・ 石英・海綿骨針	内: にぶい橙色 外: 明赤褐色	普通	内面と口縁横ナテ仕上げ、外面粗いナテ	盛土	在地産
3	土器	内耳鉢	(28.8)	[6.7]	—	長石・石英	内: 灰白色 外: にぶい黄褐色	普通	内面と口縁、外面上位横ナテ仕上げ、外面粗いナテ	盛土	在地産 外面スス付着
4	土器	内耳鉢	(34.8)	[9.4]	—	金雲母少量、粗 砂粒	内: 灰褐色 外: 灰白色	普通	内面上位横ナテ仕上げ、下位斜めのナテ、外面粗いナテ	盛土	在地産
5	瓦器	甕	—	[12.6]	—	長石	内・外: 赤褐色	良好	口沿折返し口縁	盛土	常滑産?
6	土師器	高坏	—	[7.0]	9.8	粗砂粒	内・外: 褐色	普通	3ヶ所透かし孔を穿つ、外面縦ミガキ、内面横ナテ目、外面赤色塗彩	盛土	在地産
I区											
1	土器	火鉢	—	[3.3]	(14.0)	金雲母・長石・ 石英	内: 黒灰色 外: 黒褐色	普通	体部外面彫文、底部にボタン状の低い脚	I19区	在地産
J区											
1	陶器	灯明皿	3.0	0.9	1.6	精良	釉: 明褐色 胎: 灰白色	良好	底部外面ヘラ張り、内・外面に鉄釉を施す、見込みに垂れ流	J18区	瀬戸・美濃産、18C
2	磁器	香炉	7.8	6.7	(7.4)	精良	釉: 淡緑色 胎: 灰白色	良好	高台内を除き全体に青鉛釉、高台内は黒釉	J18 + K18区 (近世3号土 坑)	肥前産、18C
3	瓦器	甕	—	[8.8]	—	長石粗粒	釉: 暗緑色 胎: 灰褐色	良好	肩部外面にスタンプ、外面の自然釉著しい	J18区	常滑産、15～16C
4	陶器	皿	96.0	(20)	(3.6)	精良	釉: 淡灰色 胎: 灰白色	良好	削出し高台、志野釉を施す(ねずみ志野)	J18区	瀬戸産? 17C
K区											
1	陶器	腰折皿	(14.3)	(2.3)	8.5	精良	釉: 灰白色 胎: 灰白色	良好	削出し高台、透明釉を施す	K19区	瀬戸・美濃産
2	陶器	天目茶碗	10.6	6.1	3.9	精良	釉: 褐色・浅黄 褐色・灰白色	良好	削出し高台、外面体部下位～底部露胎	K18区	瀬戸・美濃産
L区											
1	須恵器	高坏	—	[5.6]	—	長石・海綿骨針	釉: 灰色 胎: 青灰色	良好	ロクロ整形	L26区	在地産?
M区											
1	瓦器	甕	—	[5.7]	—	長石粗粒	内: 暗赤褐色 外: 灰色(露胎)	良好	折返し口縁、口縁外面の灰かぶり著しい	M15区	常滑産、15C
2	瓦器	甕	—	[11.6]	—	長石粗粒	内: にぶい赤褐色 外: 灰褐色	良好	輪堀み、ロクロ整形、外面に降灰、スタンプ1ヶ所認め	M17区	常滑産、15～16C
N区											
1	陶器	皿	13.4	3.2	8.0	精良	釉: 淡灰色 胎: 灰白色	良好	削出し高台、見込みに垂れ流、志野釉を施す	N21区	瀬戸・美濃産、17C
2	土器 (瓦質)	内耳鉢	(28.0)	[12.5]	—	長石・石英・海 綿骨針	内: 灰色 外: 灰白色	普通	内面と口縁横ナテ仕上げ、体部外面粗にヘラナテ	N15区	在地産
3	土器 (瓦質)	内耳鉢	(44.0)	[8.1]	—	長石・石英	内: にぶい黄褐色 外: 暗褐色	普通	内面と口縁横ナテ仕上げ、体部外面粗にヘラナテ	N15区	在地産 外面スス付着
4	土器 (瓦質)	内耳鉢	(36.0)	[11.8]	—	長石・石英	内: 淡黄褐色 外: 黒褐色	普通	内面と口縁横ナテ仕上げ、体部外面粗にヘラナテ	N15区	在地産 外面スス付着
5	土器 (瓦質)	椀鉢	(31.8)	[5.6]	—	長石・石英・海 綿骨針	内: 黒灰色 外: 淡黄褐色	普通	クシ目上部のみ遺存、4本を認めるも本来の単位不詳	N15区	在地産、15～16C

[] 現存値, () 推定値, 単位 cm

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
O区											
1	陶器	腰折皿	(136)	(21)	(84)	精良・長石粗粒陶器	釉:乳白色 胎:灰白色	普通	眉出し高台、内面口辺に 灰釉、見込鉄絵草花文	O15区	瀬戸・美濃産、16C
2	磁器	壺	—	[11.0]	—	長石粗粒	内・外:赭赤色	良好	折返し口縁	O15区	常滑産、14C 障灰
3	磁器	壺	—	[11.2]	—	長石粗粒	内・外:赭赤褐色	良好	折返し口縁	O17 + P17区	常滑産、15C P17(3土)と接合
P区											
1	土師器	杯	(152)	[5.1]	—	粗砂粒	内・外:赤褐色	普通	内面と口辺部外面横ナ デ仕上げ、体部外部へ少 量入り、内・外面赤色塗彩	P-R14区	5C 後半
2	陶器	皿	(9.0)	(2.25)	(6.0)	精良	釉:褐褐色 胎:淡灰色	良好	底部眉出し高台、内・外 面に筋線を施す	P20区	瀬戸・美濃産、17C
O区											
1	陶器	天目茶碗	122	69	50	精良	釉:褐褐色 胎:淡黄色	良好	眉出し高台、鉄軸施す。 体部外面下縁～底部露胎	Q21区	瀬戸・美濃産、17C
2	陶器	天目茶碗	—	[4.3]	4.3	精良	釉:黒褐色 胎:明赤褐色	良好	眉出し高台、外面の体部 下縁～底部露胎、高台内 と見込み中央が凸する	Q17区	肥前・唐津産
3	磁器	広東碗	136	68	60	精良	釉:灰白色 胎:乳白色	良好	眉出し高台、外面腰と家 具、磨練地、高台内に 「大明年製」捺付	Q21区	肥前産
4	陶器	水注	—	[5.6]	7.7	精良	釉:褐色 胎:灰黄色	良好	底部赤切り、内・外面に 鉄軸を施す、耳と注口を 欠損	Q21区	瀬戸・美濃産 (お南黒塗)
5	土師質 土器	皿	6.3	1.6	4.6	長石・石英・海綿骨針	内・外:浅黄褐色	普通	ロケロ、底部赤切り	Q18区	在地産
6	土師質 土器	皿	6.0	2.0	3.5	長石・石英・海綿骨針	内・外:褐色	普通	ロケロ、底部赤切り	Q18区	在地産
7	土師質 土器	皿	6.7	1.8	4.0	長石・石英・海綿骨針	内・外:にぶい 褐色	普通	ロケロ、底部赤切り	Q18区	在地産
8	土師質 土器	皿	5.9	2.0	4.2	長石・石英・海綿骨針	内・外:にぶい 褐色	普通	ロケロ、底部赤切り	Q18区	在地産
9	土師質 土器	皿	6.8	1.6	4.2	金雲母・長石・海綿骨針	内・外:浅黄褐色	普通	ロケロ、底部赤切り	Q18区	在地産
10	磁器	壺	—	[9.1]	—	長石粗粒多	内・外:赭赤褐色	良好	折返し口縁	Q17区	常滑産、15C
11	磁器	壺	(28.0)	[10.4]	—	長石粗粒	内:褐灰色 外:赭赤褐色	良好	折返し口縁	Q21区	常滑産、15C 障灰
12	土器	内耳鍋	(31.6)	(9.4)	(20.0)	金雲母・海綿骨針	内:にぶい褐色 外:黒褐色	普通	内面と口縁横ナデ仕上 げ、体部外面粗いナデ、 底部外面板目状圧痕	Q21区	在地産
R区											
1	土師質 土器	皿	6.2	1.4	4.2	金雲母・海綿骨針	内・外:黄褐色	普通	ロケロ整形、底部赤切り	R18区	在地産
2	土師質 土器	皿	5.8	1.6	3.3	金雲母・海綿骨針	内・外:黄褐色	普通	ロケロ整形、底部赤切り	R18区	在地産、口辺にス ス、打明眼に転用
3	土師質 土器	皿	(6.8)	(1.7)	(5.6)	金雲母・海綿骨針	内・外:黄褐色	普通	ロケロ整形、底部赤切り	R18区	在地産
4	磁器	壺	(15.0)	[10.8]	—	長石粗粒多	内・外:赭赤褐色	良好	輪積み、ロケロ整形、自 然釉、器体片付着、焼ひ ずみあり	R19区	常滑産

第7表 出土遺物観察表（石製品）

[] 現存値、() 推定値、単位 cm

番号	種別	器種	幅	長さ	厚さ	材質	手法の特徴	出土位置	備考
1	石製品	硯	7.2	[4.3]	2.6	凝灰岩	海側端部の硯を幅広く設ける。外底面に木葉状の磨削	O17区	
2	石製品	硯	7.4	11.8	[1.5]	粘板岩	外底面の除部から海部の道中位の範囲に挟り込みを施す	R17区（3号土器状遺構）	
3	石製品	硯	7.6	15.6	2.4	凝岩	除部に長軸に直交する多数の沈瀬、製作時の加工痕と思われる	R18区（3号土器状遺構）	
番号	種別	器種	径	高さ		材質	手法の特徴	出土位置	備考
1	石製品	石臼	(30.4)	5.8		安山岩	外縁の境沿いに径3.3cmの小孔を穿つ。穀臼の上臼	Q21区	
2	石製品	石臼	(22.6)	11.5		安山岩	側面に一辺2.5cm、深さ2.4cmの引手孔を穿ち、周囲に1辺7cm程の範囲に支柱を施す	R17区（3号土器状遺構）	
番号	種別	器種	幅	高さ	奥行	材質	手法の特徴	出土位置	備考
1	五輪塔	空風輪	12.6	[22.8]	11.5	安山岩	空・奥側のくびれ部に細いテガネによる加工痕。全体に丁寧な加工	R16区（3号土器状遺構）	
2	五輪塔	空風輪	10.2	[17.9]	10.0	安山岩	ホゾは太くて短い。全体に粗い加工	K19区（1号塚）	
3	五輪塔	火輪	17.8	10.3	17.3	安山岩	中央に径5.5、深さ1.8cmのホゾ穴を穿つ。丁寧な加工	M17区	
4	五輪塔	水輪	17.7	12.5	17.4	安山岩	上・下面に径7.5～8.5cmの円形の平坦面を設ける。側面は自然面	R17区	
5	五輪塔	地輪	16.8	12.3	16.4	安山岩	上・側・端面の5面に粗い加工で平坦面を設ける	M17区	
6	宝篋印塔	笠部	25.5	[18.7]	[21.1]	安山岩	中央に径6、深さ5.5cmのホゾ穴を穿つ。丁寧な加工	P14区（大型塚穴跡）	

第8表 磁石計測表

() 推定値、単位 cm、アミ掛は実測図掲載 №1

番号	長辺(cm)	短辺(cm)	厚さ(cm)	研ぎ面	整形面	重量(g)	石質	出土位置	備考
1	(13.5)	4.5	1.5	1	4	150	A	表採	ノミ、クシ目
2	(12.5)	(4.6)	1.0	3	2	140	A	O17区(3号土塁状遺構)	クシ目
3	16.0	(6.0)	2.6	1	5	428	A	N21区	ノミ
4	(11.5)	(3.7)	0.7~2.0	3	1	110	A	S15区	ノミ
5	15.0	(4.5)	2.9	1	5	383	A	P14区(大型堅穴跡1層)	第54区、ノミ
6	(8.8)	6.0	2.7	1	4	258	A	N21区	ノミ、クシ目
7	(7.5)	(5.4)	2.6	1	4	207	A	P14区(大型堅穴跡3層)	ノミ
8	(9.5)	(4.8)	4.2	1	4	338	A	R18区	ノミ
9	(11.0)	(5.6)	2.5	1	4	271	A	P15区(1号炭竈跡)	第54区、ノミ、クシ目
10	(11.2)	(4.5)	3.0	2	3	268	A	表採	クシ目
11	(8.5)	(4.2)	1.8	1	3	128	A	P20区	クシ目
12	(8.5)	3.7	1.4	2	3	90	A	H18区	クシ目
13	(9.0)	3.7	1.5	1	4	108	A	O17区	クシ目
14	(4.4)	(4.5)	1.2	1	2	47	A	K18区(近世3号土坑)	クシ目
15	(19.6)	(3.6)	1.7	1	2	110	A	J19区	ノミ
16	(6.8)	(3.3)	1.8	1	2	58	A	R18区(3号土塁状遺構)	ノミ
17	(8.0)	(4.8)	3.0	1	4	235	A	P14区(大型堅穴跡)	ノミ
18	(5.5)	(4.1)	0.6~1.4	2?	?	56	A	J19区(近世5号土坑)	
19	(5.8)	(4.8)	1.5	1	2	67	A	N18区(9号堅穴跡)	第54区、クシ目
20	(6.0)	(3.5)	1.5	2	2	64	A	J18区(近世5号土坑)	クシ目
21	(5.0)	3.8	0.9~1.6	1	2	58	A	N19区(9号堅穴跡)	ノミ
22	(5.3)	4.2	1.0	1	3	48	A	H19区	クシ目
23	(4.5)	3.4	1.0	1	3	32	A	R19区(3号土塁状遺構)	クシ目
24	(4.1)	3.3	1.5	1	3	38	A	N14区	ノミ
25	(12.0)	3.0	0.8~1.5	1	4	98	A	N21区	クシ目
26	(12.7)	3.2	1.0~1.5	1	4	112	A	J19区	クシ目
27	(7.0)	3.9	2.9	1	4	156	A	J18区	ノミ、クシ目
28	(8.9)	(3.2)	2.9	1	2	211	A	J19区(近世5号土坑)	ノミ
29	(9.5)	(5.0)	3.0~4.8	4	2	380	B	M19区	第54区、研削
30	(9.0)	(5.4)	3.1	2	3	368	A	R18区	ノミ、クシ目
31	(9.0)	(5.0)	2.5	2	4	168	A	P14区(大型堅穴跡)	ノミ
32	(10.3)	3.6	1.0~2.8	1	3	174	A	Q16区(3号土塁状遺構)	ノミ、クシ目
33	(5.0)	4.4	1.3	1	4	87	A	O17区(3号土塁状遺構)	クシ目
34	(7.3)	4.2	2.6	3	2	178	A	M18区	第54区、ノミ、クシ目
35	(8.5)	3.0	3.5	1	4	126	A	Q20区	ノミ
36	(6.4)	3.2	1.5~2.5	2	3	92	A	O21区	クシ目
37	(6.0)	(3.8)	1.1	2	2	43	A	表採	ノミ?
38	(9.0)	3.8	1.8	2	1	86	A?	S15区	ノミ
39	(9.0)	2.7~3.5	2.5	3	1	146	A	Q14区(4号土塁状遺構)	ノミ、クシ目
40	(5.5)	(4.9)	3.8	2	1	205	A	N18区	ノミ
41	(6.5)	(6.0)	2.6	1	4	141	A	O15区	クシ目
42	(7.1)	(5.3)	3.8	1	4	226	A	M20区	ノミ、クシ目
43	(7.1)	4.2	4.0	2	3	174	A	N20区(18号地下式坑)	ノミ
44	13.9	3.2	1.7~2.5	1	5	164	A	J18区	ノミ、クシ目
45	(7.5)	(2.8)	2.2	3	1	91	A	O16区(大型堅穴跡)	ノミ
46	(6.3)	(2.6)	0.9	3	—	34	C	J19区(近世5号土坑)	
47	(10.3)	2.5	0.8~2.5	2	2	102	A	R16区(3号土塁状遺構)	クシ目
48	(7.9)	2.5	1.4~3.5	2	2	111	A	R19区(3号土塁状遺構)	ノミ
49	(8.1)	(2.6)	2.2	1	2	64	A	R19区(3号土塁状遺構)	クシ目
50	(8.0)	(2.5)	2.5	1	3	87	A	Q15区(大型堅穴跡)	ノミ、クシ目
51	(6.3)	2.5	3.8	1	4	116	A	Q16区(3号土塁状遺構)	クシ目
52	(9.3)	(3.0)	1.2~1.9	2	3	89	A	J18区	クシ目
53	(10.8)	(3.8)	2.6~3.3	3	2	266	A	表採	ノミ
54	(13.3)	2.5	1.5~2.0	2	3	138	A	P17区	ノミ
55	(10.2)	2.8	3.5	1	4	165	A	Q19区	クシ目
56	(10.7)	(2.6)	2.0~3.3	2	1	134	A	P21区	ノミ

番号	長さ(cm)	短辺(cm)	厚さ(cm)	研ぎ面	整形面	重量(g)	石質	出土位置	備考
57	(9.7)	2.6	2.6	1	4	110	A	G18区	クシ目
58	(8.0)	2.8	2.6	1	4	85	A	N18区	クシ目
59	(9.8)	3.5	2.8	3	1	120	A	P17区(3号土器状遺構)	ナミ
60	(8.5)	2.7	2.6	1	4	106	A	P16区(3号土器状遺構)	ナミ
61	(8.1)	2.6	1.9	1	4	76	A	P15区	ナミ
62	(10.3)	3.1	2.0 ~ 3.0	1	3	152	A	M19区	ナミ
63	(7.7)	3.8	3.2	2	2	122	A	N21区	ナミ
64	(11.8)	(1.0) ~ (2.7)	0.7 ~ 2.5	3	1	104	A	P15区	ナミ
65	(6.4)	2.2	2.5	1	3	64	A	P16区(3号土器状遺構)	ナミ、クシ目
66	(11.1)	(3.0)	2.1 ~ 2.5	3	2	110	A	K19区(1号塚)	ナミ
67	(7.1)	(3.9)	1.3 ~ 2.7	3	1	103	A	Q16区	ナミ
68	(8.8)	3.3	2.8	1	3	124	A	P14区(4号土器状遺構)	ナミ
69	(5.6)	3.1	2.5	1	3	92	A	S16区	ナミ、クシ目
70	(9.5)	2.2	0 ~ 3.2	1	3	85	A	表採	ナミ
71	(7.4)	4.4	2.5	1	3	97	A	P16区	ナミ
72	(6.0)	5.0	2.5	1	2	120	B	Q21区	
73	(8.9)	(3.1)	2.0	1	3	88	A	H18区	ナミ
74	(8.6)	2.5	1.7 ~ 2.7	2	3	56	A	Q21区?	クシ目
75	(6.9)	3.8	3.0	1	4	170	A	O21区	ナミ、クシ目
76	(6.7)	(3.4)	1.1	3	1	38	A	Q16区(3号土器状遺構)	クシ目
77	(5.2)	3.0	2.8	4	—	102	B	P17区	
78	(7.3)	(2.5)	2.0	2	—	68	A	N19区	
79	(5.3)	2.8	1.2 ~ 2.0	1	4	47	A	Q16区	クシ目
80	(10.9)	3.0	1.5 ~ 2.9	1	4	134	A	O17区	ナミ
81	(7.9)	2.9	0.9 ~ 2.6	2	2	94	A	H19区?	ナミ
82	(7.7)	2.0	3.5	1	3	84	A	P16区(3号土器状遺構)	ナミ
83	9.3	(1.5) ~ (3.1)	0 ~ 2.0	4	—	73	A	M19区	
84	(6.3)	2.6	2.9	1	3	64	A	J18区	ナミ
85	(9.2)	2.7	2.8	2	3	122	A	L18区(2号土器)	ナミ
86	(6.1)	(4.0)	3.0	2	3	118	A	P15区(大型堅穴跡)	クシ目
87	(6.8)	3.8	1.0 ~ 1.5	1	3	68	A	J18区	クシ目
88	(9.6)	2.6	0.6 ~ 1.9	2	2	78	A	S19区(3号土器状遺構)	ナミ
89	(7.3)	(2.9)	3.0	1	4	86	A	O15区	ナミ
90	(6.5)	(2.9)	2.7	1	3	99	A	Q19区	ナミ
91	(7.7)	3.0	3.0	1	3	86	A	Q21区	クシ目
92	5.3	2.5 ~ 3.5	1.0 ~ 2.8	6	—	88	B	R19区	
93	(7.5)	(3.8)	1.1	4	—	68	A	Q19区	
94	(6.5)	2.5	2.0	2	2	74	A	P14区(大型堅穴跡)	ナミ
95	(5.0)	2.4	1.5	1	4	38	A	P16区	ナミ
96	(5.0)	2.5	1.4	1	4	40	A	O16区	ナミ
97	(3.4)	(3.3)	1.2	1	3	29	A	P19区	ナミ
98	(4.4)	(3.2)	3.0	4	—	65	A	J18区	
99	(4.7)	3.5	3.4	1	3	115	A	H19区	ナミ、クシ目
100	(5.1)	5.0	0.5	—	3	30	A	S20区	クシ目
101	(5.5)	(4.1)	1.0	2	2	51	A	P13区(4号土器状遺構)	
102	(3.9)	(3.5)	3.5	1	3	62	A	P16区(3号土器状遺構)	ナミ、クシ目
103	(9.4)	(2.8)	2.5	1	4	98	A	S18区	
104	(6.5)	(3.1)	1.3	3	1	36	B	Q17区	第54図、有孔
105	(4.1)	(3.6)	2.0	2	1	46	A	P15区(1号油跡)	クシ目
106	(4.5)	2.5	1.1	1	2	26	A	O15区	クシ目
107	(4.0)	3.7	3.1	1	4	54	A	P19区(3号礎石建物跡)	ナミ、クシ目
108	(5.3)	(3.0)	2.2	5	—	75	A	K-1.25区(2号土塚)	
109	(4.8)	2.6	1.2	1	3	28	A	K17区(2号土器)	ナミ
110	(5.2)	4.6	2.0	1	3	69	A	P15区	ナミ
111	(8.3)	9.0	3.7	3	3	328	A	P15区	ナミ
112	(10.7)	(4.1)	0 ~ 2.3	3	1	150	A	J18区	ナミ、クシ目

番号	長辺 (cm)	短辺 (cm)	厚さ (cm)	研ぎ面	整形面	重量 (g)	石質	出土位置	備考
113	(8.9)	(6.0)	3.7	1	1	300	A	J18区	焼熱変色
114	(9.0)	4.0	0~3.0	2	2	129	B	表採	クシ目
115	(4.2)	(2.4)	1.3	1	3	28	A	O16区	ノミ
116	(6.2)	(2.8)	2.8	1	3	87	A	J18区	ノミ
117	(6.8)	2.3~(3.5)	0.4	1	3	78	A	18号地下式坑	ノミ
118	(11.7)	2.4	1.2~3.9	2	2	152	A	P14区	ノミ
119	17.0	2.5	1.3~1.8	1	3	144	A	P14区	第54区、クシ目
120	17.8	(2.4)~(3.2)	1.5~2.7	3	3	172	A	K18区	クシ目
121	(14.0)	2.9	2.3~3.2	1	4	221	A	J18区	クシ目
122	(7.2)	3.2	2.0~3.3	1	3	140	A	Q16区(大型竪穴跡)	ノミ
123	(14.0)	2.7	1.7~2.9	2	3	134	A	P20区	ノミ
124	(9.7)	(4.1)	2.8	1	4	152	A	1号炭層跡	クシ目
125	(8.3)	2.7	2.0	1	4	94	A	N17区	クシ目
126	(6.1)	2.9	2.3	1	4	73	A	R18区	クシ目
127	(4.8)	2.3	2.3	1	4	57	A	P15区	クシ目
128	(7.6)	2.5	1.8	1	4	59	A	P15区	ノミ
129	(11.6)	(2.2)	1.5~2.0	3	2	99	A	L26区	クシ目
130	(9.3)	2.3	1.3	1	3	56	A	J18区	クシ目
131	(11.5)	2.9	1.0~1.8	2	2	91	A	P15区	クシ目
132	(8.2)	2.6	0.9~1.6	1	3	58	A	表採	クシ目
133	(7.7)	2.5	3.0	1	4	101	A	N18区	クシ目
134	(6.2)	2.4	1.9	1	4	54	A	M18区	ノミ、クシ目
135	(8.5)	2.5	0.9~2.2	1	4	71	A	J18区	クシ目
136									
137	12.3	3.1	3.5	1	3	148	A	P15区	ノミ
138	12.2	2.3	2.5	3	2	151	A	P14区(大型竪穴跡)	ノミ
139	11.8	5.1	2.8	2	2	211	A	P14区(4号土器状遺構)	ノミ
140	11.3	3.7	2.6	3	1	122	C	K19区(1号塚)	ノミ
141	11.5	3.0	3.2	2	2	135	A	表採	ノミ
142	15.2	3.2	3.2	1	2	168	A	Q15区	ノミ
143	7.1	5.1	3.0	4	—	84	C	K19区	ノミ
144	12.0	3.5	4.0	2	2	217	A	O15区	ノミ
145	13.7	5.0	3.0	1	2	199	A	Q14区	ノミ
146	7.3	4.2	2.6	3	1	109	A	Q17区	ノミ
147	13.5	3.3	2.9	2	2	168	C	P15区	クシ目
148	12.6	2.9	3.0	4	—	118	A	P17区(3号土器状遺構)	クシ目
149	9.3	3.8	3.1	1	3	139	C	P17区(3号土器状遺構)	ノミ
150	15.4	5.4	3.5	4	1	316	A	表採	ノミ
151	16.9	5.0	3.7	2	2	356	A	P14区(4号土器状遺構)	ノミ
152	10.1	3.2	3.0	1	3	120	A	P13区(4号土器状遺構)	クシ目
153	12.8	3.0	3.3	1	2	235	A	P15区	ノミ
154	10.4	4.6	3.0	3	1	233	A	Q14区(4号土器状遺構)	ノミ
155	11.0	4.7	2.2	1	2	150	A	Q16区(3号土器状遺構)	ノミ
156	10.5	4.7	3.0	2	2	142	A	表採	ノミ
157	9.0	3.9	3.0	2	2	174	A	P15区	ノミ
158	14.9	3.0	3.1	1	3	205	A	R15区(8号地下式坑)	ノミ
159	9.7	3.6	2.4	2	2	111	A	J18区	ノミ、クシ目
160	10.5	4.0	3.5	1	3	189	A	P15区(大型竪穴跡)	ノミ
161	11.1	3.3	3.0	3	1	139	A	P15区(1号遺跡)	ノミ
162	12.6	3.1	3.1	1	3	165	A	Q15区(大型竪穴跡)	ノミ
163	11.2	4.1	3.2	1	2	180	A	R15区(8号地下式坑)	ノミ
164	13.8	2.7	2.4	3	1	131	A	Q15区	ノミ
165	13.5	2.4	3.4	1	2	162	A	R15区(8号地下式坑)	ノミ
166	13.1	3.8	2.6	2	1	178	A	R15区(8号地下式坑)	ノミ
167	11.5	3.6	2.6	4	—	137	A	P20区	ノミ
168	10.6	2.9	2.9	1	3	131	C	Q14区	ノミ

番号	長辺(cm)	短辺(cm)	厚さ(cm)	研ぎ面	整形面	重量(g)	石質	出土位置	備考
169	13.2	4.4	2.7	4	—	185	A	P14区(4号土器状遺構)	
170	7.8	2.9	2.4	1	3	103	A	J19区	ノミ
171	9.1	4.0	2.1	3	1	123	A	7号地下式坑	ノミ、クシ目
172	9.4	3.2	2.6	2	2	131	A	P15区(大型堅穴跡)	ノミ
173	11.8	3.0	2.3	2	1	122	A	S19区	ノミ
174	5.6	3.6	1.3	4	—	60	A	表採	ノミ
175	10.7	4.3	3.6	3	—	199	A	Q19区	ノミ
176	10.0	3.7	2.0	3	—	177	A	P20区	ノミ
177	11.6	3.8	2.6	2	2	175	A	P15区(大型堅穴跡)	ノミ
178	11.1	3.0	2.1	3	1	87	C	P15区	ノミ
179	7.8	3.2	1.8	4	—	53	A	J19区	ノミ
180	10.9	4.1	2.5	2	—	152	A	O19区(大型堅穴跡)	ノミ
181	9.0	3.5	2.5	1	3	114	A	P16区(3号土器状遺構)	クシ目
182	9.5	3.1	2.6	4	—	89	A	P17区	ノミ
183	11.0	4.2	3.1	2	2	189	A	N21区(6号地下式坑)	No.209と接合、ノミ
184	7.0	3.2	3.0	1	4	119	C	Q16区(3号土器状遺構)	クシ目
185	4.0	5.2	1.4	1	3	60	A	P20区	ノミ
186	3.1	3.7	0.8	4	—	10	瓦	J19区(近世5号土坑)	
187	2.9	1.7	1.9	3	—	15	A	J19区(近世5号土坑)	
188	4.4	3.3	2.2	2	1	53	A	S19区(3号土器状遺構)	ノミ
189	3.2	2.3	2.2	1	1	35	A	K18区	クシ目
190	3.1	4.0	1.6	2	2	39	A	N18区(9号堅穴跡)	クシ目
191	4.0	4.2	1.0	4	1	30	A	J18区	
192	4.2	3.9	2.2	1	4	62	A	表採	クシ目
193	6.8	5.5	1.3	1	2	80	A	Q20区	ノミ
194	3.5	2.0	1.2	1	3	12	A	J18区	ノミ
195	4.8	2.9	2.7	3	—	39	A	O15区	ノミ
196	4.5	4.0	2.0	1	4	63	A	J19区	ノミ
197	3.4	3.4	2.1	1	3	33	A	Q14区(4号土器状遺構)	ノミ
198	5.8	2.4	1.8	4	1	44	A	M20区	ノミ
199	2.6	2.2	3.3	1	1	24	A	表採	クシ目
200	5.5	2.7	1.8	3	1	29	A	K17区(2号土器)	ノミ
201	5.0	3.5	1.6	2	2	41	B	J18区	ノミ、クシ目
202	3.6	2.9	2.0	1	2	28	A	表採	ノミ
203	4.2	3.2	1.3	2	1	28	A	R16区(3号土器状遺構)	ノミ
204	2.7	2.8	1.8	3	1	21	A	J19区(近世5号土坑)	クシ目
205	2.8	2.3	2.3	2	2	30	A	P16区(3号土器状遺構)	ノミ
206	2.6	2.4	2.0	1	3	17	A	P19区	クシ目
207	4.2	2.2	0.7	1	—	10	A	J18区	
208	4.2	2.7	1.0	1	3	18	A	P14区(大型堅穴跡)	ノミ
209									
210	3.0	2.0	2.1	1	2	13	A	Q18区	ノミ
211	1.9	2.5	0.7	3	1	9	A	Q16区	クシ目
212	4.5	4.0	1.9	3	—	41	瓦	N21区(6号地下式坑)	第54図
213	7.1	1.9	1.7	2	—	28	瓦	S15区	

第9表 銭貨一覧表

[] 現存值

番号	銭貨名	初陣年	出土位置	直径(cm)	重量(g)	備考
1	明道元宝	北宋・1032	8号地下式坑	2.39	21	
2	寛永通宝	寛文8・1668	18号地下式坑(1)	2.47	34	新寛永
3	寛永通宝	寛保元・1741	18号地下式坑(2)	2.21	1.7	背「元」、新寛永
4	至道元宝	北宋・995	大型竅穴跡(1)	2.41	1.8	
5	至和元宝	北宋・1054 ~ 1055	大型竅穴跡(2)	2.28	[1.5]	
6	〇宋〇宝	北宋・1039	大型竅穴跡(3)	—	[1.0]	「皇宋通宝」?
7	寛永通宝	寛永13・1636	3号礎石建物跡	2.40	1.9	古寛永
8	寛永通宝	寛文8・1668	1号塚	2.23	2.3	新寛永
9	寛永通宝	寛文8・1668	3号土塁状遺構(1)	2.33	2.3	新寛永
10	寛永通宝	寛文8・1668	3号土塁状遺構(2)	2.23	[1.4]	新寛永
11	寛永通宝	寛文8・1668	3号土塁状遺構(3)	[2.12]	[1.4]	新寛永?
12	寛永通宝	寛永13・1636	4号土塁状遺構(1)	2.27	2.6	古寛永
13	不明	—	4号土塁状遺構(2)	2.05	0.9	方孔を円孔に加工? 拓本に文字出ず
14	寛永通宝	寛文8・1668	1号炭層跡	2.27	1.7	新寛永
15	寛永通宝	寛保元・1741	近世3号土坑	2.27	1.7	背「元」、新寛永
16	寛永通宝	寛文8・1668	近世5号土坑	2.45	[1.7]	新寛永
17	寛永通宝	寛文8・1668	J17区	2.42	2.3	新寛永
18	寛永通宝	寛文8・1668	J19区(1)	2.50	2.8	背「文」、新寛永
19	寛永通宝	寛文8・1668	J19区(2)	2.27	[1.1]	新寛永、平欠
20	寛永通宝	寛文8・1668	J19区(3)	2.51	2.7	背「文」、新寛永
21	寛永通宝	寛文8・1668	J19区(4)	2.33	2.3	新寛永
22	寛永通宝	寛文8・1668	J19区(5)	2.28	1.9	新寛永
23	寛永通宝	寛文8・1668	K18区	2.45	2.3	新寛永
24	寛永通宝	寛永13・1636	K19区	2.38	3.0	古寛永
25	寛永通宝	寛文8・1668	K19区	2.38	2.1	新寛永
26	大平通宝	北宋・976	K25区	2.43	2.3	
27	寛永通宝	寛永13・1636	M20区	2.33	2.7	古寛永
28	寛永通宝	寛文8・1668	O15区	2.41	2.2	新寛永
29	寛永通宝	寛文8・1668	O18区	2.13	1.5	新寛永
30	寛永通宝	寛文8・1668	O19区	2.47	2.3	新寛永
31	寛永通宝	寛文8・1668	P17区	2.21	2.3	新寛永
32	寛永通宝	寛文8・1668	P21区	2.54	2.7	背「文」、新寛永
33	寛永通宝	寛永13・1636	P22区(1)	2.43	3.3	古寛永
34	寛永通宝	寛文8・1668	P22区(2)	2.35	2.8	新寛永
35	文久永宝	文久3・1863	Q17区	2.58	2.3	背「11波」、四文銭
36	寛永通宝	寛文8・1668	Q17区	2.26	[1.2]	新寛永
37	寛永通宝	寛永13・1636	Q18区	2.48	3.1	古寛永
38	永樂通宝	明・1408	R18区	2.55	[2.4]	
39	寛永通宝	寛文8・1668	R18区	2.16	2.8	新寛永
40	開元通宝	唐・621	表採	2.42	[1.7]	
41	皇宋通宝	北宋・1038	表採	2.40	2.7	
42	元祐通宝	北宋・1086	表採	2.46	3.1	
43	永樂通宝	明・1408	表採	2.48	2.7	
44	寛永通宝	寛永13・1636	表採	2.39	2.6	古寛永
45	寛永通宝	寛永13・1636	表採	2.43	2.7	古寛永
46	寛永通宝	寛永13・1636	表採	2.42	1.9	古寛永
47	寛永通宝	寛永13・1636	表採	2.42	3.2	古寛永
48	寛永通宝	寛永13・1636	表採	2.44	3.6	古寛永
49	寛永通宝	寛永13・1636	表採	2.42	3.2	古寛永
50	寛永通宝	寛永13・1636	表採	2.45	3.4	古寛永
51	寛永通宝	寛永13・1636	表採	2.38	3.1	古寛永
52	寛永通宝	寛永13・1636	表採	2.35	2.1	古寛永
53	寛永通宝	寛永13・1636	表採	2.38	3.4	古寛永
54	寛永通宝	寛文8・1668	表採	2.24	1.8	新寛永
55	寛永通宝	寛保元・1741	表採	2.24	1.9	背「元」
56	寛永通宝	寛文8・1668	表採	2.25	1.6	新寛永
57	寛永通宝	寛文8・1668	表採	2.30	2.3	新寛永
58	寛永通宝	寛文8・1668	表採	2.19	1.8	新寛永
59	文久永宝	文久3・1863	表採	2.66	3.3	背「11波」、四文銭

第10表 出土遺物観察表(土製品)

[] 現存値、() 推定値、単位 cm

番号	種別	器種	幅	高さ	厚さ	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土製品	土人形	[68]	[53]	37	雲母・赤褐色粒	橙色	普通	型造り、前後合わせ、女性座像	Q22区	下部破？ 顔部欠失
2	土製品	土人形	[53]	[77]	25	雲母・黒色砂粒	にがい橙色	普通	型造り、前後合わせ、女性立像に幼児と赤子	Q15区	左臂部破？ 顔部欠失
3	土製品	土人形	[65]	[67]	27	雲母・赤褐色粒	褐色	普通	型造り、前後合わせ、女性座像	Q15区	下部破？ 顔部欠失
4	土製品	泥めんこ	4.3	4.8	1.4	雲母	橙色	良好	型おこし	R16区(3号 土器状遺構)	ひるま
5	土製品	泥めんこ	2.6	3.6	0.8	雲母・赤褐色粒	橙色	普通	型おこし	R16区(3号 土器状遺構)	般若？
6	土製品	泥めんこ	2.2	2.5	0.6	黒色砂粒	橙色	普通	型おこし	R16区(3号 土器状遺構)	人(鬼)面
7	土製品	泥めんこ	2.1	2.5	0.5	雲母	橙色	普通	型おこし	R16区(3号 土器状遺構)	人面
8	土製品	泥めんこ	2.1	2.5	0.8	雲母	橙色	普通	型おこし	P16区(1号 灰塞物)	人(鬼)面
9	土製品	泥めんこ	1.7	2.1	0.5	雲母	橙色	普通	型おこし	Q17区(3号 土器状遺構)	ひよっこ？ 人面
10	土製品	泥めんこ	2.3	3.2	0.8	雲母・赤褐色粒	橙色	普通	型おこし	R16区(3号 土器状遺構)	人面
11	土製品	泥めんこ	2.1	2.8	0.6	雲母	橙色	普通	型おこし	R16区(3号 土器状遺構)	人面
12	土製品	泥めんこ	2.1	2.9	0.6	黒色砂粒	橙色	普通	型おこし	P16区(3号 土器状遺構)	顔
13	土製品	泥めんこ	2.1	2.2	0.9	雲母	橙色	普通	型おこし	M20区(7号 地下式坑)	でんでん太鼓
14	土製品	泥めんこ	2.2	2.4	0.9	雲母	黄橙色	普通	型おこし	R16区	不明
15	土製品	泥めんこ	2.2	(2.2)	0.3	雲母	橙色	普通	型おこし	Q16区(3号 土器状遺構)	不明
16	土製品	泥めんこ	2.1	2.3	1.0	雲母・赤褐色粒	橙色	普通	型おこし	N20区(8号 地下式坑)	十文字

第三章 まとめ

第1節 土地利用の変遷

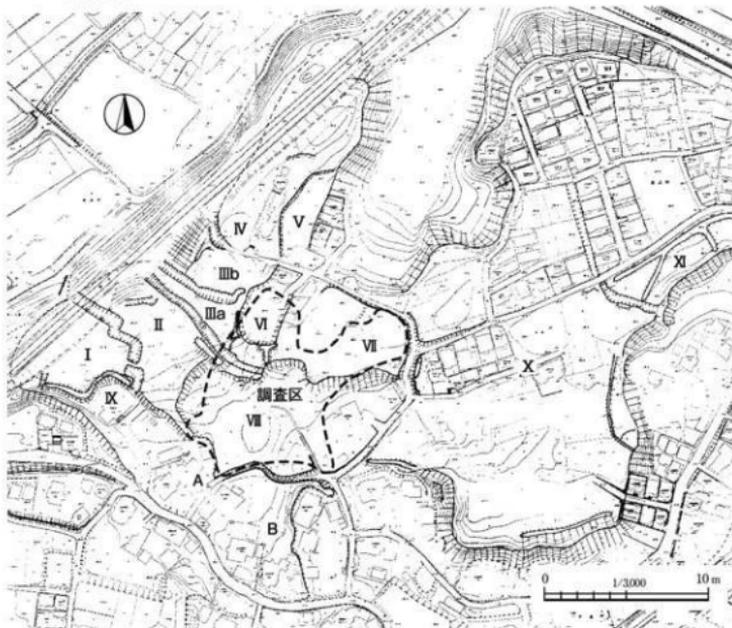
今次調査は、前述の通り開発予定地の東半部にあたり、西半部を対象とした第1次調査に継続して実施したものである。しかし、調査区が台地上部と南東斜面という地理的条件、これに伴う近世以降の土地利用状況の相違から、調査成果にも相応の違いが生じている。

まず、弥生時代末葉～古墳時代後期にわたる集落跡では、第1次調査で52軒の堅穴住居跡が確認されたが、今次調査区では僅かに2軒で、それぞれ部分的な遺存であった。南東斜面という立地条件からすれば、存在しなかったのではなく、後世の地形改変によって消失したと見るのが妥当かと思われる。

次に、中世の動向として、第1次調査区ではⅠ～Ⅳ期の変遷が示されている。略記すると次の通りである。

Ⅰ期：墓城として地下式墳や土墳が設けられ（15世紀前～後半）、その後葉に4号堀が開削されて城郭としての歴史が始まる。

Ⅱ期：2・3・5号堀が開削され、基本的な城の縄張りが確定する（15世紀末～16世紀前半）



第60図 高品城跡概念図（1：3,000）

Ⅲ期：5号堀が埋められて、新たに1号堀が開削される（16世紀中頃）

Ⅳ期：城郭の最終段階として、主郭の虎口、土塁などの改装が加えられる（16世紀後葉）

本城跡の南に隣接する等覚寺の本尊である薬師如来坐像の銘文に見られる元亀2（1571）年がⅣ期に相当すると推定される。また、この銘文にある「大旦那安藤勘由殿」が当時の城主と考えられ、その家臣と見られる人々の名も印されている。

I期の地下式坑（竈）については、第1次調査区で25基、今次調査区で21基とほぼ同様の分布を示し、形態の変化や時期的にも類似性を示す。しかし、Ⅱ～Ⅳ期の変遷に合致するような詳細な成果は得られていない。殊に今次調査区は、第60図に見るようにⅥ～Ⅷ郭で外郭部にあたり、堀や土塁は設けられておらず、地下式坑を中心とする墓域の造成時に形成されたと思われる段切を踏襲した区画施設の郭である。さらに、近世以降の土地利用に際して、地下式坑の削平や3・4号土塁状遺構の形成に見るような大きな地形の改変が行われた結果と推察される。

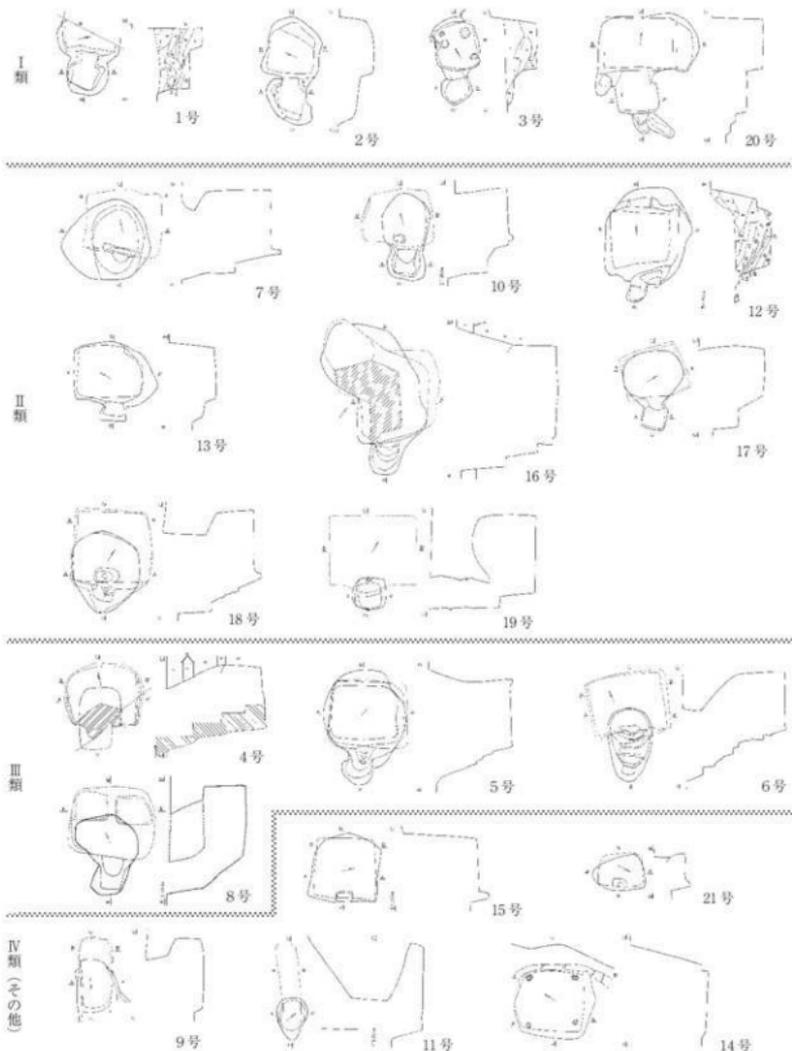
このような状況から、確認された遺構を出土遺物によって帰属時期を明確にし得たものは少なく、遺構の形状や覆土の類似性などによって判断したものも多い。

なお、第1次調査では見られなかった井戸跡が今次調査区では計13基確認された。一般に地下式坑を主体とする墓域では井戸がセットで確認される例が多く、今次調査区もその一つである。これらの井戸の中には、城や近世集落に伴う井戸が含まれている可能性も否めないが、それぞれの違いはどこにあるのか興味深い。

千葉氏の滅亡とともに廃城となり、その後は近世集落＝屋敷地として利用された。初期には掘立柱建物であったが、後には礎石建物となる。柱の位置に浅い掘り込みを設け、貝殻を築き固めた上に礫などを据えて、礎石としていた。2期の建て替えが確認され、間取りも比較的複雑である。最も新しい3号礎石建物跡は戦前まで使用されていたもので、北東部にカマドが設けられていた。この建物の北約10mに別棟の厩跡が確認されたが、上屋については判然としない。1号跡は出土遺物より17世紀中頃の所産と推定される。また、1～3号礎石建物跡の北約40m、近世1号掘立柱建物跡の北約12mには1号塚が築かれ、各種の石祠が祀られていた。さらに、調査区西側には、建物の建築などに伴う整地で発生した土砂を積み上げた3・4号土塁状遺構が造られた。4号土塁状遺構の脇に1号池跡があり、前記の1号塚西側の近世2・3号土坑も、池もしくは水溜に近い存在である。このような景観の中で、近世の人々の生活が営まれたことが知られる。

第2節 地下式坑について

地下式坑は、第1次調査で25基、今次調査で21基確認された。前者ではⅠ・Ⅱ群とに大別され、Ⅱ群よりⅠ群への変遷が想定されている。しかし、今次調査区では、調査区全体に分布し、前者のようなまとまりで捉えることが出来ない。また、前者では竪坑部と室部の位置関係より新旧関係を想定し、上記の決論に至っている。今次調査区の地下式坑を、竪坑部と室部の位置関係で分類したものが第61図である。Ⅰ類は、第1次調査のⅡ群に相当するもので、竪坑部から室部に至る際に室部に設けられた出入口部を通ることになる。Ⅲ類は、竪坑部を下ると室部天井を通して直接室部に至る。Ⅱ類は、その中間形態で一旦



- I類 壘坑部から室部に至る際、壁に設けられた出入口を通過する。
 II類 壘坑部から直接室部に至るタイプ。壘坑部の途中に平坦面が設けられ、その下方は階段状となっている。
 III類 壘坑部が急傾斜で階段状。
 IV類 (その他) a 壘坑部の状況が不明、b 室部が幅狭で天井が低いトンネル状、c 室部底面の四隅に礎を据え礎石とし、柱を建てて天井を支えていた。

第 61 図 地下式坑集成図

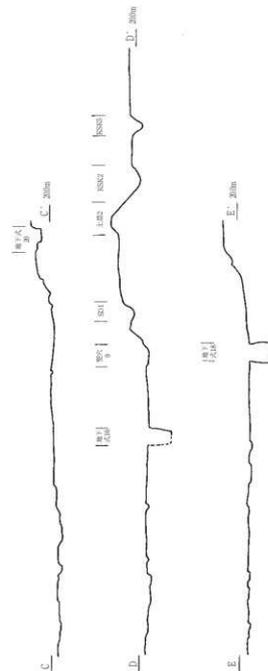
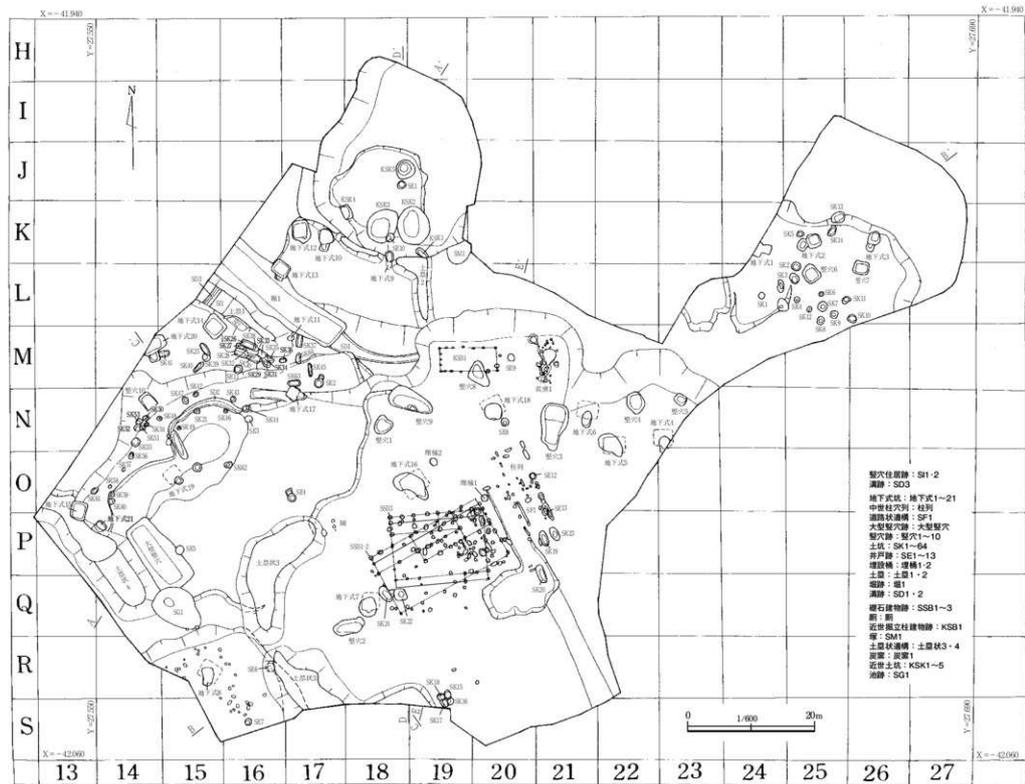
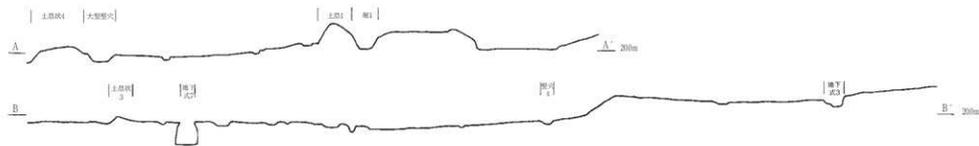
堅坑部の底面に至るものの、再び下りて直接室部に入る。Ⅱ・Ⅲ類は、第1次調査のⅠ群に相当する。Ⅳ類はその他、分類に合致しないタイプである。

地下式坑は、「坑」「塚」の文字使用にこだわるように用途にも諸説あり（東国中世考古学研究会編 2009）、一様ではない。大きく分けて「葬送」に伴うものと「貯蔵」施設とがあり、それぞれの遺跡・遺構における検討が必要と考えられる。本遺跡では第1次調査においても、今次調査においても「葬送」に伴う施設との考え方では合致する。昨今の研究では室部形状の形態分類で機能追求が試みられ、種々の成果が得られている（前掲載）。その中において、堅坑と室部の連結の在り方が機能を判断する指標となる。今次調査区では、前節で記した通り、築城及び近世の造成などにより後世の影響を大きく受けていた。後世に、ゴミ穴として転用された為、近世～近代の遺物が出土したものの、室部内より遺物の出土はほとんどなく、まれに石塔類の部材が見られたのみである。貯蔵施設の場合は、階段などのような収納物の出し入れの便を考慮する必要が求められるが、葬送に関する施設であれば出し入れはそれぞれ1度だけで、強く意識する必要がなかったと推察される。また、室部の壁面に掘削時の工具痕が明確に残されていたことから、貯蔵施設と見るよりも葬送に関する施設と考えるのが妥当と思われる。

なお、室部の四隅に礎石状の礎を据えて柱を立てたと考えられる14号地下式坑は、木材などによって天井を設け、それを土で被った可能性をもつ。また、堅坑部と接する付近の室部底面に掘り込みを設けたものが複数見られた。外部からの水対策か、出入口の閉塞に関連する施設と思われるが現段階では判然としない。

同一の特徴をもつ地下式坑の分布にまとまりをもつ台地上の第1次調査区の地下式坑群と、異なる特徴をもつ地下式坑が少ない数で分散する今次調査区の地下式坑群の在り方は、時期的なものではなく、造営した集団の規模などと関連するものと推考する。

さらに、前述の通り、第1次調査区では井戸跡が確認されておらず地下式坑群と井戸跡の組み合わせを見ることが出来なかったのに反し、今次調査区では井戸跡の点在が認められ、地下式坑群と井戸跡の組み合わせが想定される。両者の相緯がいかなる事情によるものかは明確にし難い。



第62図 高品城跡遺構配置図(1:600)

写 真 図 版



空中写真（調査区全景）



A. 調査区遠景 (東から)



B. 調査区遠景 (東から)

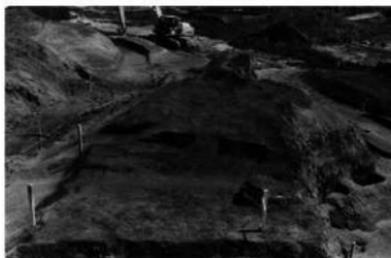
図版2



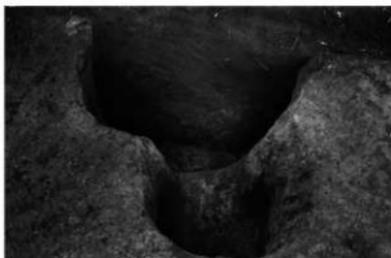
A. 調査区遠景 (西から)



B. 調査区遠景 (東側、東から)



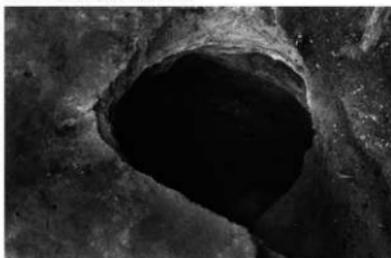
A. 1号竪穴住居跡、3号溝跡、1号土塁 (北から)



B. 1号地下式坑 (東から)



C. 3号地下式坑 (南から)



D. 4号地下式坑 (南西から)



E. 4号地下式坑北壁工具痕 (南から)



F. 4号地下式坑遺物出土状態 (南西から)



G. 6号地下式坑 (南から)



H. 6号地下式坑室部 (南西から)

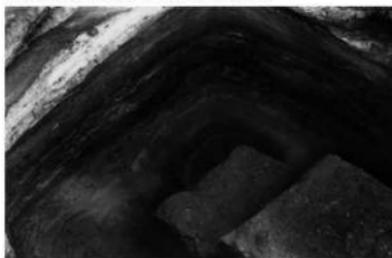
図版 4



A. 6号地下式坑北壁工具痕 (南から)



B. 8号地下式坑 (南西から)



C. 8号地下式坑室部 (西から)



D. 9号地下式坑 (北から)



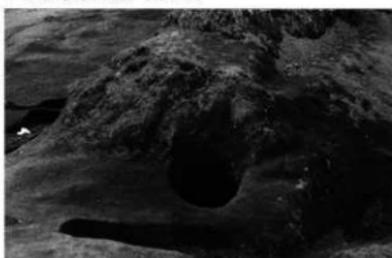
E. 10・12号地下式坑 (南東から)



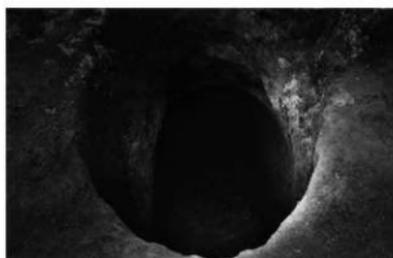
F. 10号地下式坑 (南から)



G. 12号地下式坑 (南から)



H. 11号地下式坑遠景 (北東から)



A. 11号地下式坑 (東から)



B. 13号地下式坑 (南西から)



C. 14号地下式坑室部 (南から)



D. 16号地下式坑 (南から)



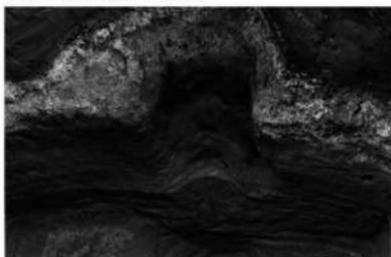
E. 16号地下式坑室部 (西から)



F. 17号地下式坑 (南から)



G. 18号地下式坑 (南東から)

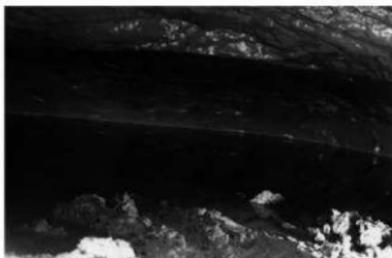


H. 18号地下式坑竪坑部足掛け穴 (北から)

図版 6



A. 19号地下式竪坑部 (南東から)



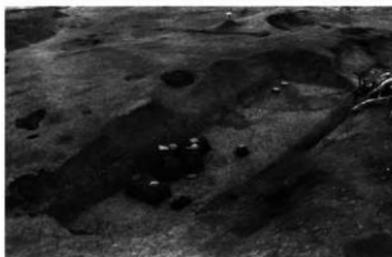
B. 19号地下式坑室部 (南東から)



C. 20号地下式坑 (南東から)



D. 21号地下式坑 (北東から)



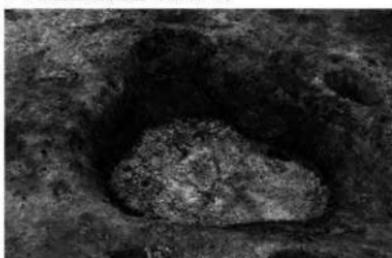
E. 大型竪穴跡 (北西から)



F. 大型竪穴跡土層 (北西から)



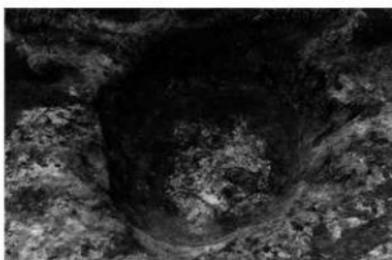
G. 中世柱穴列、道路状遺構 (北から)



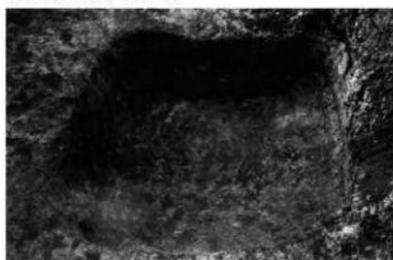
H. 8号竪穴跡 (南から)



A. 3号豎穴跡 (東から)



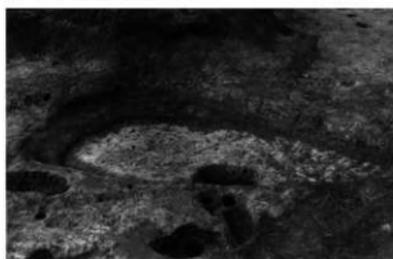
B. 4号豎穴跡 (南東から)



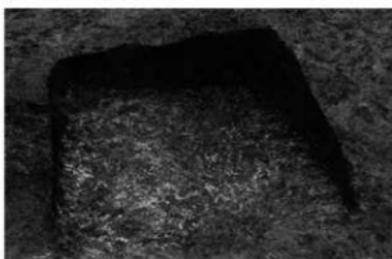
C. 5号豎穴跡 (南東から)



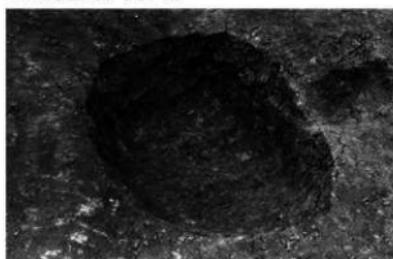
D. 7号豎穴跡 (南から)



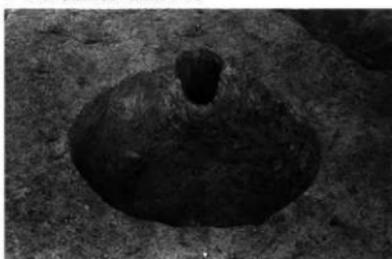
E. 9号豎穴跡 (南から)



F. 10号豎穴跡 (南東から)

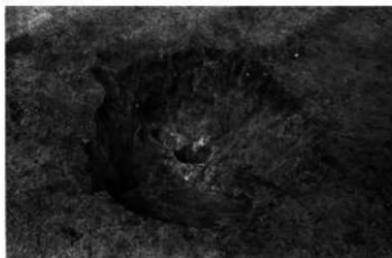


G. 1号土坑 (南から)



H. 11号土坑 (南から)

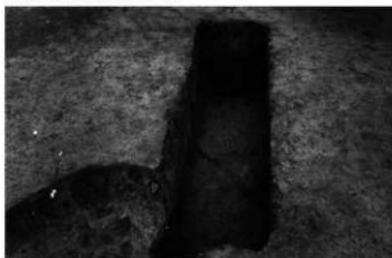
図版 8



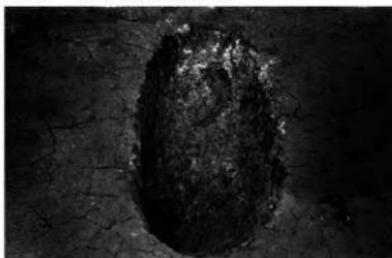
A. 9号土坑 (北西から)



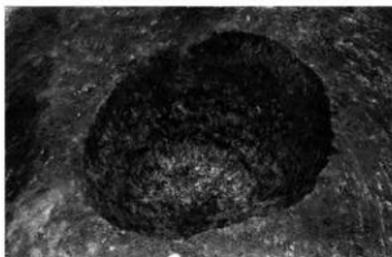
B. 15～18号土坑 (北西から)



C. 25号土坑 (南東から)



D. 62号土坑 (西から)



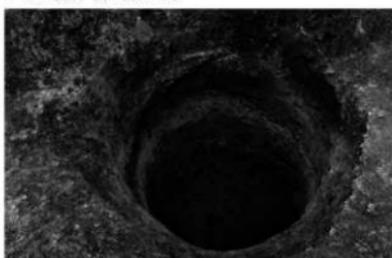
E. 5号井戸跡 (南東から)



F. 1号井戸跡 (東から)



G. 2号井戸跡 (南から)



H. 3号井戸跡 (南から)



A. 6号井戸跡 (西から)



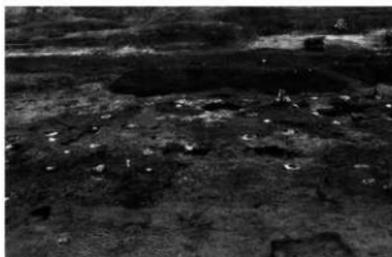
B. 9号井戸跡 (南から)



C. 1号埋設桶 (南東から)



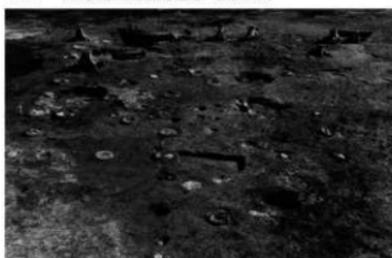
D. 2号埋設桶 (南東から)



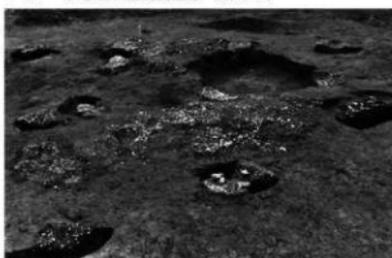
E. 1～3号礎石建物跡全景 (南から)



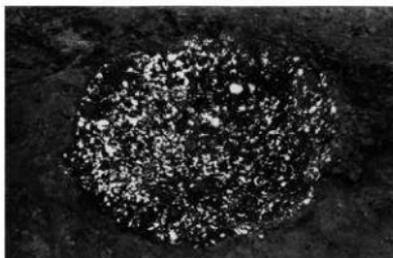
F. 1～3号礎石建物跡全景 (北から)



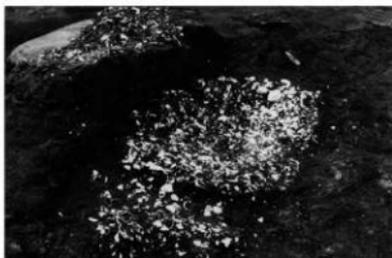
G. 1～3号礎石建物跡全景 (西から)



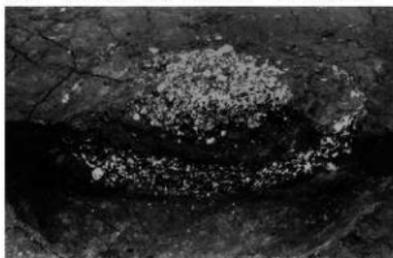
H. 1～3号礎石建物跡貝殻・礎石確認状態 (南西から)



A. 1・2号礎石建物跡・礎石掘方へ4 (南から)



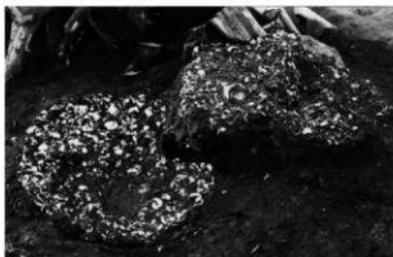
B. 1・2号礎石建物跡・礎石掘方へヌ1 (南から)



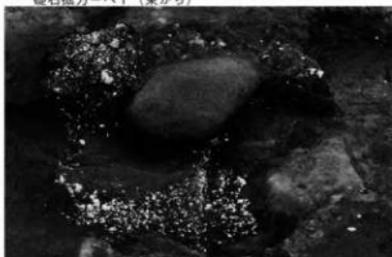
C. 1・2号礎石建物跡・礎石掘方へト3 (南から)



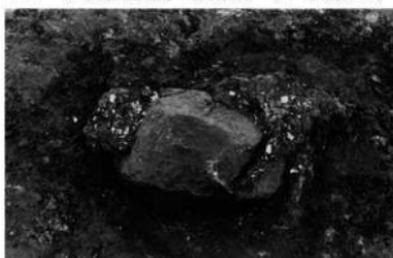
D. 1・2号礎石建物跡・礎石掘方へリ1、3号礎石建物跡・礎石掘方へハ1 (東から)



E. 1・2号礎石建物跡・礎石掘方へリ1 (南東から)



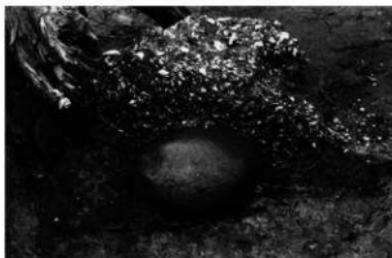
F. 3号礎石建物跡・礎石掘方へイ4 (南から)



G. 3号礎石建物跡・礎石掘方へイ7 (南から)



H. 3号礎石建物跡・礎石掘方へロ4 (南から)



A. 3号礎石建物跡・礎石掘方一リ6 (東から)



B. 3号礎石建物跡・礎石掘方一リ7 (南から)



C. 3号礎石建物跡カマド跡 (南東から)



D. 3号礎石建物跡跡跡全景 (南東から)



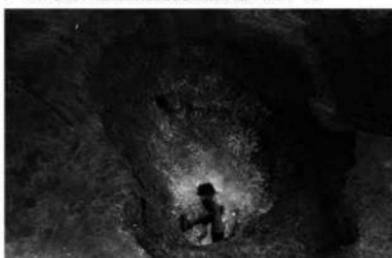
E. 3号礎石建物跡厠跡小便器出土状態 (東から)



F. 3号礎石建物跡厠跡糞埋設状態 (東から)



G. 3号礎石建物跡厠跡土瓶出土状態 (東から)



H. 近世2号土坑 (北から)



A. 近世5号土坑（北から）



B. 1号塚（南西から）



C. 3号土塁状遺構（北東から）



D. 3号土塁状遺構南側貝殻分布状態（北西から）



E. 3号土塁状遺構土層断面（南から）



F. 3号土塁状遺構土層断面（南東から）



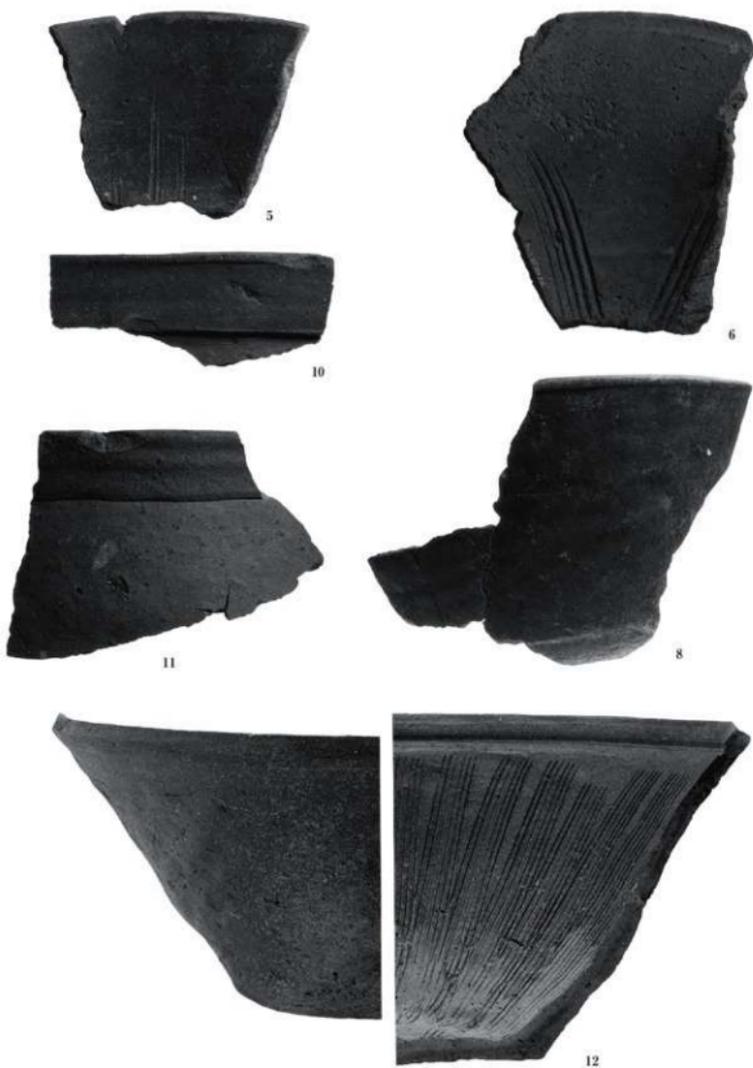
G. 整地層トレンチ（南から）



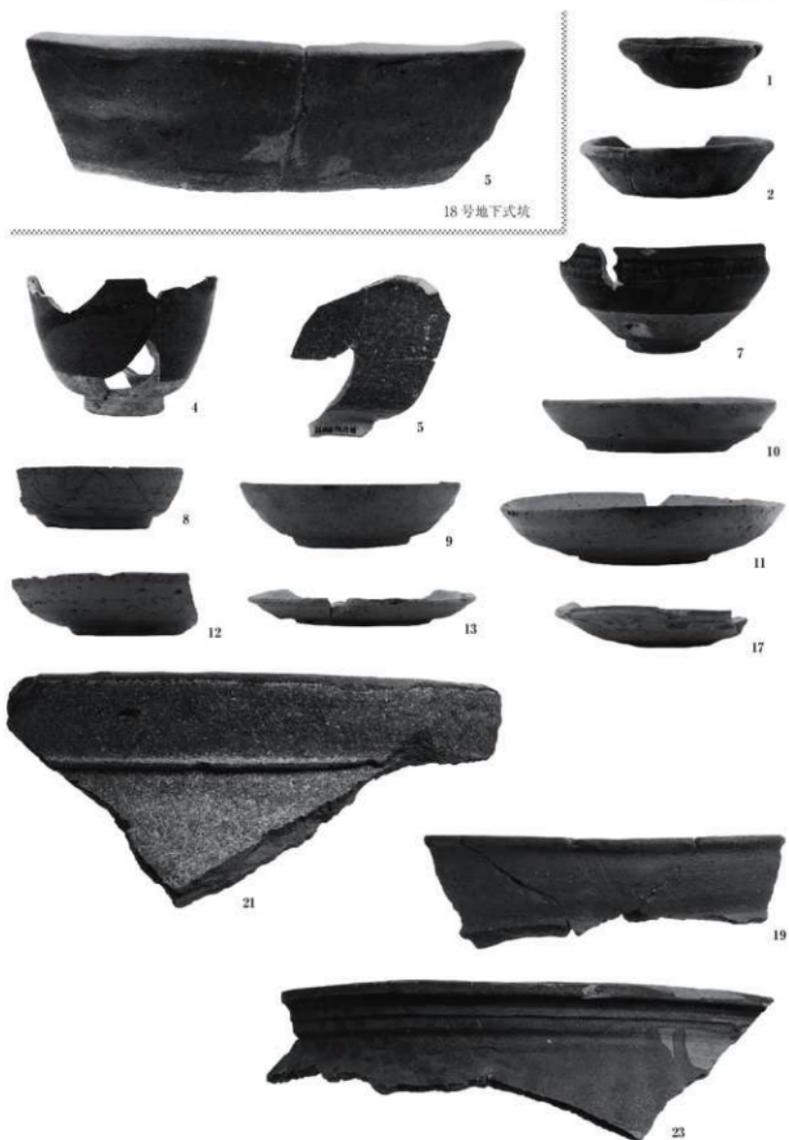
H. 整地層トレンチ断面（東から）



1・2号竖穴住居跡・4・6(1)号地下式坑出土遺物



6号地下式坑出土遺物(2)



大型竖穴葬(1)



大型竪穴跡出土遺物（2）

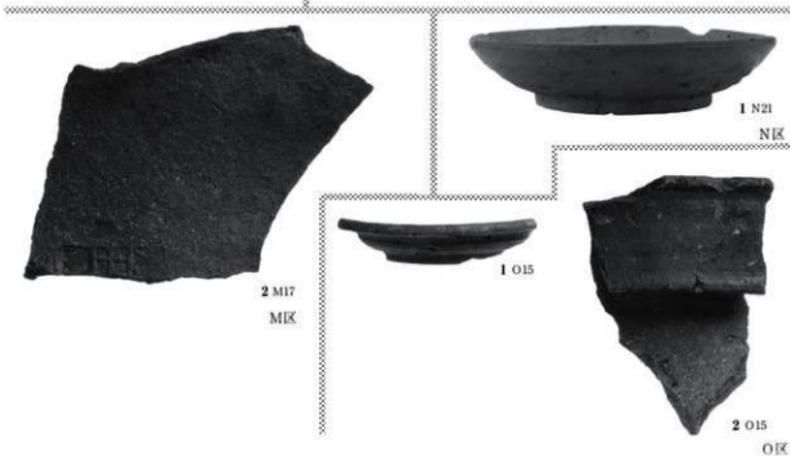


1·3·5·8·9号整穴跡·19·20号土坑·11号井戸跡出土遺物

図版18

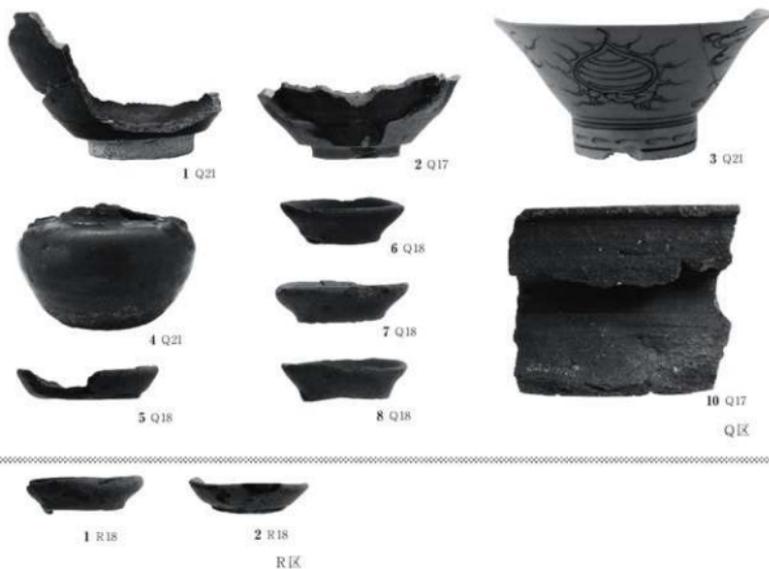


1～3号礎石建物跡・1号塚・1号池跡・近世2・3号土坑・3号土壘状遺構出土遺物



4号土壘状遺構・グリット(1)出土遺物

図版20



グリット出土遺物 (2)



2 3号土器状遺構



3 3号土器状遺構



5 大型堅穴跡



119 P14

硯



9 1号灰濠跡



29 M19



34 M18



104 Q17

1/2 砥石



1 Q22



2 Q15



5 3号土器状遺構



6 3号土器状遺構



7 3号土器状遺構



8 1号灰濠跡



9 3号土器状遺構



10 3号土器状遺構



11 3号土器状遺構



12 3号土器状遺構



3 Q15



4 3号土器状遺構



13 7号地下式坑



14 R16



15 3号土器状遺構



16 8号地下式坑

1/2 土人形・泥めんこ

硯、砥石、土人形、泥めんこ

图版22



1 8号地下式坑



2 18号地下式坑



3 18号地下式坑



3R



4 大型穿孔



5 大型穿孔



7 3号磁石建物跡



8 1号塚



9 3号土器状遺構



10 3号土器状遺構



11 3号土器状遺構



13 4号土器状遺構



16 近世5号土坑



17 J17



18 J19



18R



20 J19



20R



21 J19



23 K18



24 K19



25 K19



26 K25



27 M20



28 O15



29 O18



30 O19



31 P17



32 P21



32R



33 P22



34 P22



35 Q17



35R



36 Q17



37 Q18



38 R18



39 R18



43 表採



44 表採



45 表採



46 表採



47 表採



48 表採



49 表採



50 表採



51 表採



52 表採



53 表採



54 表採



55 表採



56 表採



57 表採



58 表採



59 表採



59R

報告書抄録

ふりがな	ちばしたかしなじょうあと							
書名	千葉市高品城跡Ⅱ							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	河野一也 吉岡秀範 宮重俊一 栗田欣行 水野順敏							
編集機関	株式会社日本竊業史研究所							
所在地	〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂 3112 TEL 0287-93-0711							
発行年月日	西暦 2021 (令和3) 年 2 月 25 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高品城跡 <small>たかしなじょうあと</small>	千葉県千葉市若葉区 <small>ちばけんちばしわかばく</small> 高品町 461-2 外 <small>たかしなじょう</small>	121045	若葉区 57	35° 37' 16"	140° 8' 20"	19951201 / 19960329	8,400 m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高品城跡 (第2次調査)	集落跡	古墳時代	堅穴住居跡	2軒	・土師器 ・須恵器 ・中・近世陶磁器 ・中・近世土器 ・石製品 ・銭貨 ・土製品	・中世城跡を調査対象の中心とするものであったが、近世以降の土地利用が活発に行われていて、近世の遺構・遺物の占める割合が大きくなった。		
	城跡	中世	溝跡	1条				
			地下式坑	21基				
			大型堅穴跡	1基				
			堅穴跡	10基				
			土坑	64基				
			井戸跡	13基				
			土塁	2条				
			堀跡	1条				
			溝跡	2条				
	集落跡	近世	礎石建物跡	3棟				
			掘立柱建物跡	1棟				
			塚	1基				
			土坑	5基				
			池跡	1基				
			他					
要約	<p>・台地上の第1次調査区では、弥生時代末～古墳時代後期にわたる堅穴住居跡が52軒と密度の濃い集落跡であったが、今次調査区では僅かに2軒の堅穴住居跡が確認されたに過ぎず、後世の土地利用により消失したと考えられる。</p> <p>中世の城跡及び墓域に関する遺構としては、地下式坑、井戸跡、大型堅穴跡、中世土坑群などが確認されたものの、第1次調査区のような堀・土塁の改修など大きな変遷を確認することは出来なかった。</p> <p>・近世集落跡を確認し、遺物も近世・近代のものが主体を占める。</p>							

千葉市高品城跡Ⅱ

発行年月日 2021（令和3）年2月25日

編集・発行 大和ハウス工業株式会社

千葉市教育委員会文化財課

〒260-8730 千葉県千葉市中央区問屋町1番35号

千葉ポートサイドタワー11階

TEL 043-245-5962

印刷 株式会社松井ビ・テ・オ・印刷

〒321-0904 栃木県宇都宮市陽東5-9-21